仙台市文化財調査報告書第237集

船渡前遺跡

——発掘調査報告書——

1999年 3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第237集

船渡前遺跡

——発掘調査報告書——

1999年 3月

仙台市教育委員会

II B区SD1（東より）

III区SI1（北より）

序　　文

日頃より、仙台市の文化財保護行政に対しまして、多大のご協力を頂き、担当する仙台市教育委員会にとりまして、誠に感謝にたえません。

富田地区は豊かな田園地帯であり、おもに近郊農業地帯として推移して参りましたが、近年は仙台市南部の副都心である長町・富沢地区の発展とともに新しく生まれ変わりつつあります。

この度の船渡前遺跡の調査は、こうした流れのなかで、昭和51年度に続く発掘調査として実施され、数々の貴重な成果が得られました。本報告書はその成果をまとめたものであります。

まもなく21世紀を迎えようとしているなかで、先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図りつつ後世に継承していくことは、私たちに課せられた責務と考えております。ここに報告する調査成果がこうした意味で研究者のみならず、市民の皆様に広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査並びに本報告書の刊行に際しまして、多くの方々のご協力、ご助言を頂きましたことを深く感謝申し上げ序といたします。

平成11年3月

仙台市教育委員会

教育長　小　松　弥　生

例　　言

1　本書は、仙台南部道路Ⅲ期事業に伴う、船渡前遺跡の発掘調査報告書である。

2　整理作業は、吉岡恭平、佐藤　淳、森　剛男が担当し、執筆（第４章を除く）は吉岡、写真撮影・写真図版は佐藤が担当した。なお、自然科学分析に関しては、㈱古環境研究所に依頼した。

3　発掘調査および報告書作成にあたっては、次の方々のご指導、ご助言、ご協力を賜った。

松本　秀明（東北大学理学部）　　宮城県道路公社

4　本発掘調査に関わる資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1　本書の土色については「新版標準土色帖」（小山、竹原1997）を使用した。

2　本書使用の地形図は国土地理院発行5万分の1「仙台」（平成8年）である。

3　本書中の北は真北を示している。

4　遺構の略称は次のとおりで、それぞれに通しNoを付けた。

ＳＩ：竪穴住居跡　　ＳＤ：溝跡　　ＳＢ：建物跡　　ＳＫ：土杭　　ＳＲ：河川跡

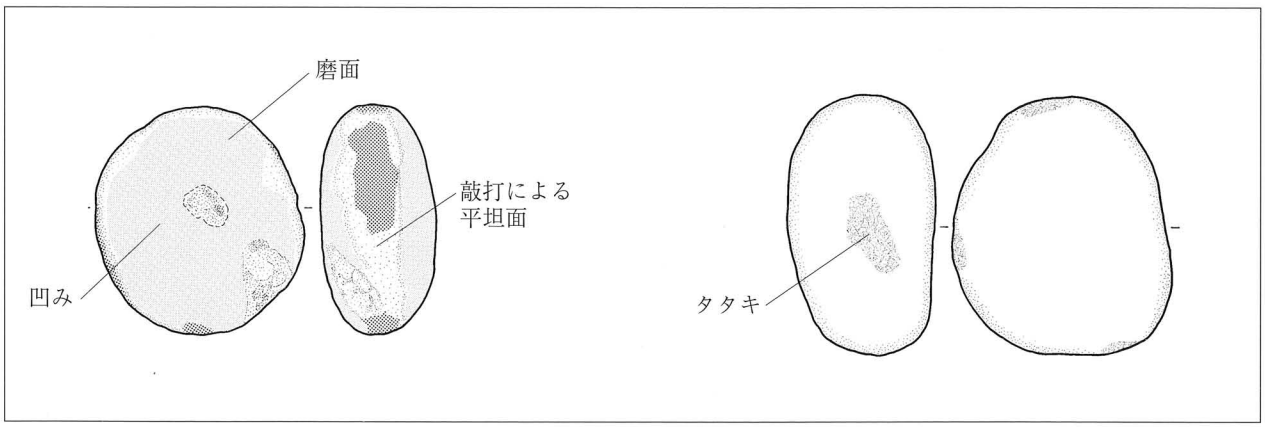
ＳＸ：性格不明遺構　　Ｐ：柱穴・ピット

5　遺物の略号は以下のとおりに表している。

Ａ：縄文土器　　Ｄ：ロクロ使用の土師器　　Ｅ：須恵器　　Ｊ：磁器　　Ｋ：石器

Ｐ：土製品

6　礫石器の使用痕の表示は以下のとおりである。



目　　次

第１章　はじめに ……1
　第１節　調査に至る経過 ……1
　第２節　調査要項 ……1
　第３節　位置と環境 ……1
　第４節　これまでの調査成果 ……4
第２章　確認調査 ……4
　第１節　確認調査の方法 ……4
　第２節　確認調査の結果 ……4
　　1　南東地区 ……6
　　2　中央地区 ……6
　　3　中央北地区 ……13
　　4　西地区 ……18
　　5　隣接北地区 ……19
　　6　隣接西地区 ……19
　　7　確認トレンチ出土遺物 ……20
第３章　本調査
　第１節　Ⅰ区 ……21
　　1　基本層序 ……21
　　2　遺構 ……21
　　3　基本層出土遺物 ……23
　第２節　Ⅱ区 ……26
　　1　基本層序 ……26
　　2　遺構 ……26
　第３節　Ⅲ区 ……34
　　1　基本層序 ……34
　　2　遺構 ……34
　第４節　Ⅳ・Ⅴ区 ……44
　　1　基本層序 ……44
　　2　遺構 ……44
　第５節　Ⅵ区 ……53
　　1　基本層序 ……53
　　2　遺構 ……53

目　　次

第４章　自然科学分析　　㈱古環境研究所 ……55
　第１節　船渡前遺跡における屈折率測定 ……55
　　1　はじめに ……55
　　2　屈折率測定 ……55
　　3　考察 ……55
　　4　小結 ……56
　第２節　船渡前遺跡における放射性炭素年代測定 ……56
第５章　まとめ ……58
　第１節　遺物について ……58
　第２節　遺構について ……58

引用参考文献
写真図版
報告書抄録

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

仙台南部道路は、東北縦貫自動車道と仙台湾岸を縦走する仙台東部道路とを接続する延長11kmの自動車専用道路である。西の山田料金所と若林ジャンクションとの間7.4kmは、Ⅰ・Ⅱ期工事分として既に平成６年までに供用されている。未整備であった山田料金所から仙台南インターチェンジの西の区間が、Ⅲ期事業として、平成８年に着手された。そして、山田料金所付近は盛土構造のインターチェンジに改良される計画となった。予定地内には、船渡前遺跡が存在することから、平成９年に、山田ＩＣ建設担当である宮城県道路公社より発掘届が提出され、協議の結果、平成10年度に発掘調査を行うこととなった。

第２節　調査要項

遺　跡　名　船渡前遺跡
調　査　名　船渡前遺跡発掘調査
所　在　地　仙台市太白区山田字船渡前、同区富田字八幡西
調査主体　仙台市教育委員会
調査担当　仙台市教育委員会文化財課調査第二係　担当職員　吉岡恭平　佐藤　淳　　嘱託　森　剛男
調査期間　平成10年４月13日～７月29日
調査対象面積　48000㎡
調査面積　3200㎡
調査協力　宮城県道路公社
発掘調査参加者

阿部あき子　阿部　敬子　阿部八重子　石井千代子　板橋　栄子　板橋　静江　伊藤　幸子　植野美登子
遠藤いな子　遠藤　福子　大槻　明美　小川　良子　小野紀美子　小野寺達重　加藤けい子　神崎　是夢
菊地　恵子　菊地　紘二　小林　斎美　小松千代子　佐藤　清治　佐藤　久栄　佐藤ゆう子　佐藤リキ子
佐野たみえ　島崎なつ子　菅原　　弘　鈴鹿　久子　鈴木きぬ子　鈴木　峰子　関谷　栄子　高橋たづよ
千葉　恭子　冨永美輪子　早川　裕子　菱沼みのり　松野　順子　三浦たか子　三浦つよの　三浦　　貢
宮城　富子　吉田　公治　渡辺　純子　渡辺　節子　渡辺　芳裕

第３節　位置と環境

船渡前遺跡は、ＪＲ長町駅の西南西約4.3kmに位置し、太白区山田字船渡前および富田字八幡西に所在する。

奥羽山脈に源を発する名取川は、茂庭ー白沢丘陵・青葉山丘陵と高舘丘陵の間を東流し、山田、鈎取地区でその谷幅を広げ、仙台平野に臨む。名取川北岸の山田付近には３つの段丘が形成されており、本遺跡はその最低位段丘上に立地している。上位２つの段丘は、高い方が北前遺跡や山田上ノ台遺跡のある台ノ原あるいは上町段丘、低い方が上野遺跡や山田条里遺跡のある中町段丘である。本遺跡のある段丘面と中町段丘面との比高差は約４～５ｍである。

以前は本遺跡の東端部を「八幡西遺跡」として取り扱っていたが、現在は同一の遺跡として登録しており、遺跡

の範囲も東西600m、南北200mと東西に長くなっている。現在の標高は約22～27mで、緩やかに南へ傾斜しながら名取川に至り、その比高差は約４mである。遺跡周辺の現況は、水田、畑地、宅地である。また、昭和54年頃に遺跡東半部で耕地整理が行われている。全体の標高は変わりがないものの、旧地形の起伏などを若干変貌させているようである。

名取川流域には数多くの遺跡が存在する。ここでは当遺跡の周辺の遺跡について概観することにする。

旧石器時代の遺跡としては、北西約1.5kmにある山田上ノ台遺跡、北前遺跡がある。山田上ノ台遺跡は、前期旧石器時代の存在が証明された遺跡として著名である。東方約３kmには、旧石器時代の森林跡と当時の人間のキャンプ跡が発見され、地底の森ミュージアムとして保存された富沢遺跡がある。また、西方約４kmには後期旧石器時代の上ノ原山遺跡がある。

縄文時代になると遺跡の数は増加する。丘陵・段丘上では、早期末から中期後葉の北前遺跡、前期前葉の三神峯遺跡、中期末の大集落である山田上ノ台遺跡、本遺跡の北西に隣接する中期前・中葉の上野遺跡がある。低地にも早い段階から生活の拠点がみられ、早期前葉の下ノ内浦遺跡、早期末の富沢遺跡、山口遺跡があるほか、中期末から後期中葉にかけては、富沢・大野田地区において下ノ内遺跡、六反田遺跡、下ノ内浦遺跡、大野田遺跡、山口遺跡、王ノ壇遺跡という互いに近接した遺跡群の中で連続して集落の変遷を追うことができる。

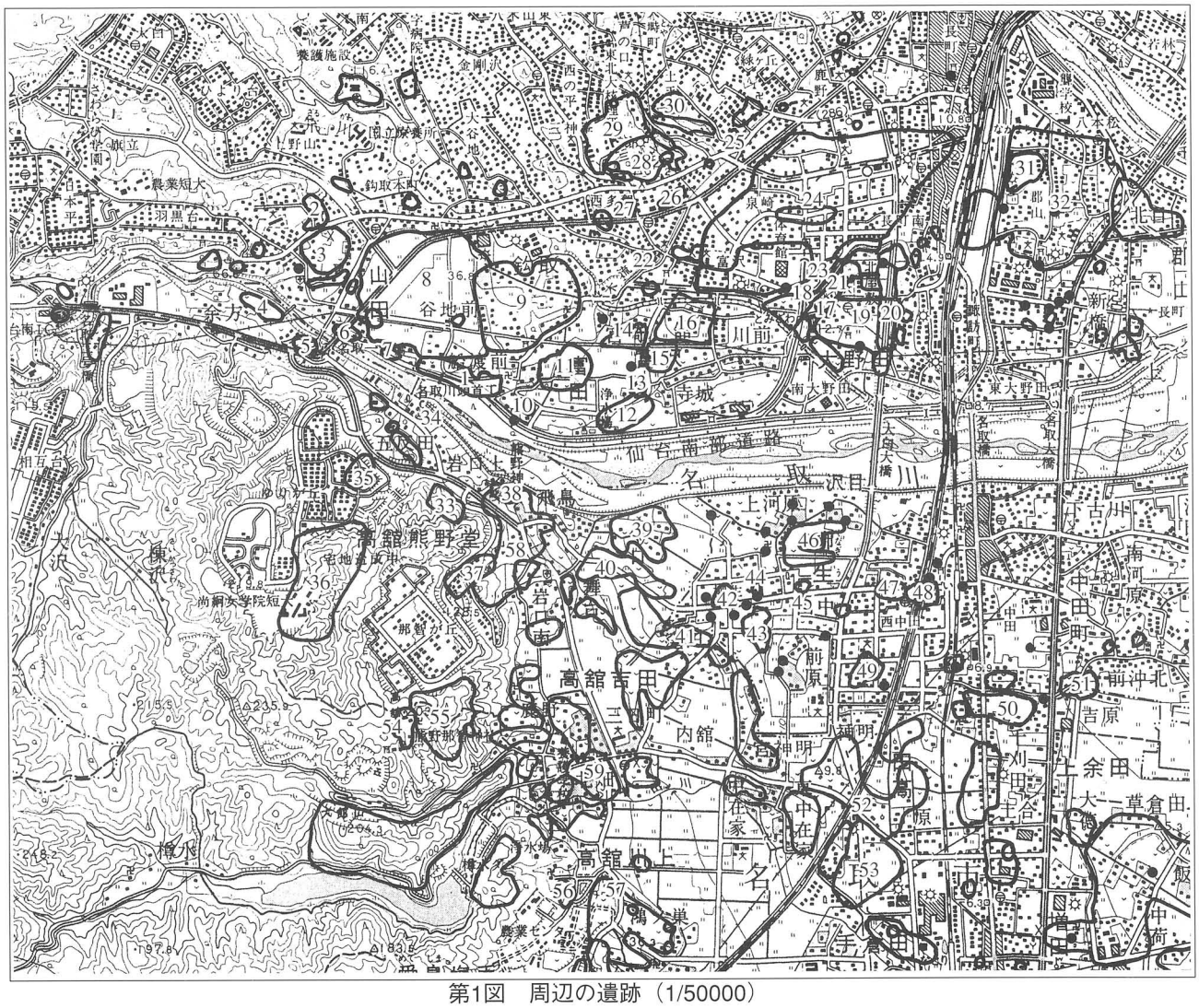
弥生時代の集落の様相は明かではないが、後期の竪穴住居跡が北東約1.5kmの原遺跡と同約2.5kmの土手内遺跡で発見されている。生産遺跡としては東方の低地にある富沢遺跡で中期から後期の水田跡が検出されているほか、下ノ内浦遺跡や西台畑遺跡で墓域が検出されている。

古墳時代の集落は、段丘上の原遺跡や土手内遺跡にもみられるが、六反田遺跡や伊古田遺跡、下ノ内遺跡など低地の自然堤防上にも多く存在する。隣接する後背湿地には富沢遺跡でみられるように水田跡が広がっており、生活の場が低地に移行したようである。古墳は丘陵と低地の境に築かれ、当遺跡の対岸にある高舘丘陵裾部には熊野堂横穴墓群が、北東の青葉山丘陵の裾部には、裏町古墳や砂押古墳、兜塚古墳などの高塚古墳や土手内、茂ヶ崎などの横穴墓群などが存在する。また、高塚古墳は、大野田古墳群のように低地にも分布している。

奈良・平安時代の集落も前述した東方の自然堤防上に多くみられる。当遺跡近辺では東方約１kmの鍛冶屋敷Ａ遺跡や鍛冶屋敷前遺跡がある。

中世では、周辺の丘陵上および低地に城館跡や屋敷跡などが数多く存在する。特に本遺跡対岸の高舘丘陵北東一帯は、中世において東北太平洋岸における熊野信仰布教の拠点となった熊野三山勧請の地で、それらに関連する遺跡が多くみられる。

近世の本遺跡周辺は山田村と富田村の村境部分にあたる。北に隣接する山田条里遺跡の調査では文政５年（1822年）の絵図にみられる屋敷の堀跡を検出している。また、本遺跡の南辺沿いに近世に掘削された木流堀がある。この堀は富田と広瀬川の根岸を結ぶ約６kmのものである。本遺跡の西端付近から取水し、南辺を通り、東端で北東へ方向をかえ長町方面へ向かっている。



第1図　周辺の遺跡（1/50000）

	遺跡名	種別	立地	年代		遺跡名	種別	立地	年代
1	船渡前遺跡	集落	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安	31	西台畑遺跡	集落	自然堤防	弥生・古墳
2	北前遺跡	集落	段丘	旧石器・縄文・平安・近世	32	郡山遺跡	官衙・寺院	自然堤防	縄文～平安
3	山田上ノ台遺跡	集落	段丘	旧石器・縄文・平安・近世	33	熊野堂横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳・奈良
4	下中東遺跡	散布地	段丘	古墳・古代	34	熊野本宮社	神社	丘陵麓	中世
5	余方遺跡	散布地	段丘	古代	35	小館（古館）跡	城館	丘陵	中世
6	清太原西遺跡	散布地	自然堤防	縄文・平安	36	熊野堂大館跡	城館	丘陵	中世
7	清太原東遺跡	散布地	自然堤防	縄文・平安	37	大門山遺跡	板碑・経塚	丘陵斜面	中世
8	山田条里遺跡	条里遺構	段丘	縄文・奈良・平安・近世	38	熊野新宮社	神社	段丘	中世～
9	上野遺跡	集落	段丘	縄文・奈良・平安	39	八ツ口遺跡	集落	自然堤防	古代・中世
10	富田南西遺跡	散布地	自然堤防	奈良・平安	40	舞台中遺跡	集落	自然堤防	古代
11	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	弥生・平安	41	乗馬遺跡	集落	自然堤防	古代
12	六本松遺跡	集落	自然堤防	奈良・平安	42	松木遺跡	集落	自然堤防	平安～近世
13	鍛冶屋敷B遺跡	散布地	自然堤防	縄文・奈良・平安	43	関場遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
14	鍛冶屋敷A遺跡	散布地	自然堤防	縄文・奈良・平安	44	雷遺跡	散布地	自然堤防	平安
15	鍛冶屋敷前遺跡	集落	自然堤防	奈良・平安	45	雷東遺跡	散布地	自然堤防	平安
16	富沢館跡	城館	自然堤防	中世	46	柳生台畑遺跡	散布地	自然堤防	古墳～中世
17	伊古田遺跡	集落	自然堤防	縄文・古墳～平安	47	安久遺跡	集落・円墳	自然堤防	縄文～古墳・平安・中世
18	下ノ内遺跡	集落	自然堤防	縄文～中世	48	安久東遺跡	集落・古墳群	自然堤防	弥生・古墳・平安・中世
19	大野田古墳群	古墳群他	自然堤防	弥生・古墳～中世	49	栗遺跡	集落	自然堤防	弥生・古墳～平安
20	王ノ檀遺跡	集落・屋敷	自然堤防	縄文～中世	50	中田南遺跡	集落	城館	縄文～中世
21	六反田遺跡	集落	自然堤防	縄文～近世	51	後河原遺跡	水田跡	自然堤防	弥生・奈良～近世
22	山口遺跡	集落・水田跡	自然堤防・沖積地	縄文～中世	52	清水遺跡	集落	自然堤防	弥生～平安
23	下ノ内浦遺跡	集落	自然堤防	縄文～中世	53	原遺跡	墓・集落	自然堤防	縄文～中世
24	富沢遺跡	集落・水田跡	自然堤防・沖積地	旧石器～近世	54	熊野那智神社	神社・経塚	段丘	中世～
25	砂押古墳	円墳	丘陵麓	古墳	55	高舘城跡	城館	丘陵	中世
26	裏町古墳	前方後円墳	段丘	古墳	56	金剛寺貝塚	貝塚	丘陵	縄文
27	原遺跡	散布地	丘陵	弥生～平安縄文・平安	57	今熊野遺跡	集落・貝塚	丘陵	縄文～平安
28	三神峯遺跡	集落	丘陵	縄文・弥生・平安	58	岩口中遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
29	芦ノ口遺跡	集落	丘陵	縄文～平安		熊野新宮社宿坊跡	寺院		中世
30	土手内遺跡	集落	丘陵	弥生・古墳	59	川上遺跡	散布地	丘陵	縄文・弥生・古代・中世

周辺の遺跡地名表

第４節　これまでの調査成果

本遺跡では、船渡前遺跡と八幡西遺跡として各々１回調査が行われている。

船渡前遺跡　昭和51年に仙台南道路建設（Ⅰ期）に伴う事前調査として、宮城県教育委員会により実施された（宮城県教委：1977）。その結果、現在山田料金所のゲートになっている箇所で、弥生時代の遺物包含層と土坑２基が発見された。包含層は、東西35m、南北９mの規模で、前期から中期中葉にかけての弥生土器が多量に出土した他、石庖丁や扁平片刃石斧などが出土している。また、この包含層は集落の一部を構成するものと考えられた。

八幡西遺跡　同じく昭和51年に、農地改良工事中に遺物が発見され、緊急調査が実施された（仙台市教委：1977）。その結果、平安時代の竪穴住居跡１軒が検出された。住居跡の平面形は長方形で、南北４m、東西3.2mで、東辺のほぼ中央にカマドが作られ、両袖部の石組と煙道の一部、支脚が残存していた他に、焚口の天井石と考えられる84×44×38cmの大きな凝灰岩が出土している。また、床面からは炭化材が出土しており、焼失住居の可能性が考えられる。遺物はロクロ使用の土師器、須恵器、鋤先や刀子などの鉄製品が出土している。

第２章　確認調査

第１節　確認調査の方法

調査対象区域が本遺跡部分と隣接地部分とを合わせた約48,000m²と広大なため、当初は遺構等の広がりを把握するための確認調査から実施した。調査区設定箇所は前回の調査成果をふまえ、その周辺を重点に、宅地や道路等を除く畑地や水田、荒地などを対象とした。設定順序については、土地買収契約の進捗状況や作物などの植え付けの都合などを考慮した。トレンチは地形の傾斜が南であることから南北方向を基本とし、幅は3mとした。長さは設定場所の条件により10～40mとまちまちになったが、20～30mとしたものが多い。計26箇所の確認トレンチ（1～26トレンチと呼称、以下1～26Tと表記）を設定し、総計面積は約1800m²である。

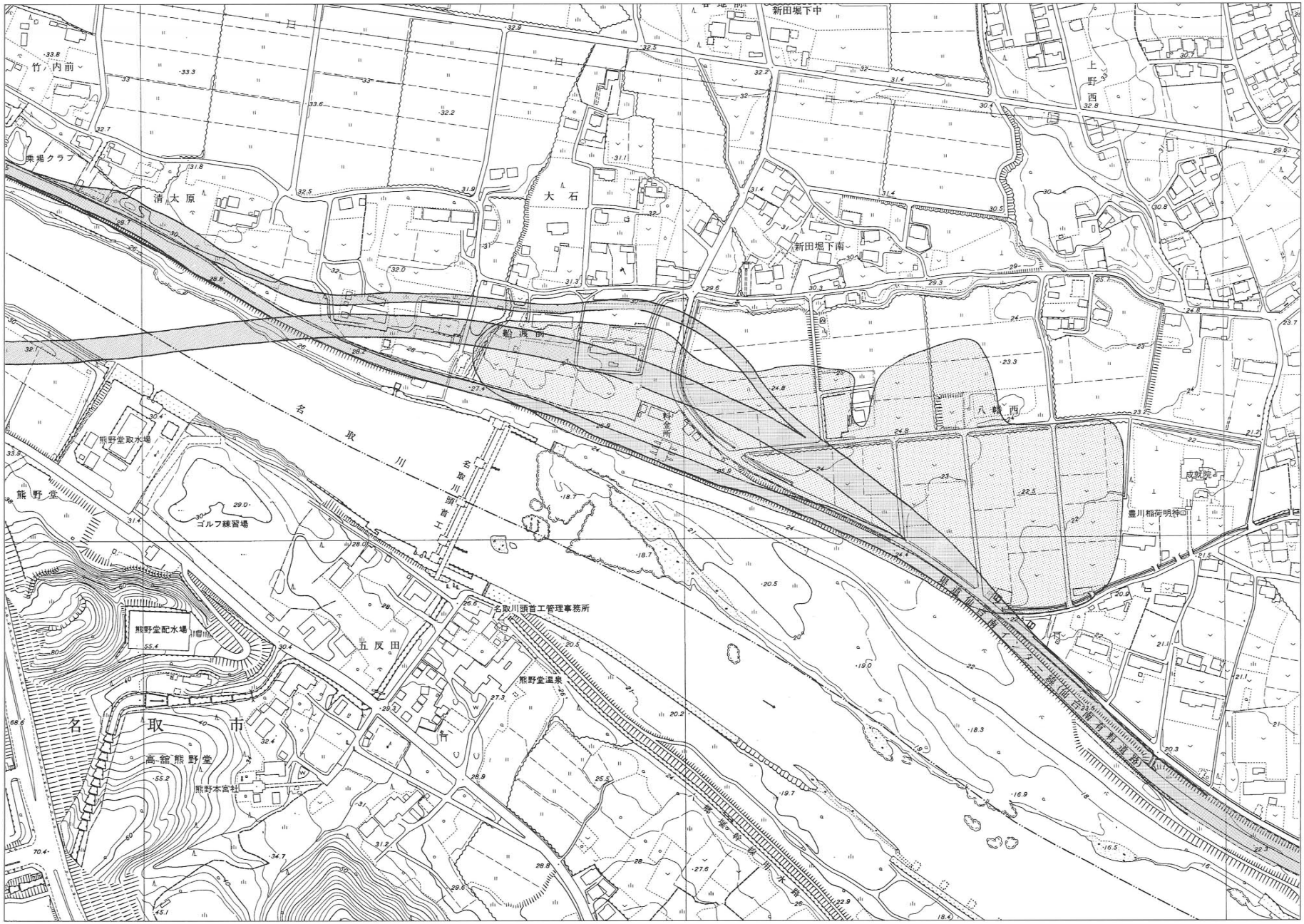
調査はまず重機により、表土や盛土、撹乱等を除去し、以下はおもに人力による各層での精査を行ったが、遺物の出土状況に応じ、中途の層の除去にも重機を使用した。また検出された遺構の時期や性格が不明な場合は、掘り込みを行い本調査の必要性を検討することとした。

確認調査の結果、遺構遺物とも予想外に少なかった。遺構が検出されたのは、3・5・12・13・14・15・16・17・18・20・25Tであるが、拡張して本調査が必要とされたのは6箇所で、3T＝Ⅰ区、5・13T＝Ⅱ区、25T＝Ⅲ区、15T＝Ⅳ区、16T＝Ⅴ区、20T＝Ⅵ区とした。他のトレンチの遺構については、以下に記述する確認調査の結果の項で報告する。なお、遺構の名称は確認調査と本調査と区別をしない種別ごとの通し番号である。

各確認トレンチの図面は、各トレンチ内に任意の基準点を設けて図化しているが、各トレンチの四隅の座標を測量し座標値を求めている。

第２節　確認調査の結果

確認トレンチの設定箇所は、標高や地形等から6つの地区に分けられるので、以下に東側から地区ごとにその結果を記述する。



第2図　遺跡の範囲と路線（1/5000）

1　南東地区

標高22～23mの畑地、荒地部分である。25T、26Tを設定した。

26T（第6図）

東端のトレンチで、3×10mの規模で設定した。トレンチ南壁断面を図示した（第6図）。耕作土以下は黄褐色の砂質シルトと細砂が厚く堆積し、礫層となり、その標高は20.3mである。遺構は検出されず、遺物はⅠ層から陶磁器片が数点出土したのみである。

25T

3×10mのトレンチである。基本層序は大別で10層確認され、X層が礫層となり、その標高が20.3mである。Ⅳ層上面で、トレンチ中央の西壁際に土師器の一括土器が伴う竪穴遺構の一部を検出したが、これは竪穴住居跡の東辺部確認した可能性が考えられた。他に溝跡1条、土坑3基も検出されていることから、本調査として西側を拡張することとした。本調査のⅢ区である。

2　中央地区

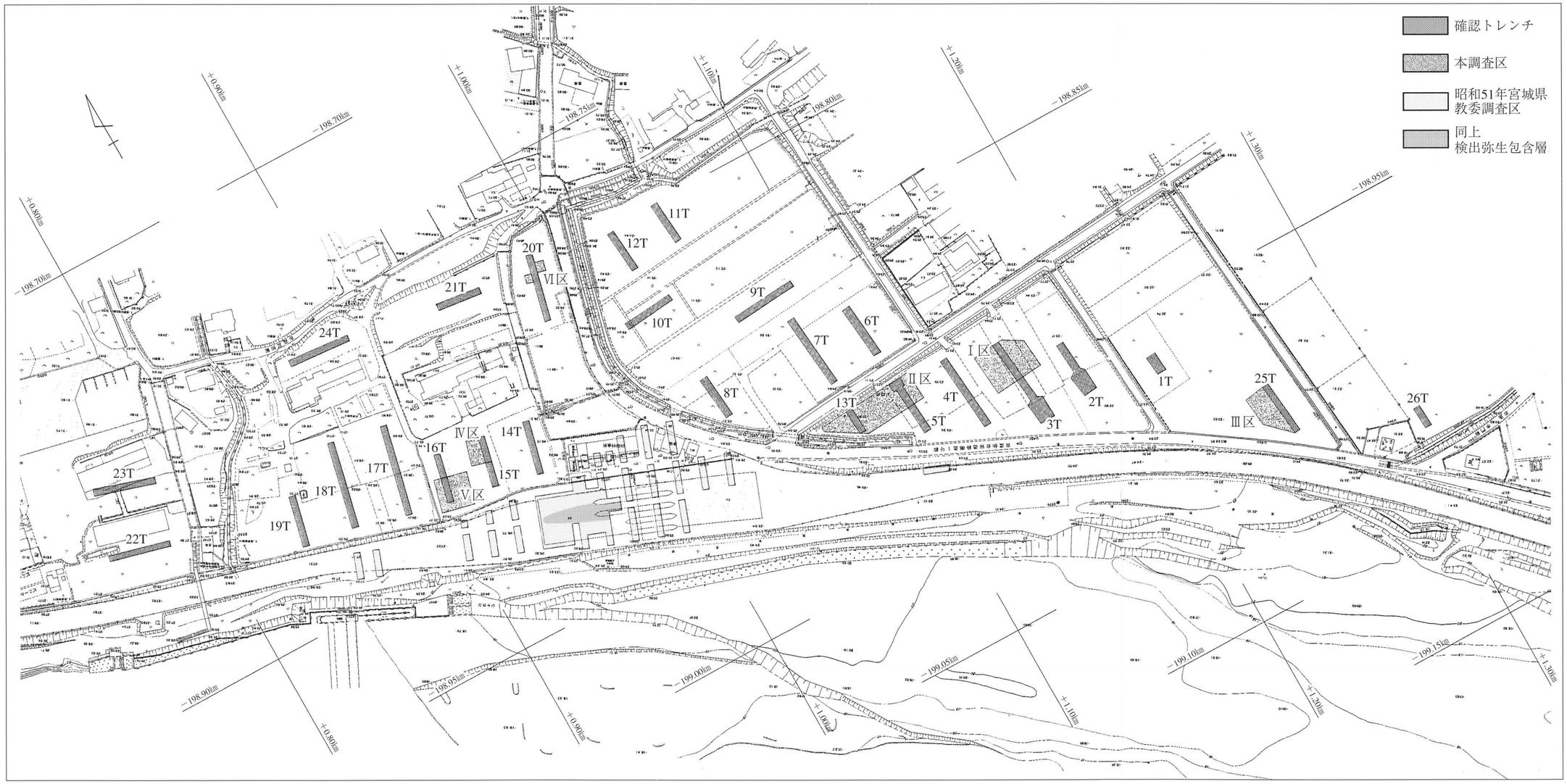
遺跡中央部の南側でより名取川が近い地区である。標高は23～24mで南東地区よりやや高くなる畑地部分である。1～5T、13Tを設定した。後述する小崖より北側におけるこの地区の基本層序は、2～5Tの調査の結果ほぼ共通していた。2Tの北壁断面により略述する（第6図）。Ⅰ層は耕作土、Ⅱ層は図示されていないが褐色系統のシルトで3Tや5Tなどに部分的に分布する。Ⅲａ層は暗褐色砂質シルト、Ⅲｂ層は褐色砂層でⅣ層への漸移層、Ⅳ層は黄褐色砂層、Ⅴａ層は暗褐色シルト、Ⅴｂ層は褐色砂質シルトでⅥ層への漸移層、Ⅵ・Ⅶ層が鈍い黄橙色砂層で、Ⅷ層が礫層となる。ただし各層の層相には変化がみられ、特にⅢａ・ｂ層、Ⅴａ・ｂ層は場所によりシルト化あるいは黒褐色化して分布する。

１Ｔ（第4図）

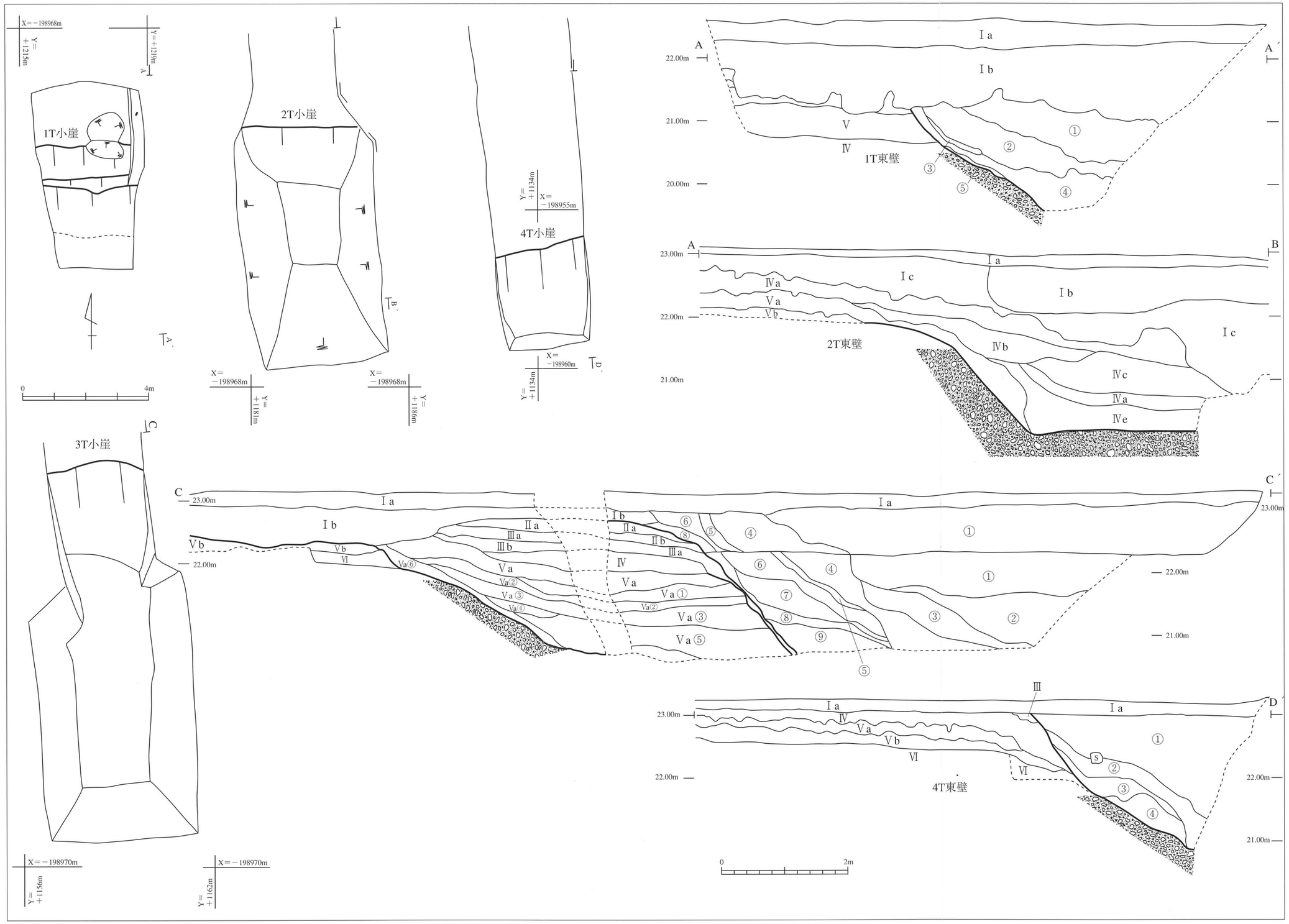
3×35mのトレンチを設定したが、北から約3mの所で小規模な段丘崖状の落ち込み（以下、小崖）を検出し、それ以南は名取川の河川敷に連続し遺構はないと判断されたため、3×9mのトレンチで調査終了とした。現畑耕作による天地返しが深さ1.5mまで及んでおり、基本層序は東壁北隅で確認されたのみである。Ⅱ～Ⅳ層は褐色シルト系の土層で、Ⅴ層下部から礫が多く含まれⅥ層が礫層となり、その標高は20.8mである。小崖はⅤ層で検出されたが耕作の撹乱が深いため、本来はより上位で確認されると考えられる。小崖の傾斜度は38度で、その高低差は1.5mまで確認したが、小崖下の礫層は未検出で、標高19.6mまで掘り下げている。小崖部分の堆積土は5層である。①・②層は砂や砂利がなく水成堆積というより土石流のように一度に堆積した可能性が考えられる。④層は水成堆積である。⑤層は小崖を覆う薄い層であるがある時期の地表面の落ち込みと考えられる。遺構は検出されず、遺物はⅠ層より土師器片、縄文土器片が数点出土したのみである。

２Ｔ（第4図）

3×40mのトレンチを設定したが、1T同様、約16mの所で小崖を検出したため、3×25mのトレンチとなった。基本層序は前述したとおりである。小崖はⅤｂ層で検出されており、Ⅴａ層が崖面に落ち込んでいる。小崖の傾斜度は50度で、高低差は2mである。崖下では礫層が検出されその標高は20.2mで、崖面にみられる高位の礫層の標高はトレンチ北端部と同じく21.5mである。小崖部分の堆積土は6層である。Ⅳａ～ｅ層は砂で水成作用により一時期に堆積した可能性が強い。小崖を覆うⅤａ層の時期には、平坦部が離水し地表面として安定していたと推測される。また南端のⅠｃ層の落ち込みは近年まで残存していた小崖を埋めたものである。遺構は検出されず、遺物はⅠ・Ⅲｂ・Ⅳ・Ⅴ層から縄文土器片、剥片、磨石等が出土している。



第3図　トレンチ配置図（1/2000）



第4図　1～4Ｔ小崖平面・断面図

1T東壁

層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa	暗褐色10YR3/4	シルト	現耕作土
Ⅰb	暗褐色10YR3/3	シルト	下半天地返しⅡ～Ⅳまで撹乱
Ⅱ	褐色　10YR4/6	砂質シルト	
Ⅲ	褐色　10YR4/4	粘土質シルト	
Ⅳ	褐色　10YR4/6	シルト	
Ⅴ	褐色　10YR4/5	砂質シルト	下半部砂質化、小礫増す
Ⅵ	褐色　10YR4/6	細砂	径2～10cmの礫含む
①	暗褐色10YR3/4	シルト	径1～15cmの礫含む
②	褐色　10YR4/4	砂質シルト	径1～15cmの礫含む
③	褐色　10YR4/4	砂質シルト	②よりやや黒い
④	鈍い黄褐色10YR5/4	砂質シルト	酸化鉄を霜降り状に含む、径1～20cmの礫含む
⑤	黒褐色10YR3/2	シルト	

2T東壁

層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa	鈍い黄褐色10YR5/4	砂質シルト	現畑耕作土
Ⅰb	鈍い黄褐色10YR5/4	砂質シルト	現畑耕作土
Ⅰc			区画整備前の耕作土（但し南半落込み部については埋めている）
Ⅳa	オリーブ褐色2.5Y4/4	砂質シルト	
Ⅳb	褐色10YR4/4	砂質土	焼土、炭化物粒僅か含む
Ⅳc	鈍い黄褐色10YR5/4	砂質土	
Ⅳd	鈍い黄褐色10YR5/4	砂質土	
Ⅳe	黄褐色2.5Y5/4	砂質土	層下半径3cm内小礫少量含む
Ⅴa	黒褐色10YR3/2	砂質シルト	炭化物粒僅か含む

3T東壁

層位	土　　色	土　性	備　　考
①			耕地整理時の盛土
②	鈍い黄褐色10YR5/4	細砂	径1～10cmの礫やや多く含む
③	鈍い黄褐色10YR5/4	砂	均質砂層
④	鈍い黄褐色10YR5/4	砂質シルト	径2～5cmの小礫多く含む
⑤	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	
⑥	褐色10YR4/4	砂質シルト	径5～20cmの礫含む
⑦	黄褐色10YR5/6	細砂	径2～20cmの礫多く含む
⑧	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	径1～2cmの小礫含む
⑨	黄褐色10YR5/6	砂礫層	径1～5cmの礫の砂礫層
Ⅱa	鈍い黄褐色10YR5/4	シルト	Ⅲa層と灰白火山灰の小ブロックを含む
Ⅱb	褐色10YR4/4	シルト	Ⅲa層のブロックを多く含む
Ⅲa	黒褐色10YR2/3	シルト	
Ⅲb	褐色10YR4/4	シルト	北部に比べ明るい
Ⅳa	鈍い黄褐色10YR5/4	シルト	北半のⅣ層に相当
Ⅳb	暗褐色10YR3/3	シルト	炭化物をやや含む
Ⅳc	黄褐色10YR5/6	砂質シルト	炭化物を若干含む
Ⅳd	鈍い黄褐色10YR5/4	粘土質シルト	炭化物を多く含む
Ⅳe	黄褐色10YR5/6	粘土質シルト	炭化物を若干含む
Ⅳf	褐色10YR4/4	砂質シルト	
Ⅳg	褐色10YR4/4	砂質シルト	④より明るく砂質増す
Ⅴa	暗褐色10YR3/3	シルト	径1～2cmの小礫を含む
Ⅵ	黄褐色10YR5/6	粘土質シルト	北半より砂質化
Ⅶ	黄褐色10YR5/6	砂	礫を多く含む
Ⅷ		砂礫	以下砂礫層続く

4T東壁

層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa			現耕作土
Ⅰb			現耕作土
Ⅲa	黒褐色10YR2/2	シルト	炭化物粒を僅か（黒色強いのは北半のみ）
Ⅲb	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	
Ⅳ	鈍い黄褐色10YR4/3	砂質土	（下半部の砂粒多い）
Ⅴa	黒褐色10YR2/3	シルト	（凹み部分では、より黒色強い）
Ⅴb	暗褐色10YR3/3	シルト	
Ⅵ	鈍い黄褐色10YR4/3	砂質土	
①	鈍い黄褐色10YR4/3	砂質土	径30cm内の大形礫僅か、径2cm内の小礫多量
②	暗褐色10YR3/3	砂質土	径30cm内の大形礫僅か、径2cm内の小礫多量
③	鈍い黄褐色10YR4/3 黒褐色10YR3/1	砂質土 粘質シルト	混合層
④	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	

第5図　礫層と小崖（1／1000）

3Ｔ（第4図）

3×42mのトレンチである。基本層序は前述のとおりだが、Ⅲａ・ｂ層、Ｖａ・ｂ層がシルト気味になり、黒味を増している。北から14mのⅢａ層上面で昭和51年調査の竪穴住居跡（以下Ｓ51年住居）を検出し、その正確な位置が確認された。同じく北から28mで小崖を検出した。小崖の傾斜度は30度で、高低差は1.7mまで確認したが、崖下の礫層は未検出で、標高20.5mまで掘り下げている。トレンチ中央部と崖面にみられる高位の礫層の標高は22.1mと21.7mである。崖面に沿ってＶａ層が落ち込んでいる。小崖部分の堆積土中には、黒味のある4つの層－⑤・⑧・Ⅲａ・Ｖａ層が見られる。そのうちのⅢａ層を境に、南側では礫を多く含む①～⑨層が堆積し、北側には砂質シルトを中心としたⅣａ～ｇ・Ｖａ層が堆積する。Ⅳａ～ｇ層の全体としての層相は2ＴのⅣａ～ｅ層に類似する。①層は近年まで残存していた小崖を埋める層である。前述の黒味のある層は各々が地表面であったことを示すものと考えられる。Ｓ51年住居が再確認され、Ⅲａ層が平安時代以前の層であることが判明し、周囲に遺構の存在が予想されたため、本調査としてトレンチの東西を拡張することとした。本調査のＩ区である。

4Ｔ（第4図）

3×35mのトレンチである。基本層序は前述の3Ｔ同様だが、特にⅢａ層とＶａ層が北半部で黒色がより強い。トレンチ北端部で5Ｔから延びるＳＤ1の南岸部を検出した。方向がＥ－30°－Ｎと5Ｔでの方向より北に振れている。北5mが計画路線の境界となるためＳＤ1の拡張は行わなかった。また南端部で小崖を検出した。小崖の傾斜度は32度で高低差は1.5mまで確認したが崖下の礫層は未検出で、標高20.8mまで掘り下げている。トレンチ中央部と崖面にみられる礫層の標高は22.3m、21.6mである。小崖部分の堆積土は4層である。①・②層は1Ｔの①・②層の層相に類似し、同じ成因によるものかもしれない。③層は小崖直上のⅢａ層の崩壊土の可能性がある。④層は自然堆積層である。なお、Ｖａ・ｂ層、Ⅵ層上面が北へ向かって傾斜し、北端部手前でやや急に立ち上がる。これは3・5Ｔにもみられ、礫層の凹凸があることが推定される。ＳＤ1以外遺構は検出されず、遺物はＩ、Ⅲ～Ｖ層から縄文土器片が10数点出土している。

5Ｔ

3×27mのトレンチである。北端部で溝跡を2条検出した。北側の溝は北岸がトレンチ外になり上端幅が10m近くなること、掘り込んだ結果人工的な形態であること、東西20m離れた4・13Ｔでも確認されることなどから大規模な溝跡であることが推定され、本調査として5Ｔ13Ｔを中心に拡張することとした。本調査のⅡ区である。大規模な溝の方をＳＤ1、その南をＳＤ2とした。

13Ｔ

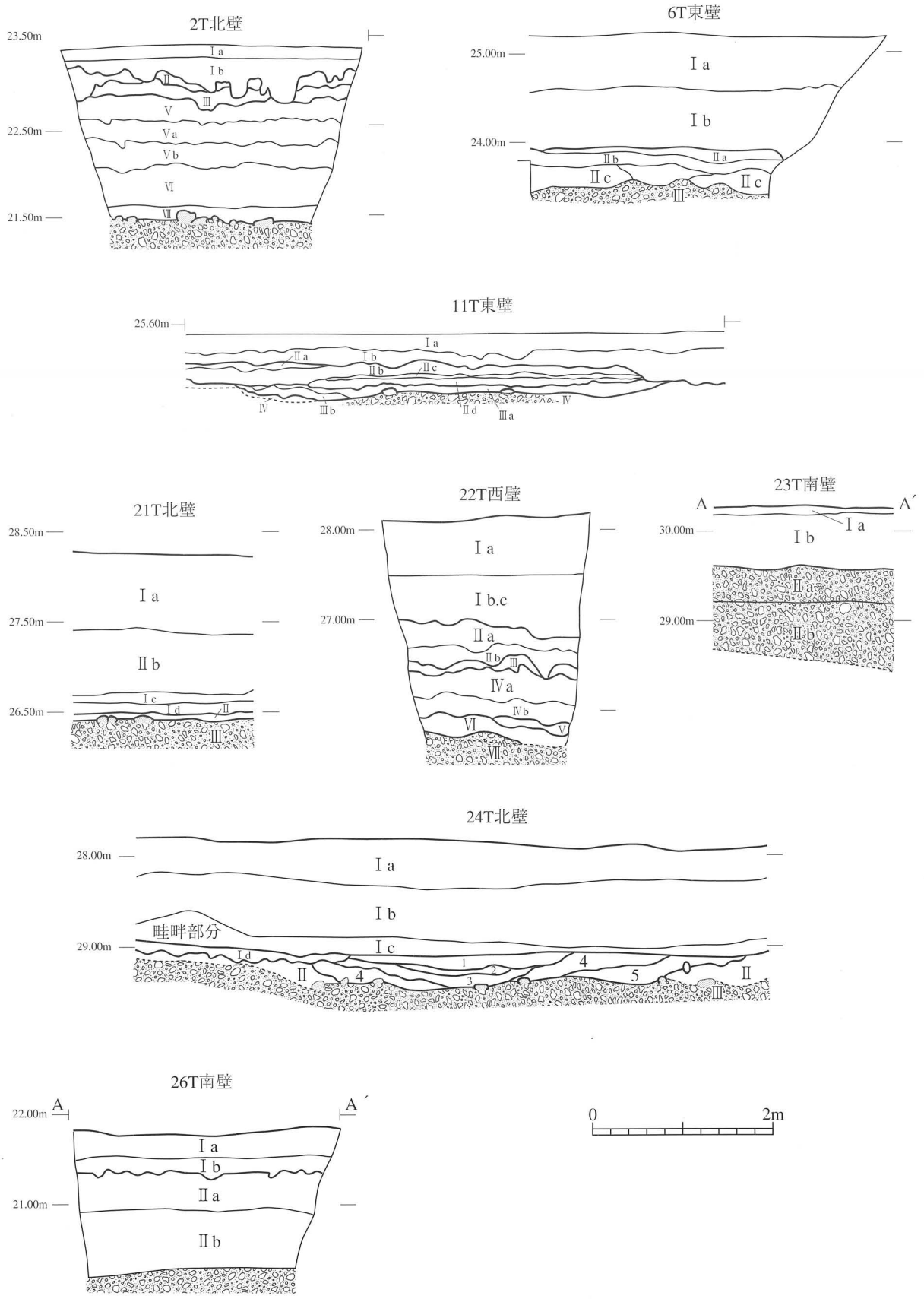
3×12.5mのトレンチである。5Ｔで検出されたＳＤ1の西へ延長を確認するためのトレンチである。ここでも北岸は検出されなかった。5Ｔと共に本調査として拡張した。

3　中央北地区

遺跡範囲外の隣接地も含め、6～12Ｔを設定した。標高25～26mの畑地と水田部分である。前項の中央区よりも一段高い地区である。6Ｔの結果から以前行われた耕地整理により基本層がだいぶ撹乱されており、耕作土直下がすぐに礫層となる場合が多い。

6Ｔ（第6図）

3×35mのトレンチである。基本層は大別3層であるが、地表下約1.3mまでは耕地整理時の盛土と動いた礫層で、以下は褐色粘土質シルトそして礫層となる。礫層の標高は北が24.2m、南が23.5mである。遺構遺物は確認されていない。



第6図　確認トレンチ断面図

4T東壁

層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa			現在耕作土
Ⅰb			現在耕作土
Ⅲa	黒褐色10YR2/2	シルト	炭化物粒を僅か　黒色強いのは北半のみ
Ⅲb	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	
Ⅳ	鈍い黄褐色10YR4/3	砂質土	下半部の砂粒多い
Ⅴa	黒褐色10YR2/3	シルト	凹み部分では、より黒色強い
Ⅴb	暗褐色10YR3/3	シルト	
Ⅵ	鈍い黄褐色10YR4/3	砂質土	
SD1 1	黒褐色10YR3/2	シルト	炭化物粒を少量
2	暗褐色10YR3/3	シルト	Ⅵ層を小ブロック状に多量

12T SD7

層位	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐色10YR3/2	粘性シルト	灰黄褐色砂質シルト小ブロック少量
2	黒褐色10YR2/2	粘性シルト	
3	黒褐色10YR3/2	シルト	径5cm内の褐色砂質土ブロックを多量

14T西壁

層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa	暗褐色10YR3/3	シルト	現畑耕作土
Ⅰb	鈍い黄褐色10YR4/3 黒褐色10YR2/3	砂質シルト 砂質シルト	各々のブロック混合層、盛土
Ⅰc	黒褐色10YR2/3	砂質シルト	旧耕作土
Ⅱ	黒褐色10YR2/3	砂質シルト	炭化物粒を少量、下面起状著しい
Ⅲ	暗褐色10YR3/4	シルト	
SD7 1	黒褐色10YR2/2	シルト	径1cm内のⅢ層ブロック、炭化物粒を僅かに含む
2	黒褐色10YR2/2	シルト	径2cm内のⅢ層ブロックを密に含む
3	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	黒褐色ブロックを少量含む

17T SK12

層位	土　　色	土　性	備　　考
SK12 1	黒　色10YR2/1	シルト	一部に地山粒を少量含む
2	黒褐色10YR2/3	シルト	径2cm内の地山ブロックを多量含む

19T SD5

層位	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐色10YR2/2	シルト	鈍い黄褐色土ブロック少量
2	黒褐色10YR2/2	シルト	鈍い黄褐色土ブロック微量
3	黒褐色10YR2/2	シルト	鈍い黄褐色土ブロック多量
1	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	現耕作土

19T ピット一覧

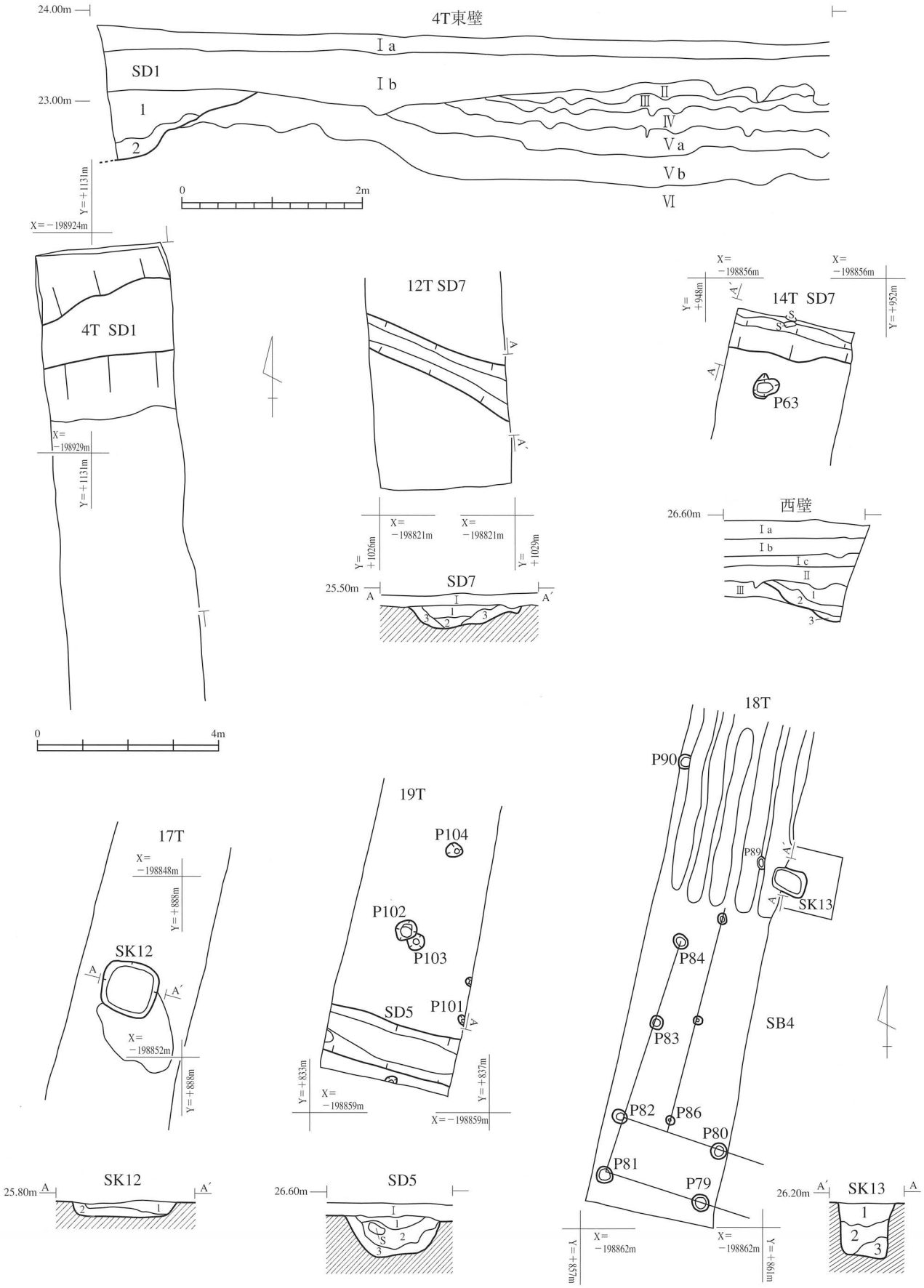
No	規　模(cm)	深　さ(cm)	層　位	土　色	土　性	備　　考
102	50×42	33	1	黒褐色10YR2/2	シルト	柱痕跡、鈍い黄褐色土ブロック微量
			2	黒褐色10YR2/2	シルト	鈍い黄褐色土ブロック密
103	径38	31	1	黒褐色10YR2/2	シルト	鈍い黄褐色土ブロック微量
104	34×30	14	1	黒褐色10YR2/2	シルト	柱痕跡、鈍い黄褐色土ブロック微量
			2	黒褐色10YR2/3	シルト	鈍い黄褐色土ブロック多量

18T SK13

層位	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐色10YR2/3	シルト	暗褐色土ブロック、炭化物含む
2	黒褐色10YR2/3	シルト	黒色土ブロック多量
3	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	暗褐色土ブロック含む

18T ピット一覧

No	規　模(cm)	深　さ(cm)	層　位	土　色	土　性	備　　考
79	径35	15	1	黒　色10YR2/1	シルト	柱痕跡、暗褐色ブロック少量
			2	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	黒色ブロック含む
80	径34	14	1	黒　色10YR2/1	シルト	柱痕跡
			2	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	
81	径34	13	1	黒　色10YR2/1	シルト	柱痕跡
			2	黒褐色10YR2/2	シルト	暗褐色ブロック含む
82	32×28	20	1	黒　色10YR2/1	粘土質シルト	柱痕跡
			2	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	黒色ブロック含む
83	26×22	12	1	黒　色10YR2/1	シルト	柱痕跡
			2	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	黒色ブロック含む
84	30×26	19	1	黒　色10YR2/1	粘土質シルト	柱痕跡
			2	黒　色10YR2/1	砂質シルト	暗褐色ブロック含む
86	径15	12	1	黒　色10YR2/1	粘土質シルト	
87	径15	9	1	黒　色10YR2/1	粘土質シルト	
88	18×16	9	1	黒　色10YR2/1	シルト	柱痕跡
			2	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	黒色ブロック含む
89	28×18	9	1	黒褐色10YR2/2	シルト	暗褐色ブロック含む
90	32×？	23				注記なし



第7図　確認トレンチ遺構図

2T北壁

層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa	鈍い黄褐色10YR5/4	砂質シルト	現畑耕作土
Ⅰb	鈍い黄褐色10YR5/4	砂質シルト	現畑耕作土
Ⅱ	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	トレンチ中央で黒色増す、焼土粒微量含む
Ⅲ	褐　色10YR4/4	砂質土	層下面起状有り、一部で径1cm
Ⅳa	黄褐色10YR5/6	砂質土	層下面起状有り、一部で径1cm内小礫含む
Ⅴa	暗褐色10YR3/3	シルト	炭化物、焼土粒微量含む
Ⅴb	褐　色10YR4/4	砂質シルト	層下半永性の砂層との互層となる
Ⅵ	鈍い黄燈色10YR6/4	砂質土	層中位に径2cm内小礫含む層有り
Ⅶ	鈍い黄燈色10YR6/4	砂質土	層中に径30cm内礫多量含む

6T東壁

層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa			盛土と現耕作土
Ⅰb	暗褐色10YR3/4	砂礫	Ⅰb最下部10cmの厚さ程でグライ化
Ⅱa	褐　色10YR4/4	砂質シルト	
Ⅱb	暗褐色10YR3/4	砂礫	径2～4cmの礫、礫面は粗砂
Ⅱc	褐　色10YR4/4	粘土質シルト	
Ⅲ	暗褐色10YR3/3	礫	径10～40cmの礫、礫面は粗砂
①	褐　色10YR4/4	中砂	

11T東壁

層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa	黒褐色2.5Y3/2	砂質シルト	現水田耕作土
Ⅰb	褐　色10YR4/6	砂	風化凝灰岩、礫多量
Ⅱa	黒褐色10YR3/2	シルト	酸化鉄を糸根状に含む、水田耕作土
Ⅱb	黒褐色2.5Y3/1	シルト	酸化鉄を糸根状に含む、水田耕作土
Ⅱc	灰黄褐色10YR4/2	砂質シルト	酸化鉄糸根状に含む
Ⅱd	黒褐色10YR2/3	砂質シルト	酸化鉄を糸根状に含む、水田耕作土
Ⅲa	黒　色10YR2/1	シルト	酸化鉄を糸根状に含む
Ⅲb	黒褐色2.5Y3/1	粘土質シルト	酸化鉄を糸根状に含む
Ⅳ	褐　色10YR4/4	砂質シルト	
Ⅴ	鈍い黄褐色10YR4/3	砂礫	径5～20cmの円礫

21T北壁

層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa			畑耕作土
Ⅰb			盛土
Ⅰc	黒褐色2.5Y3/1	シルト	旧水田耕作土、下部に酸化鉄集積
Ⅰd	黒褐色10YR3/1	シルト	マンガン、酸化鉄斑状
Ⅱ	黒褐色10Y3/2	砂質シルト～細砂	
Ⅲ		礫	径10～30cm大の礫

22T西壁

層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰ			盛土
Ⅱa	黒　色10YR2/1	粘土質シルト	旧畑耕作土
Ⅱb	黒　色10YR2/1	粘土質シルト	耕作土下部
Ⅲ	黒褐色10YR2/3	粘土質シルト	
Ⅳa	褐　色10YR4/4	シルト	
Ⅳb	褐　色10YR4/6	粘土質シルト	
Ⅴ	暗褐色10YR3/4	砂礫	
Ⅵ	褐　色10YR4/4	細砂	
Ⅶ	褐　色10YR4/4	砂礫	径2～10cmの円礫

23T南壁

層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa	鈍い黄褐色10YR4/3	砂質土	
Ⅰb	黒褐色10YR2/2	シルト	旧表土盛土
Ⅱa	褐　色10YR4/6	砂質シルト	径20cm内の円礫多量含む
Ⅱb	鈍い黄褐色10YR5/4	砂質土	径10cm内の円礫多量含む

24T北壁

層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa			現畑耕作土
Ⅰb			盛土
Ⅰc			旧水田耕作土
Ⅰd	黒褐色2.5Y3/1	シルト	
①	灰　色5Y4/1	砂質シルト	
②	暗灰黄色2.5Y5/2	細砂	
③	黒　色2.5Y2/1	シルト	
④	灰黄褐色10YR4/2	シルト	マンガン斑多量
⑤	黄褐色2.5Y4/1	砂質シルト	マンガン斑多量
Ⅱ	鈍い黄褐色10YR4/3	シルト	層上部に酸化鉄集積
Ⅲ		砂礫	径20cm内の円礫多量

26T

層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa			現耕作土
Ⅰb	褐　色10YR4/4	砂質シルト	Ⅰa層ブロック混入
Ⅱa	黄褐色10YR5/6	砂質シルト	
Ⅱb	黄褐色10YR5/6	細砂	
Ⅲ		円礫	

7Ｔ

3×35ｍのトレンチである。基本層序は6Ｔ同様で、約1ｍの深さまで撹乱を受けている。礫層の標高は24ｍである。遺構遺物は確認されていない。

8Ｔ

3×20ｍのトレンチである。基本層序は6Ｔ同様で、遺構遺物は確認されていない。礫層の標高は北端が24.1ｍ、南端が24.3ｍである。

9Ｔ

7×30ｍの東西方向のトレンチである。地表下35㎝までが水田耕作土、耕地整理時の盛土で以下は礫層である。遺構遺物は確認されていない。礫層の標高は24.4ｍである。

10Ｔ

3×24ｍの東西方向のトレンチである。水田耕作土20㎝の直下が礫層で、遺構遺物は確認されていない。礫層の標高は24.7ｍである。

11Ｔ（第6図）

3×20ｍのトレンチである。地表下60㎝までが、水田耕作土、耕地整理時の盛土、旧水田耕作土で、以下が礫層となる。遺構遺物は確認されていない。礫層の標高は24.9ｍである。

12Ｔ（第7図）

3×20ｍのトレンチである。水田耕作土直下のⅡ層が黄褐色砂層、以下が礫層となる。その標高は25ｍである。Ⅱ層上面で溝跡1条（ＳＤ7）を検出した。ＳＤ7は、検出長3.2ｍ、方向Ｅ－23°－Ｓ、上端幅120㎝、深さ25㎝である。堆積土は3層で、出土遺物はない。

4　西地区

遺跡の西側であり、昭和51年の調査で弥生時代の遺物包含層が検出された場所の北西にあたる。標高は26～27ｍで前回調査地点よりもやや高くなり、包含層を形成した集落の遺構が期待された地区である。14～19Ｔを設定した。この地区の基本層序は共通している。Ⅰ層が現・旧耕作土、Ⅱ層が黒褐色砂質シルト、Ⅲ層がⅣ層への漸移層、Ⅳ層が黄褐色砂質シルト層、Ⅴ層が礫層である。

14Ｔ（第7図）

3×25ｍのトレンチである。北端のⅢ層上面で溝跡1条（ＳＤ6）を検出した。ＳＤ6は、検出長2.8ｍ、方向Ｅ－11°－Ｓ、上端幅90㎝以上、深さ40㎝である。堆積土は3層で、そのうち第2層は人為堆積土と考えられる。出土遺物はない。

15Ｔ

3×24ｍのトレンチである。Ⅳ層上面で並行する柱穴列を検出し、廂付の建物跡の存在が予想されたため本調査として西側を拡張した。本調査のⅣ区である。

16Ｔ

3×24ｍのトレンチである。南半のⅣ層上面でやや細長いプランの柱穴を数基検出し、複数の建物跡の存在が予想されたため、本調査として東側を中心に拡張した。本調査のⅤ区である。

17Ｔ（第７図）

3×42ｍのトレンチである。中央のⅣ層上面で土坑１基（ＳＫ12）をピット5個を検出した。ＳＫ12は、平面形が1辺が120㎝の隅丸方形である。堆積土は2層で、第2層は人為堆積土である。堆積土中から縄文土器片が2点出土している。ピットは径20～30㎝で柱痕跡等はみられない。

18Ｔ（第7図）

3×40ｍのトレンチである。Ⅳ層上面で土坑1基（ＳＫ13）、ピット14個を検出した。ピット10個に柱痕跡があり、そのうちＰ79～84はその配置関係から廂付の建物跡と考えられ、ＳＢ4とした。ＳＢ4は、南北2間、東西2間以上の建物跡で南側に廂が付く。方向は南北がＮ－18°－Ｅである。建物総長は南北が5.3ｍで、柱間は母屋が190～240㎝、廂が220㎝、母屋と廂の間は130㎝である。柱穴は径22～35㎝の円形で、深さは12～20㎝である。柱痕跡は10～15㎝である。ＳＫ13は、Ⅳ層上面で検出されたが、掘り込み面はＩｃ層中である。規模は長軸75㎝、短軸54㎝、深さ60㎝である。堆積土は3層ですべて人為堆積土である。

19Ｔ（第7図）

3×24㎝のトレンチである。南端のⅣ層上面で溝跡1条（ＳＤ5）とピット9個を検出した。ＳＤ5は、検出長2.9ｍ、上端幅110㎝、深さ45㎝である。堆積土は3層で土師器片が3点出土している。ピットは20～50㎝のほぼ円形で柱痕跡のあるものが3個あったが、建物跡等は不明である。

5　隣接北区

遺跡範囲外の北側隣接地に20・21・24Ｔを設定した。北側に広がる段丘面（中町段丘）の段丘崖の麓にあたり、標高は26～29ｍである。

20Ｔ

3×31ｍのトレンチである。礫層の直上で焼けた礫の集中部を検出したため、その箇所の東西を本調査として拡張した。本調査のⅥ区である。

21Ｔ（第6図）

3×31ｍの東西トレンチである。地表下1.5ｍが現畑耕作土と盛土でその下に旧水田耕作土があり、薄い砂層を介在させすぐに礫層となる。その標高は26.4ｍである。遺構遺物は確認されていない。

24Ｔ（第6図）

3×29ｍの東西トレンチである地表下1ｍが現畑耕作土と盛土でその下に旧水田耕作土があり、黄褐色シルトを介在させすぐに礫層となる。その標高は27.5～27.8ｍである。また旧水田耕作土直下で自然による凹地を検出している。凹地は上端幅約5ｍで浅い溝状を呈し、自然流路の可能性が考えられる。堆積土は5層で、堆積土中より赤焼土器片が出土している。遺構は確認されていない。

6　隣接西区

遺跡範囲外の西側隣接地ないに22・23Ｔを設定した。23Ｔは北側に広がる段丘面の南端部にあたり標高約30ｍ、22Ｔはその段丘崖の麓にあたり標高約28ｍである。

22Ｔ（第6図）

3×29ｍの東西トレンチである。地表下約1～1.5ｍが現表土と盛土でその下にⅡ層の旧畑耕作土がある。Ⅲ層が黒褐色砂質シルト、Ⅳ～Ⅵ層が黄褐色シルト～砂でⅦ層が礫層である。その標高が25.7ｍである。Ⅳ層で小ピットと倒木根を検出した。ピットには柱痕跡等はみられない。Ⅰ層中より土師器片、縄文土器片が数点出土した。

23Ｔ（第6図）

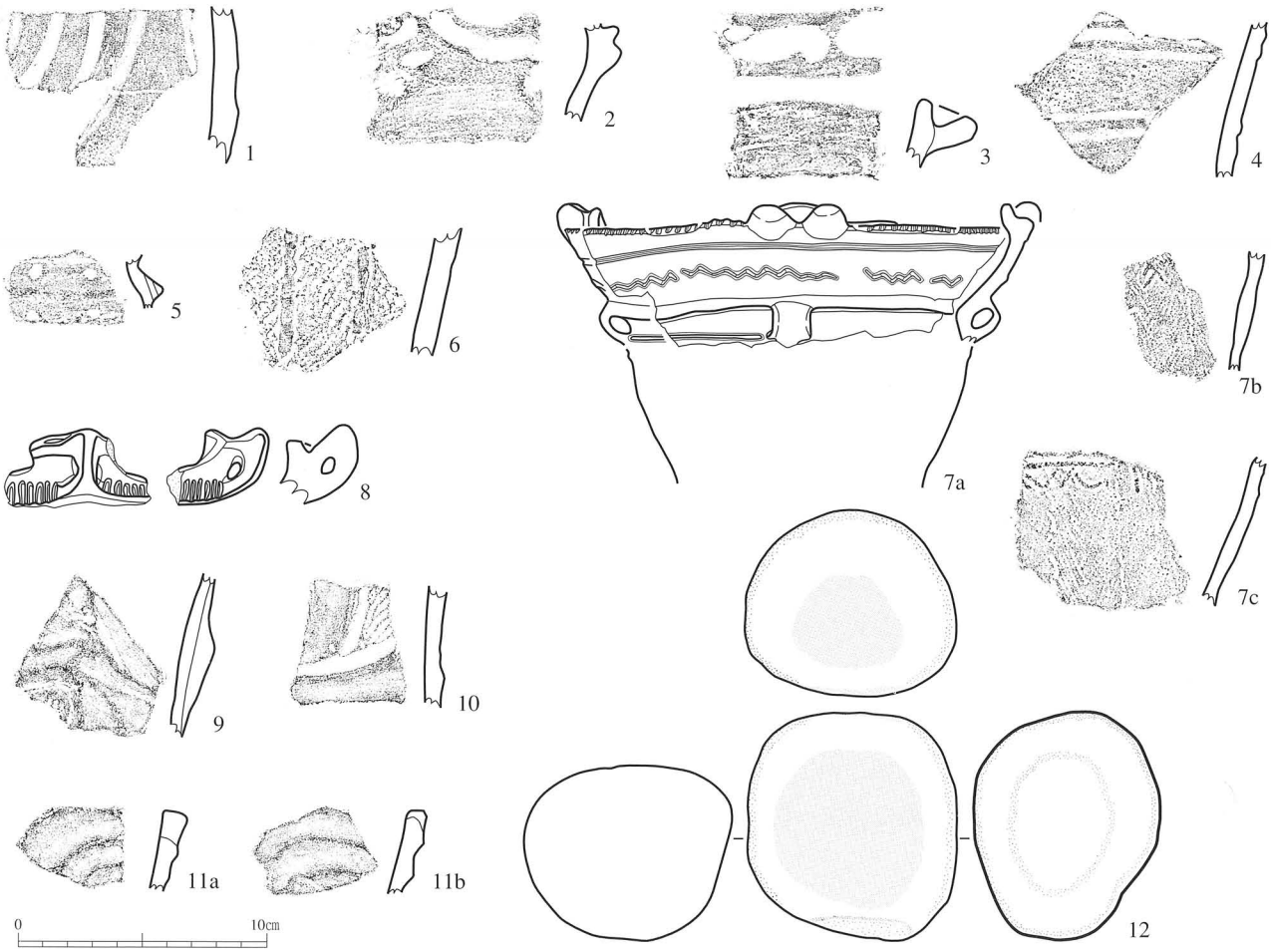
3×29ｍの東西トレンチである。地表下約70㎝の現表土と盛土の下はすぐに礫層である。その標高は29.6ｍである。遺構は確認されていない。遺物はⅠ層中より陶器片が数点出土しているのみである。

7　確認トレンチ出土遺物（第8図）

確認トレンチの各層から、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、剥片石器、礫石器等が出土している。縄文土器は3Tを中心に2～5Tに比較的多くみられ、土師器は竪穴住居跡が検出された25Tに多くみられる。2～5Tの縄文土器はⅢａ～Ⅴｂ層から出土し、特に3TのⅢａ・Ⅴｂ層に多い。3Tの遺物は本調査Ⅰ区の項で図示し、ここでは2・4・5Tから出土した縄文土器11点、礫石器1点を図示した。

7は口縁部主体の深鉢である。器形は体部下半が円筒状で体部上半が膨らみながら立ち上がり、頚部で屈曲し、口縁部が内弯気味に外傾する。口唇部には刻目と、2個1対の貼り瘤状の突起と1個の扁平な突起とで1単位となる突起が4単位付けられる。口縁部の中央には粘土紐貼り付けによる山形文があり、同じ手法による幾何学文と横位直線文が体部上端部にもみられる（7b、7c）。口縁部と体部との境には小さな橋状把手が4単位付く。地文は縦位のＬＲ・ＲＬ結束羽状縄文である。この土器は文様の特徴から大木6式と考えられる。

7以外の縄文土器はおおむね大木8ａ～10式のものである。



番号	種　類	遺構･層位	特　徴	残　存	口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7a	縄文土器深鉢	2T Ⅳ層	口唇：突起　刻目　口縁：沈線　細い粘土紐鋸歯状山形文 隆帯　小橋状把手	口縁部3/5	19.5	底径	器高	—28a	A—10

番号	種　類	層　位	特　徴	写真図版	登録番号	番号	種　類	層　位	特　徴	写真図版	登録番号
1	縄文土器	2T Ⅰc層	渦巻沈線文	14—1	A—8	7bc	縄文土器	2T Ⅳ層	LR･RL結束羽状縄文　細い粘土紐貼付	14—28bc	A—10
2	縄文土器	2T Ⅰ層	口頸部片　渦巻隆線文　RL縄文	14—2	A—7	8	縄文土器	4T Ⅴ層	突起　橋状把手　刻目	14—6	A—22
3	縄文土器	2T Ⅲ層	口唇：沈線文	14—3	A—9	9	縄文土器	4T Ⅴ層	隆沈線文	14—8	A—21
4	縄文土器	2T Ⅳ層	隆沈線文	14—4	A—12	10	縄文土器	4T Ⅴb層	隆沈線文　磨消縄文　RL縄文	14—9	A—24
5	縄文土器	2T Ⅳ層	隆帯　穿孔	14—5	A—11	11ab	縄文土器	5T Ⅳ層	隆線文	14—10･11	A—25
6	縄文土器	2T Ⅴ層	隆沈線文　LR縄文	14—7	A—13	12	磨　石	2T Ⅴb層	長9.2cm幅8.2cm厚さ7.1cm	19—1	K—32

第8図　各トレンチ出土遺物

第3章　本　調　査

第1節　Ⅰ区

3Ｔでの確認調査でＳ51年住居を再検出し、周辺に古代の遺構の存在が予想されたため、Ｓ51年住居を中心に撹乱部をさけ拡張し、東西23m、南北20mの調査区を設定し、東側をＩＡ区、西側をＩＢ区とした。ＩＡ区は、大半が畑作や農地改良工事などで大きく撹乱を受けていた。ＩＢ区では、土坑２基を検出した。3Ｔの調査結果からⅣ層以下では遺構が確認されないため、Ⅲ層上面で調査を終了している。

1　基本層序

5Ｔ北半部で確認された層を中心に記述する。確認された層は、大別で7層、細別で10層（3Ｔ南端部の小崖堆積土を除く）である。大まかにみると、Ⅰ層は現・旧畑耕作土、Ⅱ層はより古いと考えられる畑耕作土、Ⅲ～Ⅶ層は2～5Ｔ・Ⅱ区とほぼ共通で、黒褐色、暗褐色、黄褐色の土層が繰り返し堆積する層、Ⅷ層が礫層である。その標高は21.7～22.1mである。

Ⅰ層：ａ～ｃ層に細分される。Ⅰａ層は現畑耕作土で上面は緩やかに南へ傾斜する。Ⅰｂ層は昭和51年頃の農地改良工事の撹乱で南半が著しくⅤｂ層まで達し、各層の大きなブロックがみられる。Ⅰｃ層はそれ以前の畑耕作土である。

Ⅱ層：ａ・ｂ層に細分される。3Ｔ南端のⅢａ層上位にのみ観察される。Ⅱａ層は鈍い黄褐色シルトでⅢａ層起源のブロックと灰白色火山灰の小ブロックを含み撹拌されている様相から、Ⅰｃ層以前の畑耕作土の可能性が考えられる。Ⅱｂ層は褐色シルトで、Ⅱａ層と同様の成因が考えられるが、灰白色火山灰は含まない。

Ⅲ層：ａ・ｂ層に細分される。Ⅲａ層は黒褐色シルト、層厚10～20cmで、本来は広く分布していたと考えられる。北半では北へ傾斜するが３Ｔ南端部では南へ傾斜し小崖へ落ち込む。このことからＳ51年住居付近が微高地になっていたことが推定される。Ｓ５１年住居の再検出から古代の遺構確認面と考えられる。Ⅲｂ層は暗褐色シルト、層厚20～30cmでⅣ層への漸移層である。分布や起伏はⅢａ層と同様である。

Ⅳ層：褐色細砂、層厚10～50cmで下部がやや粗い砂粒になる。３Ｔ南端部にもみられる。Ⅴａ層上面の緩やかな凹みに厚く堆積し、わずかに北へ傾斜する。

Ⅴ層：ａ・ｂ層細分される。Ⅴａ層は暗褐色粘土質シルト、層厚10～60cmで遺物を若干含む。上面はやや南へ傾斜する。北側に厚く堆積するが、Ⅴｂ層の北への急な立ち上がりに起因する。Ⅴｂ層は褐色シルト、層厚10～40cmでⅥ層への漸移層である。遺物を若干含む。上面は北へわずかに傾斜し北端部で急に立ち上がるが、これはⅥ層の起状に起因する。

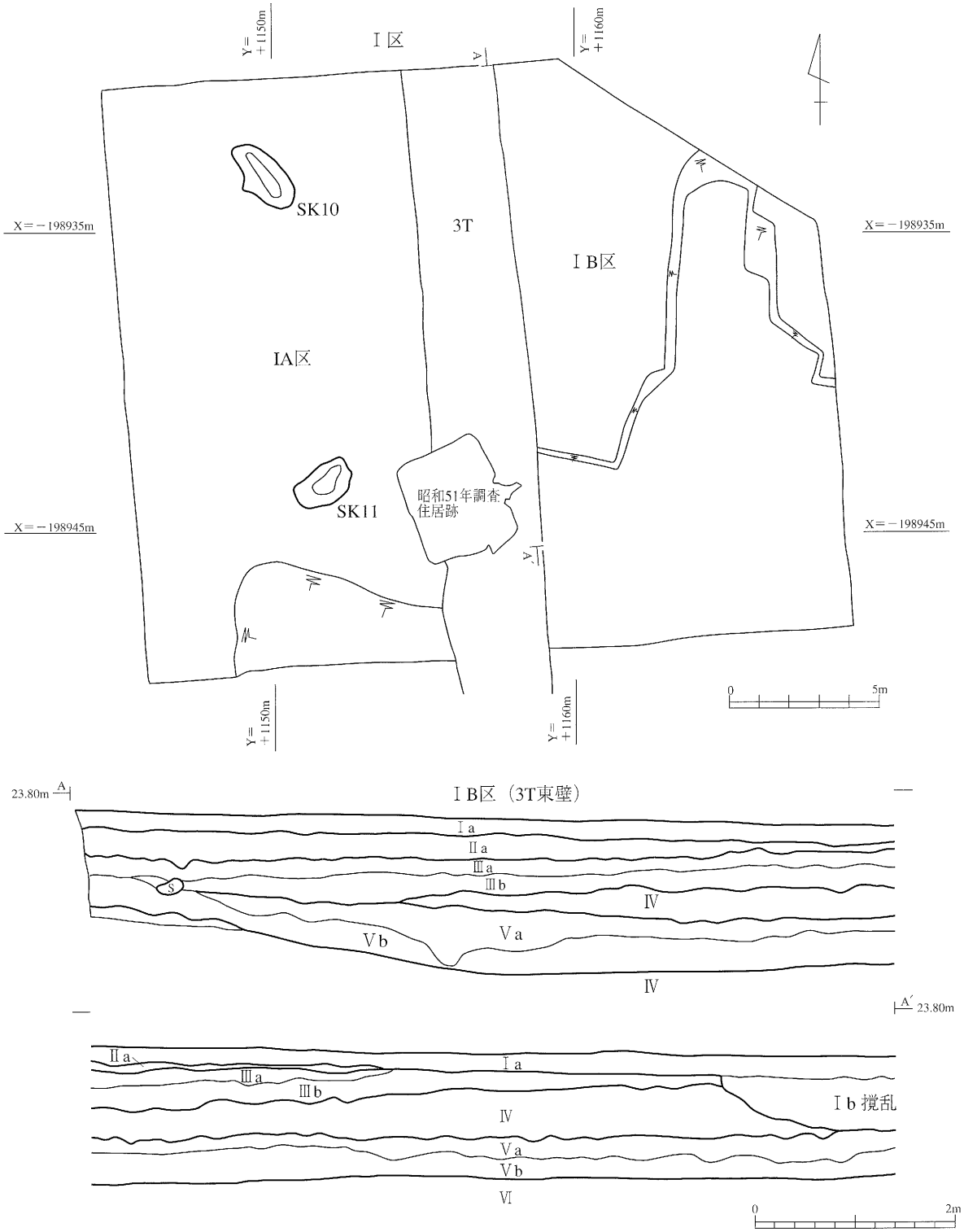
Ⅵ層：黄褐色粘土質シルトで南へ行くほど砂質化する。小崖から北へわずかに傾斜するが、北端部で急に立ち上がる。このようなくぼむ地形は3～5Ｔでも確認されている。

Ⅶ層：礫層である。

2　遺構

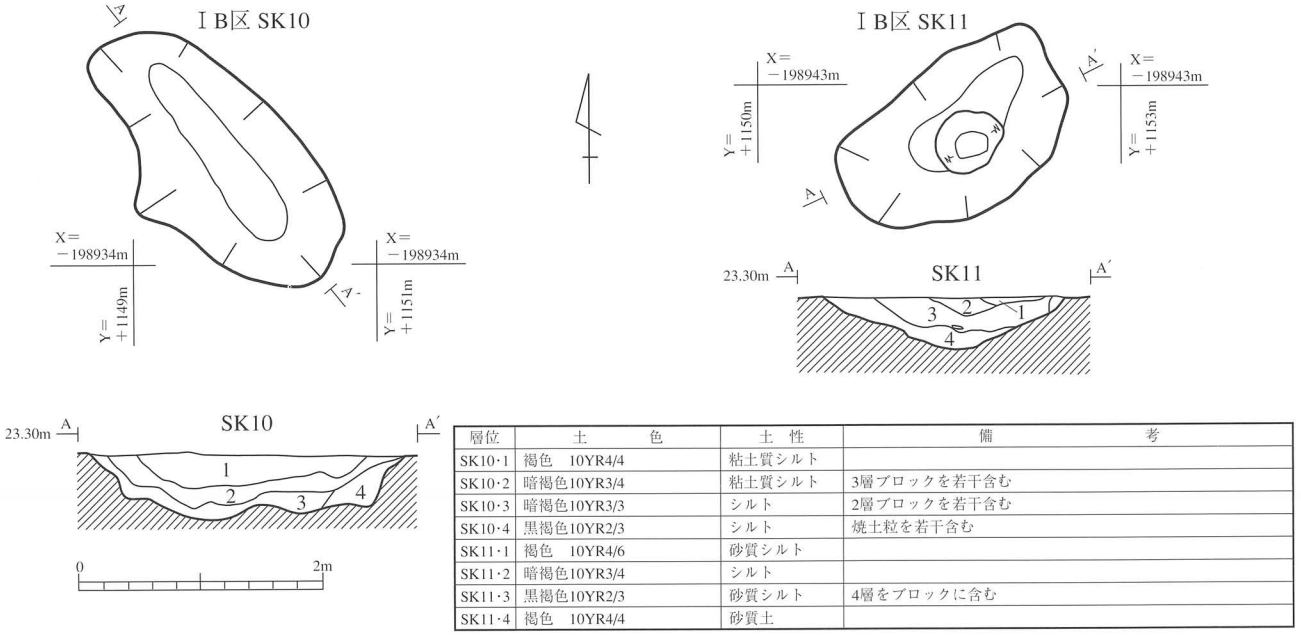
ＳＫ10

ＩＡ区北端部、Ⅲａ層上面で検出された。規模は上端2.6×1.4m、下端1.2×0.55m、深さ約50cmで、平面形は楕円形である。長軸の方向はほぼ北西である。堆積土は4層、レンズ状堆積で自然堆積である。出土遺物はない。



層位	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	暗褐色10YR3/3	シルト	現畑耕作上
Ⅰb			耕地整理時の撹乱
Ⅱa	暗褐色10YR3/4	粘土質シルト	現畑耕作上下部
Ⅲa	黒褐色10YR2/3	シルト	炭化物若干含む
Ⅲb	暗褐色10YR3/4	シルト	Ⅲaよりやや明るい
Ⅳ	褐色　10YR4/6	細砂	下部やや粒子粗くなる
Ⅴa	暗褐色10YR3/3	粘質シルト	炭化物若干含む
Ⅴb	褐色　10YR4/4	シルト	
Ⅵ	黄褐色10YR5/6	粘質シルト	南に行く程砂質化する

第9図　Ⅰ区遺構配置図・基本層序



層位	土　　色	土　性	備　　考
SK10・1	褐色　10YR4/4	粘土質シルト	
SK10・2	暗褐色10YR3/4	粘土質シルト	3層ブロックを若干含む
SK10・3	暗褐色10YR3/3	シルト	2層ブロックを若干含む
SK10・4	黒褐色10YR2/3	シルト	焼土粒を若干含む
SK11・1	褐色　10YR4/6	砂質シルト	
SK11・2	暗褐色10YR3/4	シルト	
SK11・3	黒褐色10YR2/3	砂質シルト	4層をブロックに含む
SK11・4	褐色　10YR4/4	砂質土	

第10図　SK10・11平面・断面図

ＳＫ11

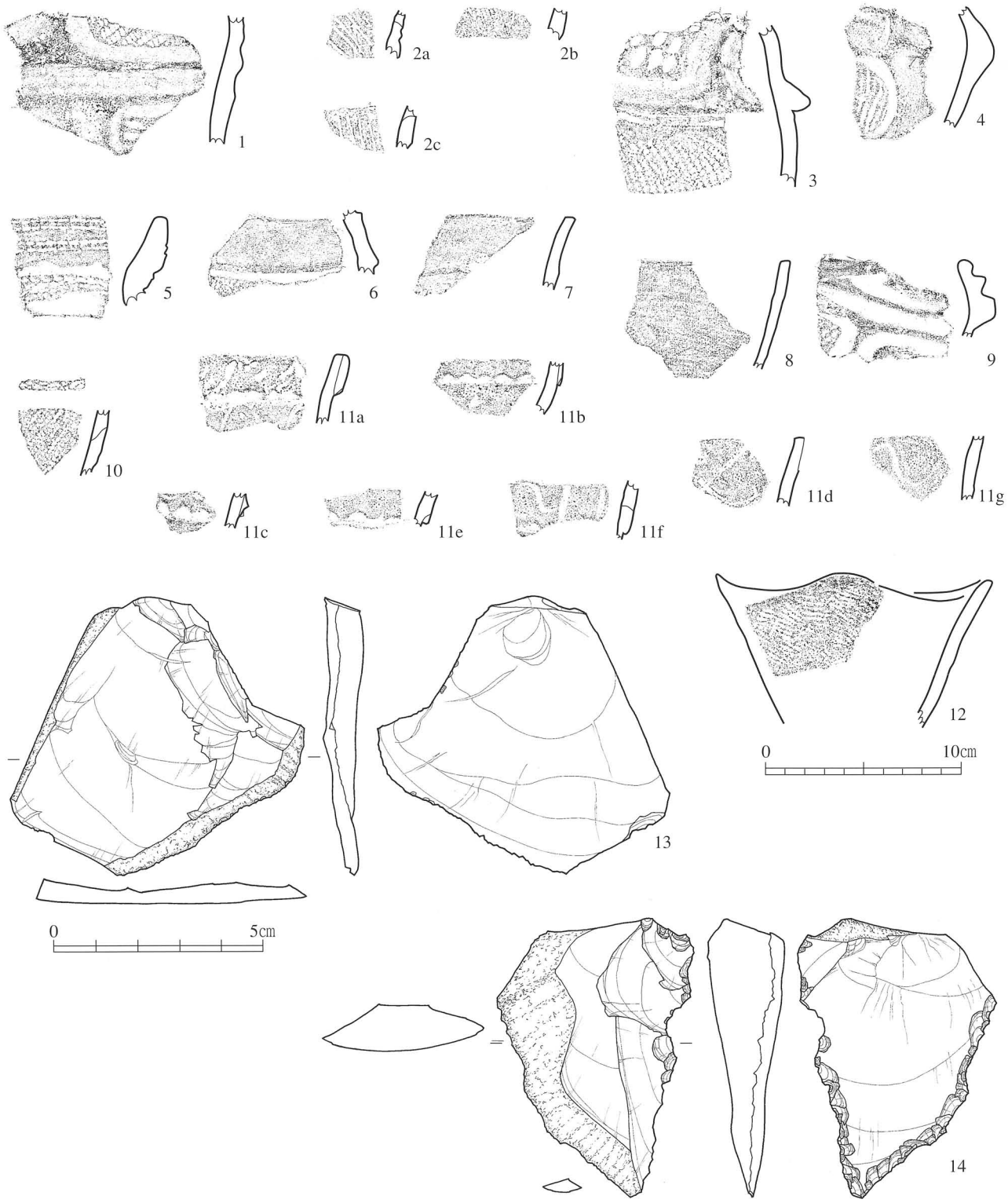
ＩＡ区南端部、Ⅳ層上面で検出された。Ｓ51年住居のすぐ西側に位置する。規模は上端2×1.35ｍ、下端1.22×0.55ｍ、深さ約40㎝で、平面形は不整楕円形である。長軸の方向はほぼ北東である。堆積土は4層、レンズ状堆積で自然堆積である。出土遺物は縄文土器片3点で、1点図示している。1は大木8ａ式の破片である。

3　基本層出土遺物

基本層から縄文土器、土師器、須恵器、土偶、剥片石器などが出土しているが少量である。また土師器、須恵器はＩ層出土がほとんどである。なかでも縄文土器が比較的多く、特にⅢａ・Ｖｂ層からの出土が多い。縄文土器12点、土偶1点、剥片石器2点、礫石器4点を図示した。

2は先端の鋭利な工具による沈線文が施されたものだが、土偶の破片の可能性もある。5は肥厚する口縁部に半裁竹管による押引文が施されている。11ａ～ｇは同一個体で、複合口縁の下端に刺突がなされ、口頸部には波状の沈線となるものである。これらは大木5～6式のものと考えられる。そのほかは、おおむね中期大木8ｂ式から後期にかけてのものである。

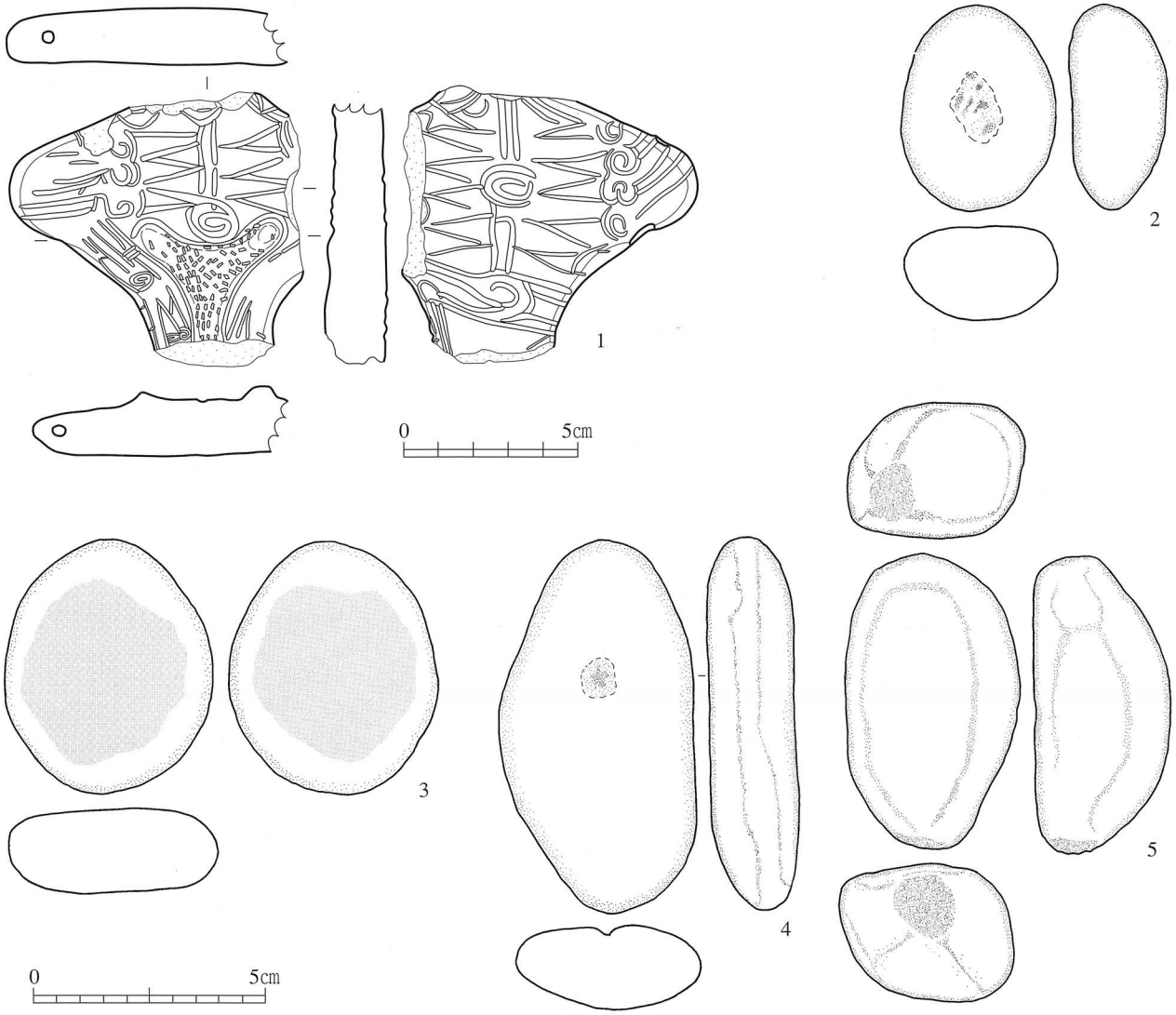
第12図1は中実の土偶の胸部資料で、左腕部を欠く。正面には刺突のあるＹ字状隆帯があり、貼り付けによりに乳房が表現されている。正面・背面には横位、縦位、斜位の沈線文や渦巻文が施文される。腕部には径3mmの貫通孔が穿たれている。



番号	種　類	層　位	特　　徴	写真図版	登録番号	番号	種　類	層　位	特　　徴	写真図版	登録番号
1	縄文土器	SK11・3層	隆沈線文　LR縄文	14－12	A－28	7	縄文土器	Ⅲ層	隆線文	14－18	A－16
2	縄文土器	Ⅲa層	並行する沈線文	14－13abc	A－1	8	縄文土器	Ⅲ層	無文	14－19	A－18
3	縄文土器	Ⅲ層	渦巻隆沈線文　刺突　RL縄文	14－14	A－2	9	縄文土器	Ⅲ層	隆沈線文	14－20	A－19
4	縄文土器	Ⅲa層	隆沈線文　RL縄文	14－15	A－4	10	縄文土器	Ⅴ層	RL縄文　割れ口に縄文	14－22	A－20
5	縄文土器	Ⅲ層	半截竹管による押引文	14－16	A－14	11	縄文土器	Ⅲ層	複合口縁下端に刺突　波状沈線文	14－21abcdefg	A－29
6	縄文土器	Ⅲ層	隆沈線文　磨消縄文	14－17	A－15	12	縄文土器	Ⅲa層	径14cm　波状口縁　LR縄文	14－27	A－3

番号	種　類	遺構・層位	特　　徴	石　材	重量(g)	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	写真図版	登録番号
13	微細剥離痕ある石器	Ⅴa層	末端右側に微細剥離痕	珪質頁岩	32.1	76.85	71.50	8.30	18－1	K－19
14	不定形石器	Ⅲ層	末端尖頭部状	珪質頁岩	48.8	72.50	52.00	17.15	18－2	K－14

第11図　Ⅰ区　出土遺物(1)



番号	種　類	遺構・層位	特　徴	残　存	長	幅	厚	写真図版	登録番号
1	土偶	表採	中実　径3cmの貫通孔　沈線文　渦巻文　Y字状隆帯→刺突	胴部上半	7.8(cm)	8.3(cm)	1.6(cm)	14－29	P－1

番号	種　類	遺構・層位	特　徴	石　材	重量(g)	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	写真図版	登録番号
2	凹石	Ⅲ'層	浅い凹み	安山岩	350	8.9	6.7	4.2	19－2	K－37
3	磨石	Ⅲ'層	両面磨面	石英安山	480	10.9	9.0	3.6	19－3	K－35
4	凹石	Ⅲ層	凹み部5mm	岩	620	16.0	8.5	3.8	19－5	K－36
5	敲石	Ⅲ層	両端敲打痕	安山岩	780	12.8	7.6	5.9	19－4	K－33

第12図　Ⅰ区出土遺物(2)

第2節　Ⅱ区

5・13Tで東西に延びる堀跡を検出したため、5・13Tを中心に東西46m、南北14mの台形の調査区を設定した。検出された遺構は、溝跡（ＳＤ）3条、井戸跡（ＳＥ）1基、河川跡（ＳＲ）1条、性格不明遺構（ＳＸ）3基である。

1　基本層序

大別して7層、細別して14層に分けられる。大まかにみるとⅠ層は現・旧耕作土である。Ⅱ層は暗褐色のシルト～粘土質シルトの層である。Ⅲ～Ⅶ層にかけては、2～5T・Ⅰ区とほぼ共通する。礫層はＳＤ1の南壁では標高約21.5mで、5T南端では22.2mと南が高くなる。

Ⅰ層：ａ・ｂ層に細分される。Ⅰａ層は現畑耕作土で上面は南へ傾斜する。Ⅰｂ層は旧耕作土で、層厚が10～50cmでＳＤ1の上部である北へ厚くなる。下面が北への傾斜になり、旧地形が北傾斜であったことを窺わせる。

Ⅱ層：ａ～ｄ層に細分される。Ⅱａ・ｂ層はともに暗褐色シルトである。Ⅱｃ層は黒褐色粘土質シルトでＳＤ1の上部に厚く堆積し、堆積土1層に相当する。Ⅱｄ層は暗褐色粘土質シルトで、Ⅲａ層のブロックを含むことから時期は不明だが耕作土の可能性がある。ＳＤ1の掘り込み面の可能性がある。

Ⅲ層：ａ・ｂ層に細分される。Ⅲａ層は黒褐色粘土で、層厚10～20で北へ傾斜する。Ⅲｂ層は黒褐色で砂質の度合でb1層とb2層に細分される。Ⅲｂ層も北へ傾斜する。

Ⅳ層：暗褐色砂質シルト。層厚10～30cmで、北へ傾斜する。

Ⅴ層：ａ・ｂ層に細分される。Ⅴａ層は黒褐色粘土で層厚20～40cmで北へやや傾斜する。Ⅴｂ層は暗褐色粘土。

Ⅵ層：暗褐色砂質シルト。礫層上に厚く堆積する。

Ⅶ層：礫層。前述したように礫層面には北への傾斜が推定され、それが上位の層の北への傾斜となって現れている。

2　遺構

ＳＤ1

Ⅱ区の北半部全体に検出された。検出長は45m以上で、東隣の4T北端部でも検出されていることから、東へ60m以上のびている。Ⅱ区内での南岸の検出長は36mである。北岸は調査区外である。掘り込みは調査期間とのかね合いから、東の5Tを挟んだ11mをⅡＡ区、西の18mをⅡＢ区としてその箇所のみ行った。ⅡＢ区での北壁の立ち上がり状況から北岸上端が間近であることがわかり、上端幅は9.5m、推定約10mと考えられる。底面はⅡＡ区では幅20～50cm、ⅡＢ区では40～50cm、深さは2.6～2.8mである。壁は底面より高さ約160cmまでは急角度で立ち上がり、それ以上は緩く立ち上がる。底面はほぼ平坦で、その標高はⅡＡ・Ｂ区ともに約20.3mである。堆積土はⅡＡ区では大別6層、ⅡＢ区では14層に分けられるが、大別すると上位が暗褐色系の砂質シルトの自然堆積層、中位が下位に存在するＳＲ1堆積土を起源とする黒褐色、灰白色、黄褐色などのブロックを多量に含む人為堆積層、下位が緑灰色の砂質シルト・砂で小枝などを含む自然堆積層である。中位の人為堆積層はＳＲ1が起源であることから、ＳＤ1を掘り込んだ際の土がＳＤ1の脇に盛土されたものが、埋め戻されたと推察される。出土遺物は、須恵器片、土師器片、縄文土器片、剥片、石皿などが出土しているが、これらはＳＤ1の時期決定資料ではない。縄文土器片3点、剥片3点、石皿1点を図示した。

ＳＤ2

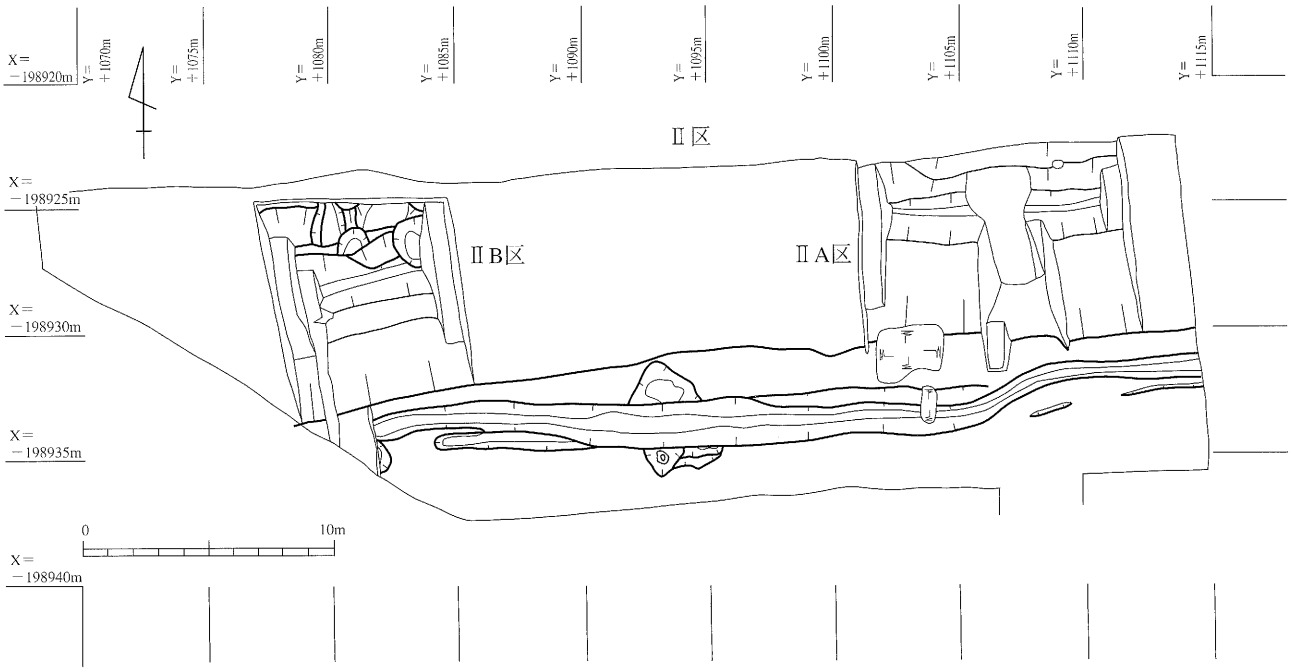
Ⅲ層上面で検出した。ＳＤ1の南に並行している。断面観察より2条であることが判明し、Ⅱｂ層上面をＳＤ2Ａ、Ⅱｄ層をＳＤ2Ｂとした。

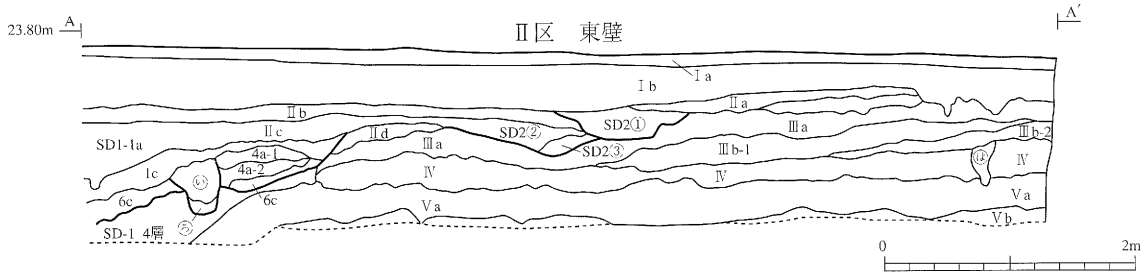
ＳＤ2Ａ

Ⅱ区西半部で約6m、東半部でその残存部を一部検出している。規模は東壁から上端幅120cm、下端幅40cm、深さ20cmである。方向はほぼ東西方向である。断面形はやや開いた舟底形である。堆積土は１層で、出土遺物はない。

ＳＤ2Ｂ

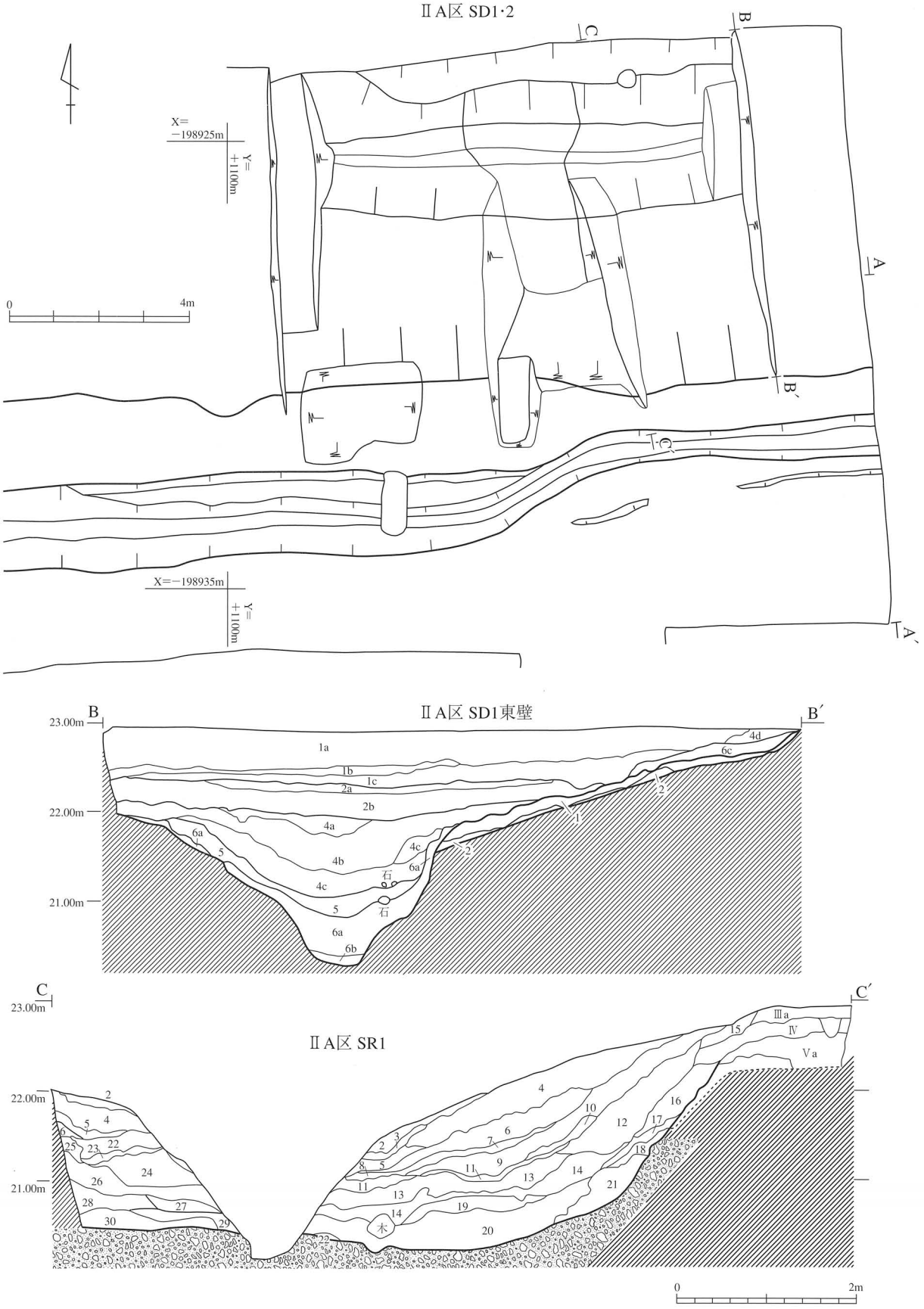
ＳＤ1の南側に並行し、ＳＤ1との間隔は0.5～2mである。ほぼ東西方向に伸びるが、東でやや強く、西で緩く屈曲している。検出長は33mで、東西とも調査区外へ伸びているが、東の4Ｔでは確認されていない。上端幅60～180



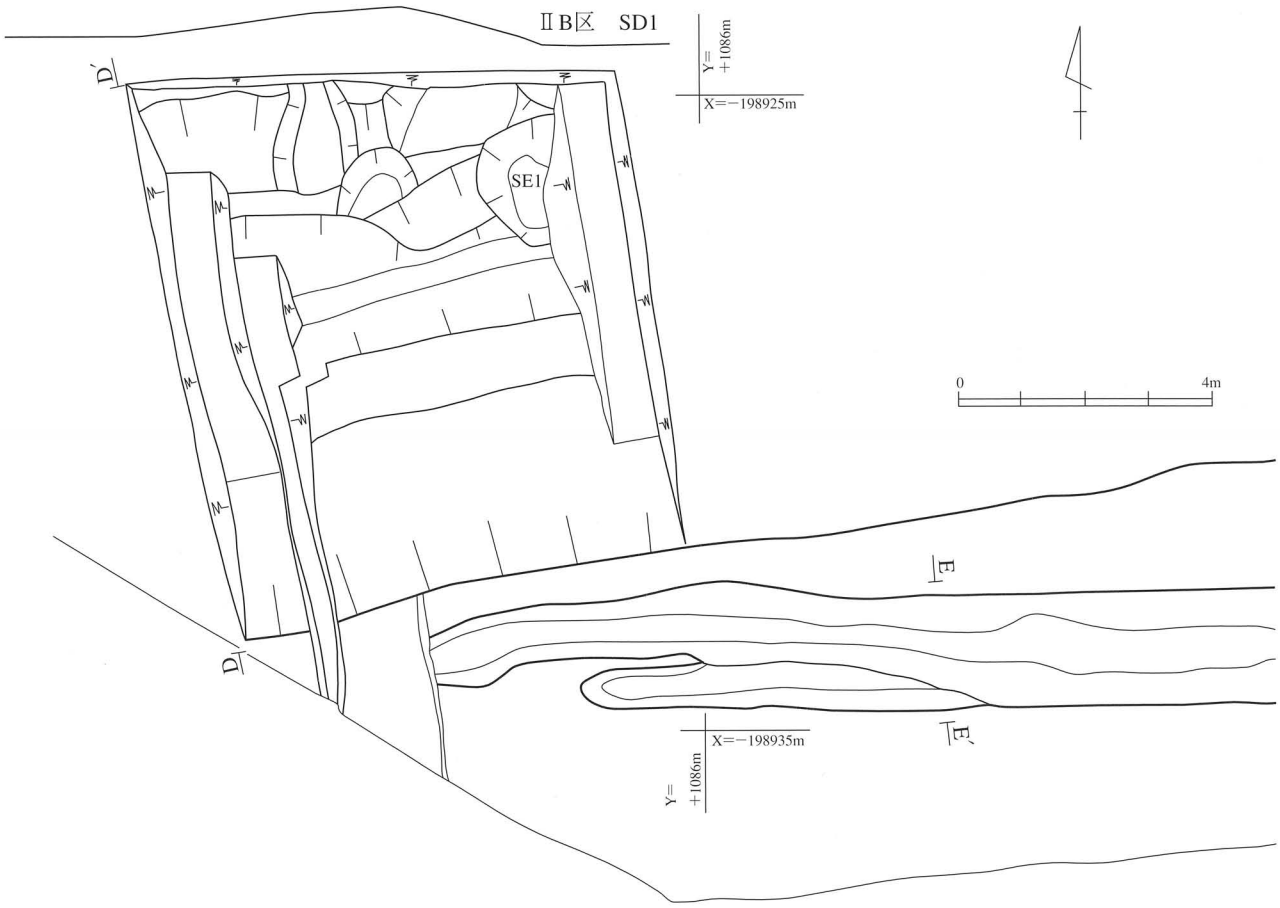


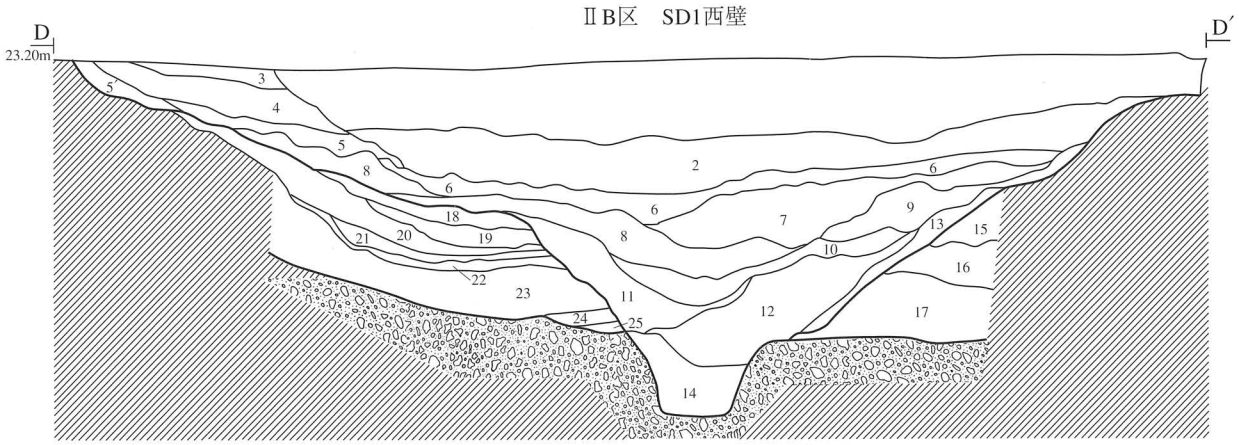
層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa	暗褐色10YR3/3	シルト	現耕作土
Ⅰb	暗褐色10YR3/4	シルト	現耕作土下部
Ⅱa	暗褐色10YR3/4	シルト	暗褐色土、霜降り状に含む、Ⅰ層よりしまる
Ⅱb	暗褐色10YR3/3	シルト	マンガン斑あり
Ⅱc	黒褐色10YR2/3	粘土質シルト	マンガン斑あり、炭化物若干含む
Ⅱd	暗褐色10YR3/3	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルトをブロックに含む
Ⅲa	黒褐色10YR2/2	粘土	暗褐色粘土質シルトをブロックに含む、炭化物を若干含む
Ⅲb－1	黒褐色10YR2/3	粘土質シルト	
Ⅲb－2	黒褐色10YR2/3	砂質シルト	Ⅲb－1層より砂質増す
Ⅳ	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	より砂質増す、北がやや暗くなる
Ⅴa	黒褐色10YR2/3	粘土	
Ⅴb	暗褐色10YR3/3	粘土	
Ⅵ	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	
SD1－1C	黒褐色10YR2/3	シルト	マンガン斑を含む
SD1－4d－1	灰褐色10YR4/2	砂質シルト	黒褐色粘土質シルトをブロックに含む
SD1－4d－2	黒褐色10YR2/2	粘土質シルト	灰白火山灰ブロック、灰色土、暗褐色土ブロックを含む
SD1－6C	黒褐色10YR3/1	粘土質シルト	
SD2－①	暗褐色10YR3/3	シルト	マンガン斑、灰褐色土を霜降り状に含む、しまりあり
SD2－②	黒褐色10YR2/3	粘土質シルト	マンガン斑あり、炭化物若干含む
SD2－③	暗褐色10YR3/3	シルト	Ⅲa層をブロックに含む
㉓	黒褐色10YR2/3	シルト	マンガン斑を含む
㉕			
㉔	黒褐色10YR2/3	砂質シルト	暗褐色砂質シルトをブロックに含む

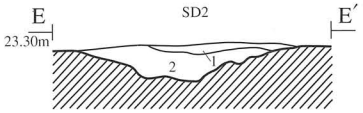
第13図　Ⅱ区遺構配置図・基本層序



第14図　ⅡA区SD1・2平面・断面図





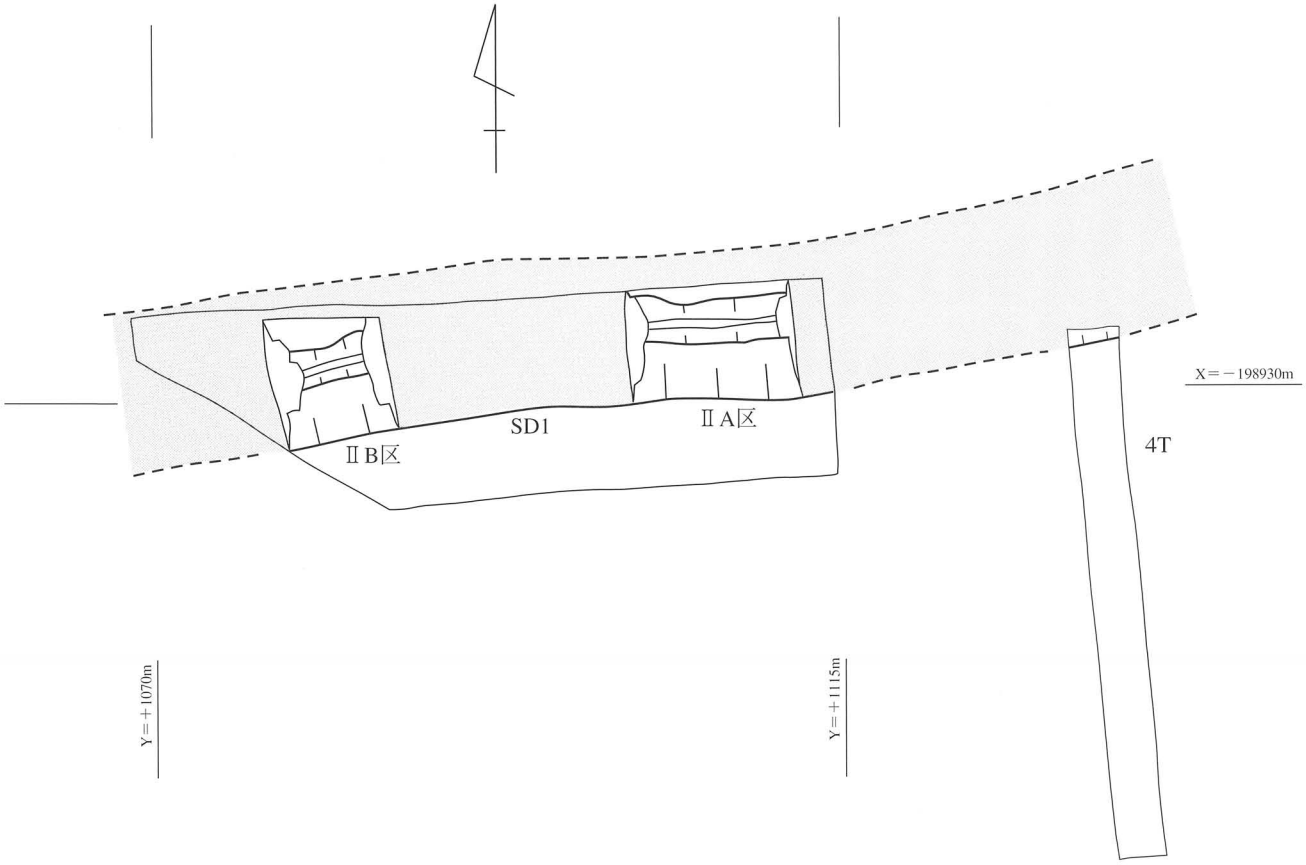


層位	土　　色	土　性	備　　考
SD2・1	暗褐色10YR3/4	シルト	マンガン粒、酸化鉄斑含む
SD2・2	暗褐色10YR3/3	シルト	マンガン粒、酸化鉄斑含む

第15図　ⅡB区SD1・2平面・断面図

II区　SD1・SR1　土層注記

層　位	土　　色	土　性	備　　考
ⅡA区SD1 1a	暗褐色10YR3/4	シルト	炭化物粒、マンガン、酸化鉄斑含む基本層Ⅱc層
1b	黒褐色10YR2/3	シルト	炭化物粒、マンガン、酸化鉄斑含む
1c	暗褐色10YR3/4	粘土質シルト	炭化物、マンガン、酸化鉄斑含む
2a	褐　色10YR3/4	粘土質シルト	炭化物、マンガン、酸化鉄斑含む
2b	にぶい黄褐色10YR4/4	シルト	炭化物、マンガン、酸化鉄斑含む
4a	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	SR1堆積土起源の黒褐色、暗褐色、灰褐色土などの小ブロックからなる
4b	黒褐色10YR2/3	粘土質シルト	4a同様SR1堆積土起源の大ブロックからなる、人為堆積土、灰白色火山灰を含む
4c	黄褐色10YR5/3	砂質シルト	4a同様SR1堆積土起源のブロックからなる、灰白色火山灰を含む、人為堆積土
4d	褐　色10YR4/4	シルト	4a同様SR1堆積土起源のブロックからなる、人為堆積土、灰白色火山灰を含む
5	黒褐色2.5Y3/1・粘土、黒　色10YR2/1・粘土、暗灰黄色2.5Y4/2・砂の互層		
6a	オリーブ黒色5Y2/2	砂質シルト	灰色、灰色砂質シルトをブロックに含む、植物、小枝などを含む
6b	灰　色7.5Y4/1	砂質土	暗緑灰色、細砂をブロックに含む
6c	暗褐色10YR3/4	粘土質シルト	炭化物、マンガン、酸化鉄斑含む
ⅡA区SR1 1上部	黒褐色10YR2/3	粘土	下部黒味強い
下部	黒褐色10YR2/2	粘土	
2	鈍い黄褐色10YR5/3	シルト	暗褐色シルトのブロック、灰色の極小ブロックを含む
3	鈍い黄褐色10YR5/4	シルト	灰白色火山灰を層状に含む
4	鈍い黄褐色10YR5/3	砂質シルト	マンガン、酸化鉄斑含む、炭化物粒僅か含む、洪水堆積物
5	鈍い黄褐色10YR4/3	粘土質シルト	マンガン、酸化鉄斑含む、うすい細砂層を狭在する
6	褐　色10YR4/4	細砂	マンガン、酸化鉄斑含む、洪水堆積物
7	鈍い黄褐色10YR5/3	砂質シルト	マンガン、酸化鉄斑含む
8	褐　色10YR4/6	小砂礫	礫間粗砂
9	鈍い黄褐色10YR5/3	細砂	マンガン、酸化鉄斑含む
10	鈍い黄褐色10YR5/4	粘土質シルト	マンガン、酸化鉄斑含む
11	黒褐色10YR3/2	粘土	薄い砂層、植物遺体層を含む
12	暗褐色10YR3/4	粘土質シルト	マンガン斑を含む
13	黄褐色2.5Y5/3	砂、砂礫	細～粗砂、砂礫、植物遺体含む
14	黒褐色10YR3/2	粘土	中砂、植物遺体（小枝）を含む
15	黒褐色10YR2/3	粘土質シルト	黒褐色土（基本層起源）暗褐色土のブロックを含む
16	暗褐色10YR3/3	粘土	基本層起源の黄褐色土、黒褐色土をブロックに含む
17	褐　色10YR4/4	細砂	
18	黒褐色10YR2/3	粘土	
19	黄褐色2.5Y5/3	中砂	
20	オリーブ黒色7.5Y3/2・腐植層、暗オリーブ灰色2.5GY4/1・砂、黒褐色10YR3/1・粘土、黄褐色2.5Y5/3・砂礫の互層樹木あり		
21	緑灰色10GY5/1	細砂	
22	鈍い黄褐色10YR5/3	細砂	酸化鉄斑
23	鈍い黄褐色10YR4/3	細砂	
24	褐　色10YR4/4	細砂	ラミナ状
25	鈍い黄褐色10YR5/3	細砂	酸化鉄、マンガン斑を含む
26	灰黄褐色10YR4/2 暗灰色2.5Y5/2 黒褐色10YR3/2	砂質シルト 細砂 粘土	互層、酸化鉄管状に含む
27	鈍い黄褐色2.5Y5/3		礫間粗砂
28	黄褐色2.5Y5/3	シルト	
29	黄褐色2.5Y5/4	シルト	
30	暗緑灰色10GY4/1	砂質シルト	互層、樹木あり
ⅡB区SD1 1	黒褐色10YR2/3	粘土質シルト	マンガン斑、炭化物を含む
2	黒褐色10YR3/2	粘土質シルト	マンガン斑、褐灰色土を霜降り状に含む、径5～10cmの円レキを含む
3	暗褐色10YR3/3	シルト	
4	黒褐色10YR2/2	シルト	SR1堆積土起源（鈍い黄褐色）の砂質シルトをブロックに含む
5	暗褐色10YR3/3	粘土質シルト	
5′	暗褐色10YR3/4	シルト	基本層のⅡd層類似
6	黒褐色10YR2/2	シルト	SR1堆積土起源の暗褐色砂質シルト、鈍い黄褐色細砂ブロックを含む、人為堆積土
7	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	SR1堆積土起源の黒褐色、褐色、灰黄褐色の粘土～細砂ブロックを含む、人為堆積土
8	黒褐色10YR3/2	粘土質シルト	径5～10cmの円レキを含む、SR1堆積土の起源の暗褐色砂質シルト、鈍い黄褐色細砂ブロックを含む、人為堆積土
9	暗褐色10YR3/4	粘土質シルト	
10	黒褐色10YR2/2	粘土	径5cmの円レキを若干含む
11	黒褐色10YR3/2	粘土質シルト	
12	灰黄褐色10YR4/2 暗褐色10YR3/4 黒褐色10YR3/2	粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト	径3cmの円レキを若干含む
13	黒褐色10YR3/2	粘土	暗褐色、黒褐色をブロックに含む
14	オリーブ黒色5Y3/1	砂質シルト	灰色細砂、黒色粘土ブロックを含む
ⅡB区SR1 15	鈍い黄褐色10YR4/3	砂質シルト	
16	鈍い黄褐色10YR5/3	粘土質シルト	マンガン霜降り状に含む、下部は粘土
17	鈍い黄褐色10YR5/3	砂、シルト、粘土	互層
18	黒褐色10YR3/1 黒褐色10YR2/3 黒褐色10YR2/1	粘土 細砂 粘土	互層
19	黒色10YR2/1 鈍い黄褐色10YR4/3	粘土 粘土	互層
20	褐灰色10YR4/1	粘土	
21	灰黄褐色10YR5/2	シルト	
22	鈍い黄褐色10YR5/3	粘土	灰白火山灰を3～4cmの厚さで下部に含む
23	褐灰色10YR4/1 灰黄褐色10YR5/2 鈍い黄褐色10YR4/3	粘土 粘土 細砂	互層
24	暗褐色10YR3/4	砂礫	径3～10cmの円礫
25	黒褐色10YR3/1	粘土	
25層以下			砂礫層、但し、薄い粘土層などを挟む



第16図　SD1全体図（1/500）

cm、下端幅20～70cm、深さ30cmである。底面はほぼ平坦だが、西半が高くなり、深さもやや浅くなる。堆積土は1層で、断面形は開いた舟底形である。出土遺物は、縄文土器片、磁器片（染付皿細片）が出土している。

ＳＥ1

ⅡＢ区北西隅、ＳＤ1の北壁で検出され、ＳＤ1に切られている。径は2.2m、深さは2.4mで礫層を掘り込んでいる。堆積土は崩落によりないが、砂層主体であった。底面で径約20cmの樹木片が出土したほか遺物はない。

ＳＸ1

Ⅱ区西南隅で検出された。ＳＤ1に切られる。平面形は不整楕円形ともいうべきもので、長軸4.8m、短軸1.25mである。底面が確認されたのは、北端のみで、深さ1.7m、中央から南は深さ2.4mまで確認したが、底面は不明である。中央部、南端部の壁がそれぞれ円形になることなどから、円形の深い遺構、井戸が3基切り合ったものである可能性が考えられる。堆積土は5層に分けられるが、いずれもしまりがない。また上位の層はブロック混じりで人為堆積土と考えられる。出土遺物はない。

ＳＸ2

ＳＤ2Ｂ中央の南側でＳＤ2Ｂに切られる。平面形は不整形で、規模は長軸3.15m、短軸2.07mである。底面は東側が平坦で、西側が凹凸である。堆積土は4層に分けられ、最下層４層はややグライ化した層で底面直上に酸化鉄の集積がみられる。出土遺物は縄文土器片が出土している。

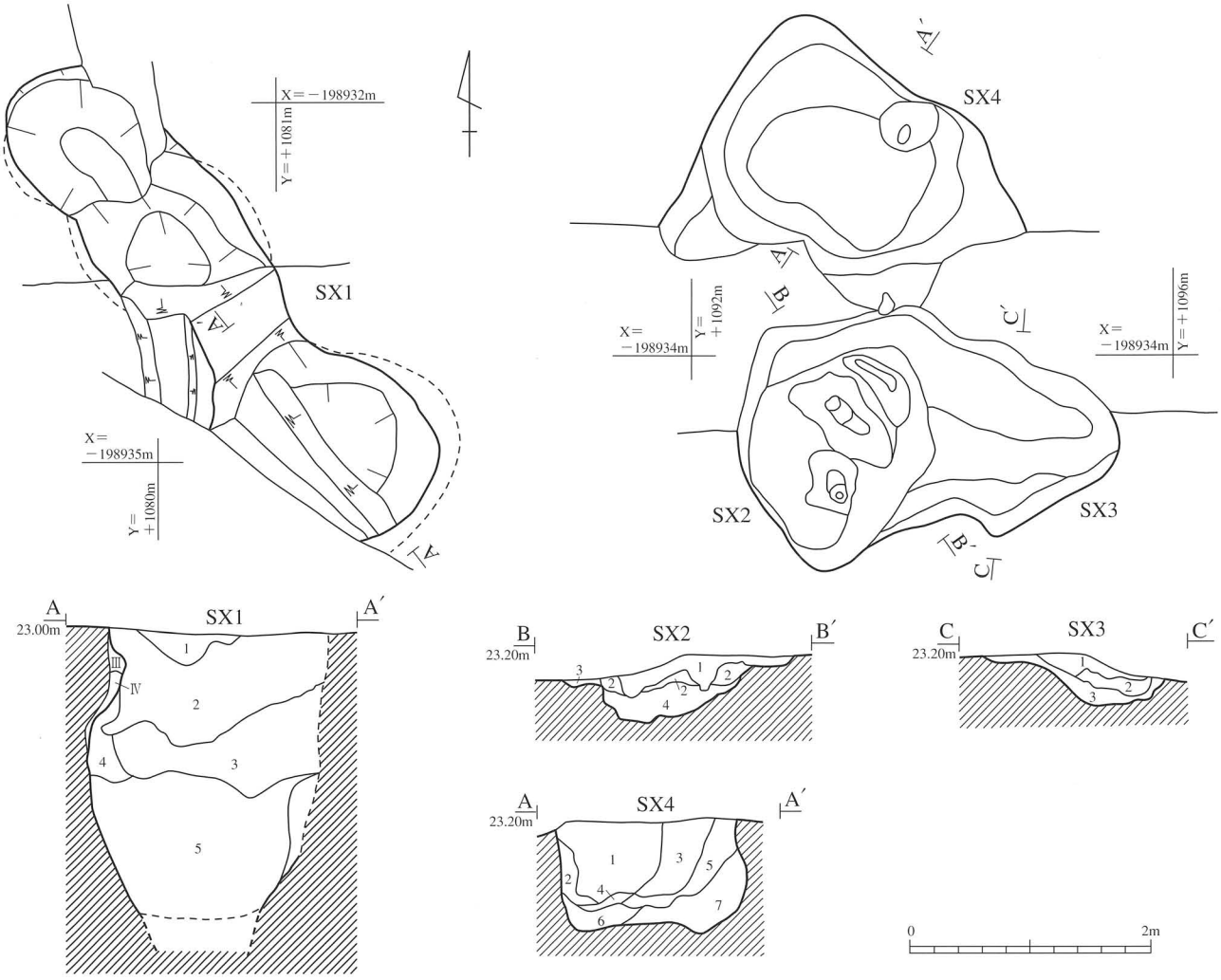
ＳＸ4

ＳＤ2を挟んでＳＸ2の北側にあり、ＳＤ2Ｂに切られる。平面形は方形と推定される。規模は上端が長軸2.7m短軸2.3m、底面長軸1.4m、短軸1m、深さ92cmである。堆積土は7層に分けられる。底面直上の6層はややグライ化

した層で下部に酸化鉄の集積がみられる。出土遺物としては、縄文土器片が出土している。

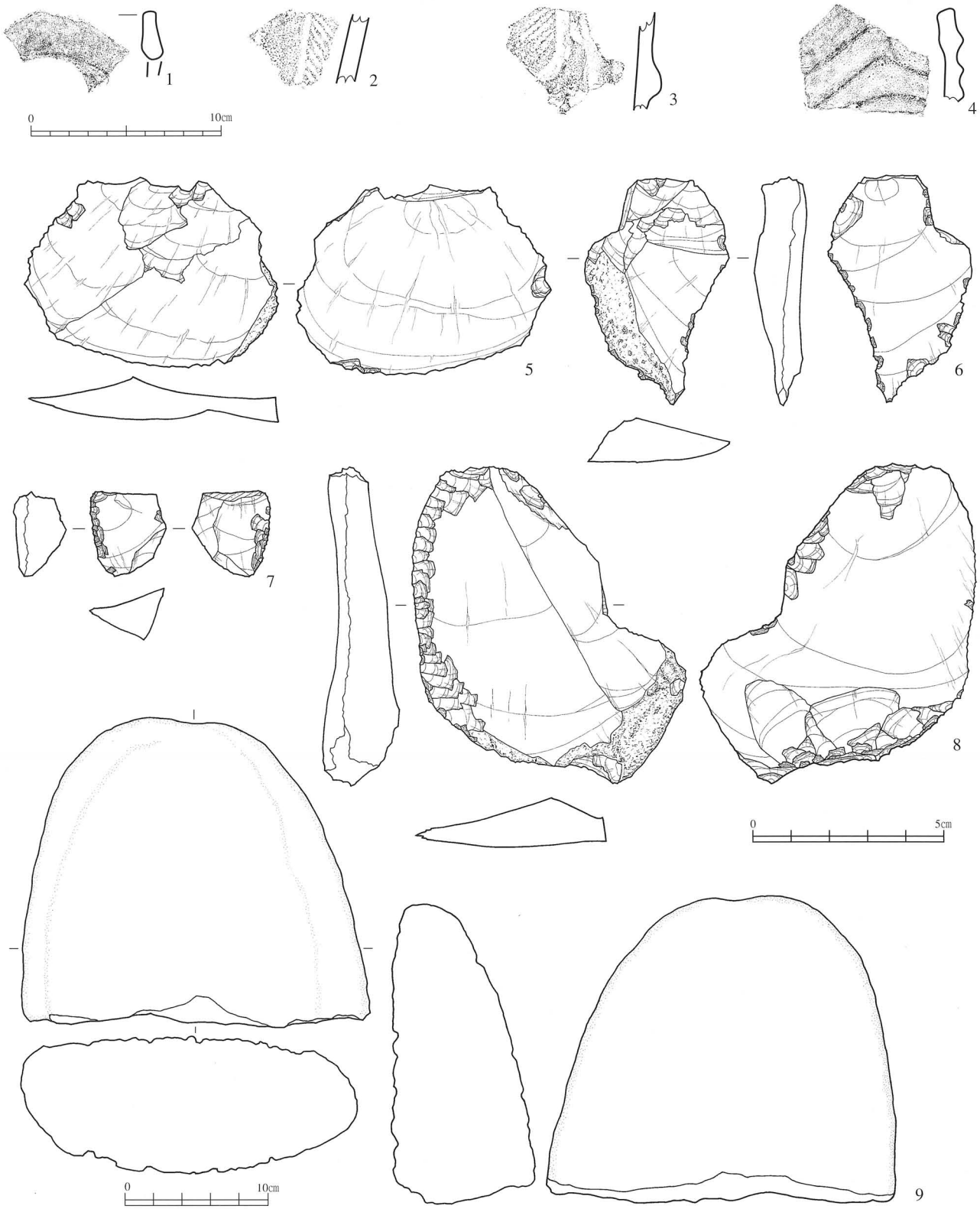
ＳＲ1

ＳＤ1の下位で検出されている。ⅡＡ区で南岸の立ち上がりを検出しているのみで全体の状況は不明であるが、上端幅約10m以上、深さ約2.5mで底面は砂礫層である。堆積土は砂、シルト、粘土などの互層となる。なかに基本層Ⅴ層の流入土や灰白色火山灰が観察され、基本層Ⅵ層形成以降しばらく開口していたと考えられる。



層位	土　　色	土　性	備　　考
SX1・1	黒褐色10YR3/2	粘土	暗褐色、粘土質シルトのブロックを含む、炭水化物を少量含む、しまりなし
SX1・2	鈍い黄褐色10YR4/3	粘土質シルト	下部は砂質シルト、基本Ⅲ層、Ⅳ層と暗褐色土をブロックに含む、しまりなし
SX1・3	黒褐色10YR3/1	粘土	2層を大ブロックに含む、しまりなし
SX1・4	黒褐色10YR3/2	砂質シルト	基本層Ⅳ層の崩壊土、しまりなし
SX1・5	黒褐色10YR3/2	粘土質シルト	しまりなし
SX2・1	鈍い黄褐色10YR4/3	粘土質シルト	
SX2・2	黒褐色10YR3/1	粘土	粘性強い、炭化物少量
SX2・3	黒褐色10YR2/2	粘土質シルト	暗褐色シルトブロック含む
SX2・4	黒褐色10YR3/2	砂質シルト	下端に酸化鉄集積
SX3・1	褐色　10YR4/4	粘土質シルト	
SX3・2	鈍い黄褐色10YR4/3	シルト	
SX3・3	黒褐色10YR3/2	粘土	炭化物少量、基本層Ⅲ層起源
SX4・1	褐色　10YR4/4	粘土質シルト	マンガン粒、酸化鉄斑を含む
SX4・2	暗褐色10YR3/3	シルト	
SX4・3	暗褐色10YR3/3	粘土質シルト	褐色土のブロックを含む
SX4・4	鈍い黄褐色10YR4/3	シルト	
SX4・5	黒褐色10YR2/3	粘土	暗褐色土、炭化物粒を若干含む
SX4・6	鈍い黄褐色10YR4/3	粘土	酸化鉄集積層あり
SX4・7	暗褐色10YR3/4	粘土質シルト	下部、褐色土ブロックを含む

第17図　SX1～4平面・断面図



番号	種　類	層　位	特　　徴	写真図版	登録番号	番号	種　類	層　位	特　　徴	写真図版	登録番号
1	縄文土器	SD1	口縁突起　円孔	−17	A−6	3	縄文土器	SD1・5層	隆沈線文　RL縄文	−25	A−27
2	縄文土器	SD1・4層	沈線文　磨消縄文	−24	A−26	4	縄文土器	Ⅰ層	隆線文	−26	A−5

番号	種　類	遺構・層位	特　　徴	石　材	重量(g)	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	写真図版	登録番号
5	二次加工ある剥片	SD1		流紋岩	38.2	67.40	49.10	12.30	18−3	K−3
6	二次加工ある剥片	SD1		珪質頁岩	18.8	60.45	38.70	11.35	18−4	K−4
7	不定形石器	SD1	右側辺交互剥離状　受熱	珪質頁岩	4.7	24.80	22.85	11.20	18−5	K−5
8	不定形石器	Ⅲa層上面	サイド・スクレイパー	珪質頁岩	76.2	93.50	67.50	18.30	18−6	K−9
9	石皿	SD1	約1/2欠損　片口状	安山岩	6230.0	220.0	246.0	98.0	18−6	K−39

第18図　Ⅱ区出土遺物

第3節　Ⅲ区

25Ｔで竪穴遺構の一部を検出し、住居跡の可能性が考えられたため、その遺構を中心に拡張し、南北25m、東西13mの台形の調査区を設定した。検出された遺構は、住居跡1軒、溝跡2条、土坑7基である。

1　基本層序

基本層序は大別で10層、細別で14層確認された。おおまかにみると、Ⅰ層が耕作土、Ⅱ、Ⅲ層が黒褐色～暗褐色砂質シルト層、Ⅳ～Ⅸ層が黄褐色系統の砂質シルト～細砂層で、Ⅹ層が礫層となる。礫層の標高は20.3mである。

Ⅰ層：ａ～ｅ層に細分される。Ⅰａ層は現畑耕作土、Ⅰｂ層は旧畑耕作土、Ⅰｃ・ｄ層は旧耕作土の下部で基本層がブロック状に含まれる層で北半にのみ分布する。Ⅰｅ層は細砂層である。

Ⅱ層：黒褐色砂質シルト。本来は全体に分布していたと推定されるが耕作により撹拌され、断面においても部分的に確認されるのみである。住居跡内には堆積土1層として厚く堆積している。

Ⅲ層：暗褐色砂質シルト。Ⅳ層への漸移層である。層厚10～20cm。ほぼ全域に分布する。

Ⅳ層：鈍い黄褐色砂質シルト。遺構検出面である。

Ⅴ層：黄褐色細砂。層厚15～30cmで、ほぼ全域に分布する。

Ⅵ層：褐色粘土質シルト。層厚5～15cmで、ほぼ全域に分布する。他に比べしまりがある。

Ⅶ層：褐色砂質シルト。層厚15～20cmで、ほぼ全域に分布する。

Ⅷ層：黄褐色粘土質シルト。層厚30～50である。他に比べしまりがあり、下部がやや砂質化する。

Ⅸ層：鈍い黄褐色細砂。層厚10～20cmである。

Ⅹ層：礫層。礫間は粗砂。径10～30cmの円礫。

2　遺構

ＳＩ1

［位置・確認面］調査区中央東寄りのⅣ層上面で検出した。

［重複］ＳＤ3、ＳＫ7と北辺で重複し、それらより古い。

［平面形・規模］北辺がＳＤ3などと切り合い、全貌は不明だが、東西5.2m、南北5m以上の方形で、南北軸の方向はＥ－30°－Ｓである。。

［堆積土］10層に分けられる。1～5層は住居内堆積土、6・7層はカマド内堆積土、8～10層はカマド掘り方堆積土である。1層は黒褐色シルトで基本層Ⅱ層に対応する。この層は住居のプラン外まで大きく分布しており、住居廃絶後、周囲の土層が自然流入しながらやや大きな凹地状になっていたと考えられる。4層には灰白色火山灰がブロック状に含まれる。1～5層は自然堆積層である。6・7層は自然流入の他カマド崩落土も含まれる。

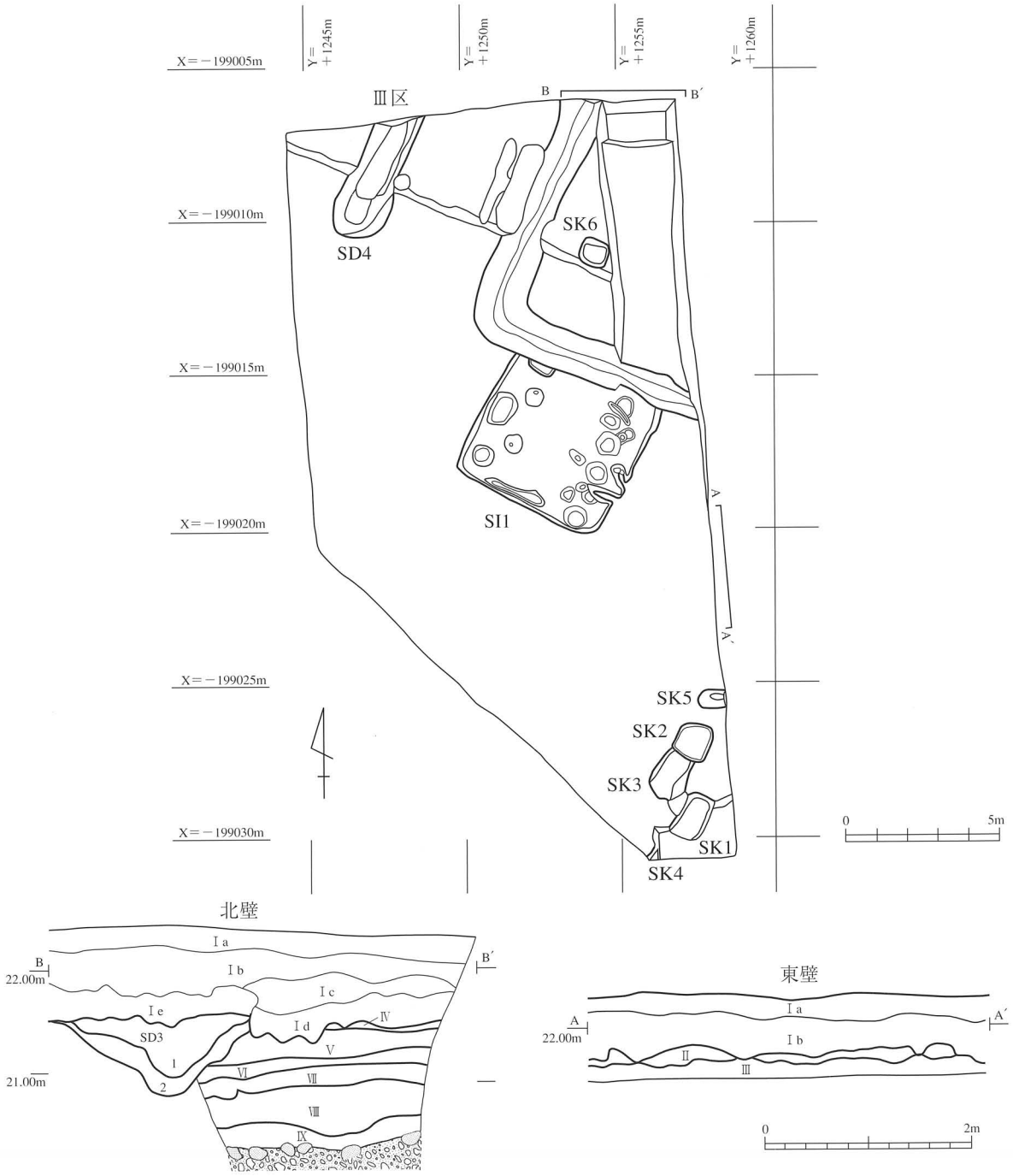
［床面］基本層Ⅴ層を床面とする。ほぼ平坦である。特に堅くしまった部分はない。

［壁］基本層Ⅳ・Ⅴ層を壁とし、急角度で立ち上がる。南辺、西辺の残存が良好で25～30cmほどの高さである。

［柱穴］床面でピットを14個検出した。径は20～70cm、深さは7～66cmと様々である。そのうちＰ3が65×38cm深さ36cm、Ｐ5・6が径約65cm深さ60～66cm、Ｐ13が径50cm深さ53cmでほかよりも深く、その位置関係からも主柱穴と考えられる。Ｐ5には柱痕跡がみられる。

［周溝］南辺に一部検出され、長さ2.1m、幅20～40cm、深さ20cm前後である。

［カマド］東辺中央やや南よりにある。両袖が25～30cmの高さで残存する。煙道部はない。規模は幅1.35m、奥行き1.1mで、焼け面は45×50cmである。袖の構築土は砂質シルト及び砂で基本層Ⅳ・Ⅴ層に類似する。左袖には礫2



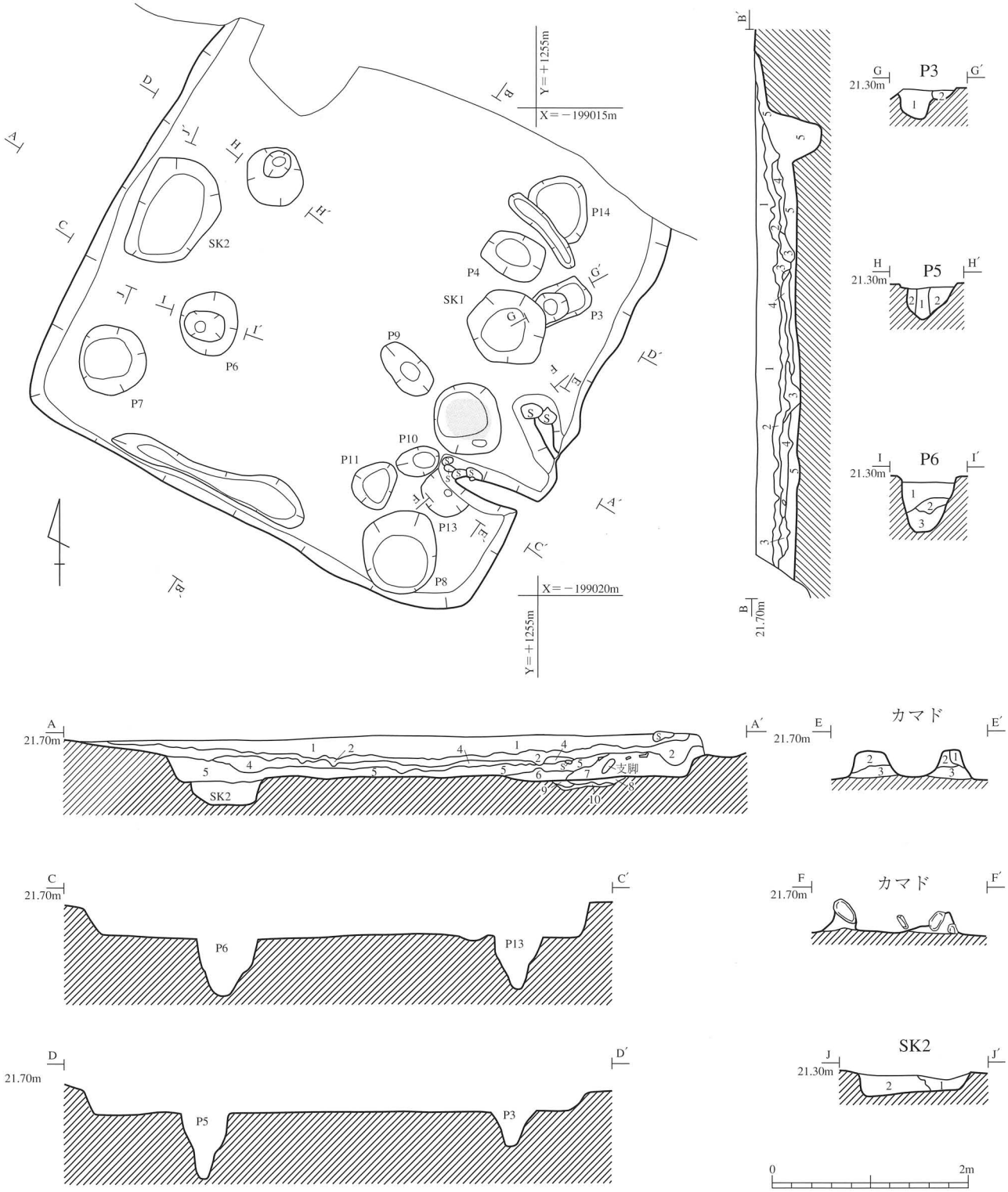
Ⅲ区東壁基本層序

層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	畑耕作土
Ⅰb	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	畑耕作土
Ⅱ	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	
Ⅲ	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	Ⅱ層ブロックをやや含む

Ⅲ区北壁基本層序

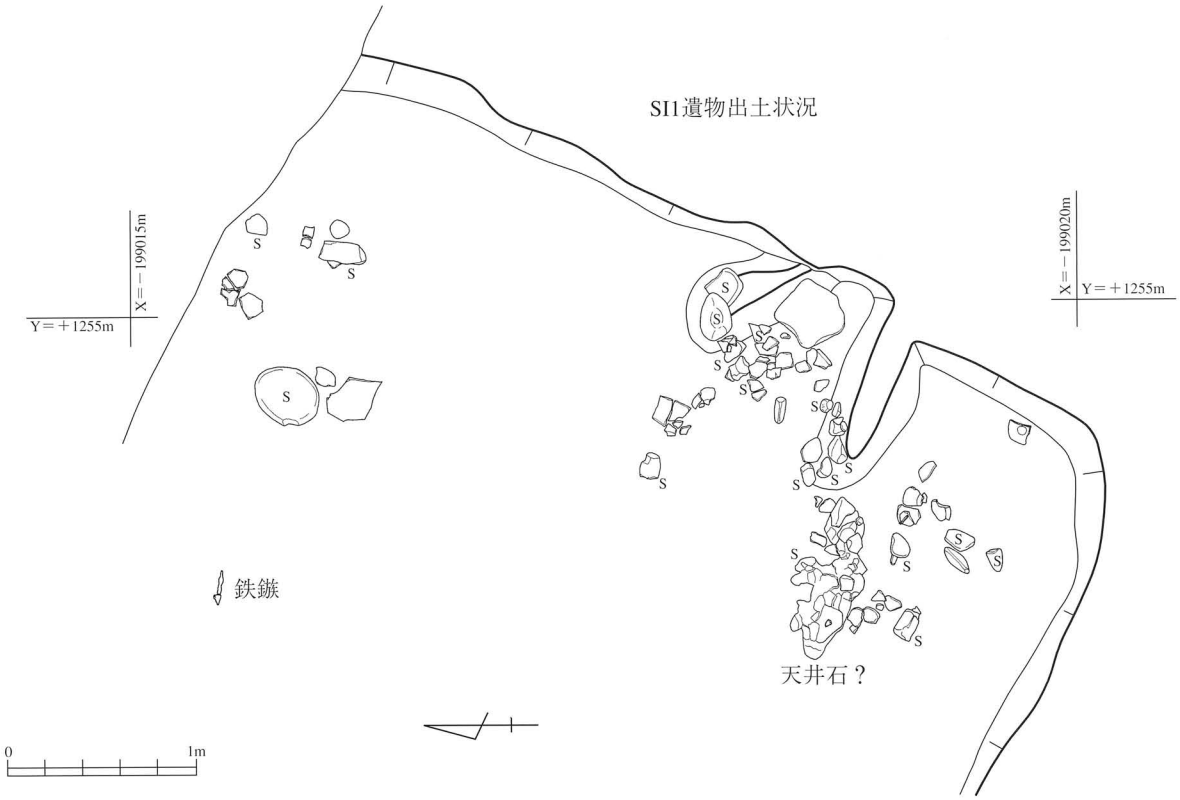
層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰc	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	畑耕作土　下部　北半にのみ分布
Ⅰd	褐色　10YR4/4	砂質シルト	畑耕作土　下部　北半にのみ分布
Ⅰe	褐色　10YR4/4	細砂	細砂のブロックを含む
Ⅳ	にぶい黄褐色10YR5/4	砂質シルト	
Ⅴ	黄褐色10YR5/6	細砂	
Ⅵ	褐色　10YR4/6	粘土質シルト	しまりあり、炭化物部分的に多い
Ⅶ	褐色　10YR4/6	砂質シルト	
Ⅷ	黄褐色10YR5/6	粘土質シルト	しまりあり、下部やや砂質化
Ⅸ	にぶい黄褐色10YR5/4	細砂	
Ⅹ	褐色　10YR4/4	礫層	礫間は粗砂径、10～30cmの円礫

第19図　Ⅲ区遺構配置図・基本層序



層位	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐色10YR2/3	シルト	基本層Ⅱ層、鈍い黄褐色のブロックを含む
2	褐色　10YR4/4	シルト	1層3層のブロックを含む
3	黄褐色10YR5/6	粘土質シルト	しまりやや強い
4	鈍い黄褐色10YR5/4	砂質シルト	灰白色火山灰のブロックを含む
5	褐色　10YR4/4	砂質シルト	
6	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	焼土、黄褐土ブロックを含む
7	褐色　7.5YR4/4	シルト	焼土の小ブロックを含む、カマド内堆積土
8	褐色　7.5YR4/3	砂質シルト	焼土ブロックを含む、カマド掘り方埋土
9	黒褐色7.5YR3/2	砂質シルト	焼土粒、炭化物を含む、カマド掘り方埋土
10	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	8層をブロックに含む、カマド掘り方埋土

第20図　Ⅲ区SI1平面・断面図



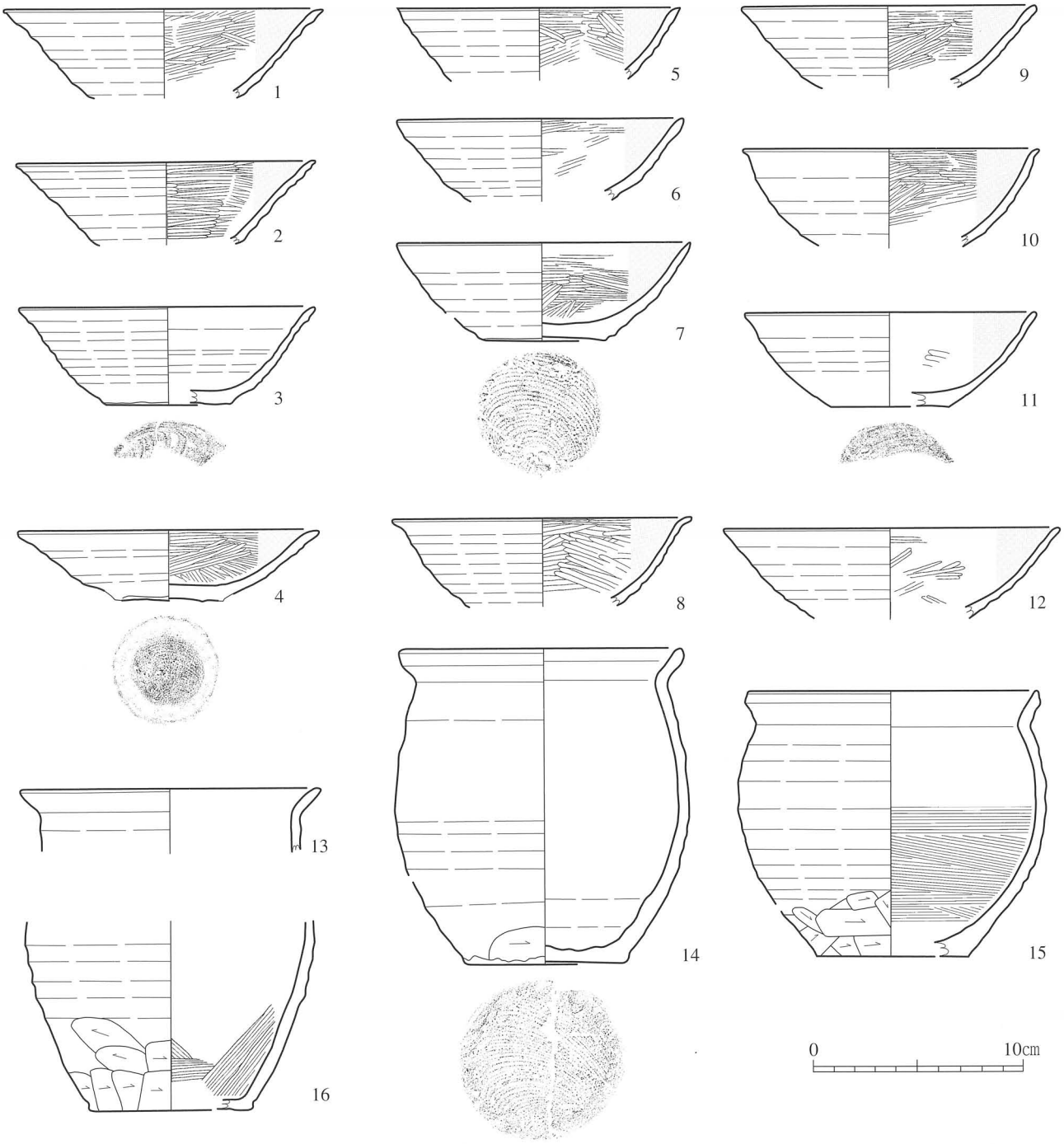
SI1カマド

層位	土　　色	土　性	備　　考
1	褐色10YR4/6	砂質シルト	暗褐色土ブロックを含む、カマド構築土
2	褐色10YR4/4	砂質シルト	暗褐色の薄い層を含む
3	褐色10YR4/6	砂質土	

SI1土坑・ピット一覧

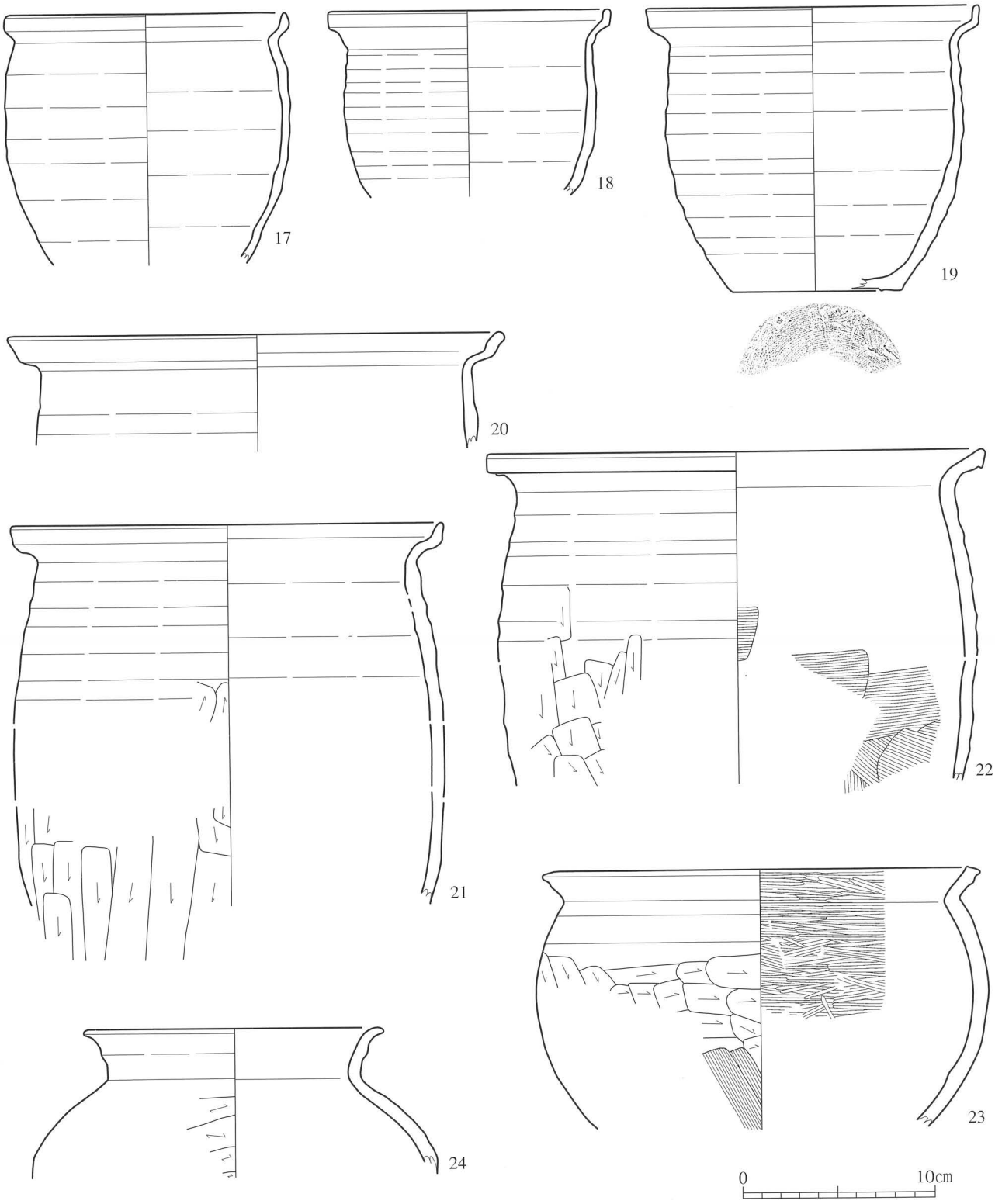
遺構	規　模(cm)	深さ(cm)	層位	土　　色	土　　性	備　　考
SK1	85×75	19	1	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	焼土、炭化物を若干含む
2	125×80	22	1	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	
			2	褐　色10YR4/4	砂質シルト	黒褐色ブロックを含む
ピット3	65×40	36	1	褐　色10YR4/4	砂質シルト	暗褐色ブロックを含む炭化物を若干含む
			2	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	
4	60×47	17	1	褐　色10YR4/4	砂質シルト	暗褐色のブロックを含む
5	60×55	66	1	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	柱痕跡
			2	褐　色10YR4/4	粘土質シルト	暗褐色のブロックを含む
6	65×60	59	1	褐　色10YR4/4	砂質シルト	
			2	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	
			3	褐　色10YR4/4	粘土質シルト	
7	径73	23	1	鈍い黄褐色10YR4/3	砂質シルト	炭化物若干含む
8	85×74	30	1	鈍い黄褐色10YR4/3	砂質シルト	暗灰黄色ブロック、炭化物、焼土を含む
9	64×35	25	1	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	焼土粒、炭化物を含む
10	45×30	7	1	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	焼土粒炭化物を含む、遺物多量
11	50×40	14	1	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	焼土粒、炭化物を含む、黒褐色ブロックを含む
13	径50	53				注記なし
14	68×58	15	1	褐　色10YR4/4	砂質シルト	

第21図　SI1遺物出土状況図



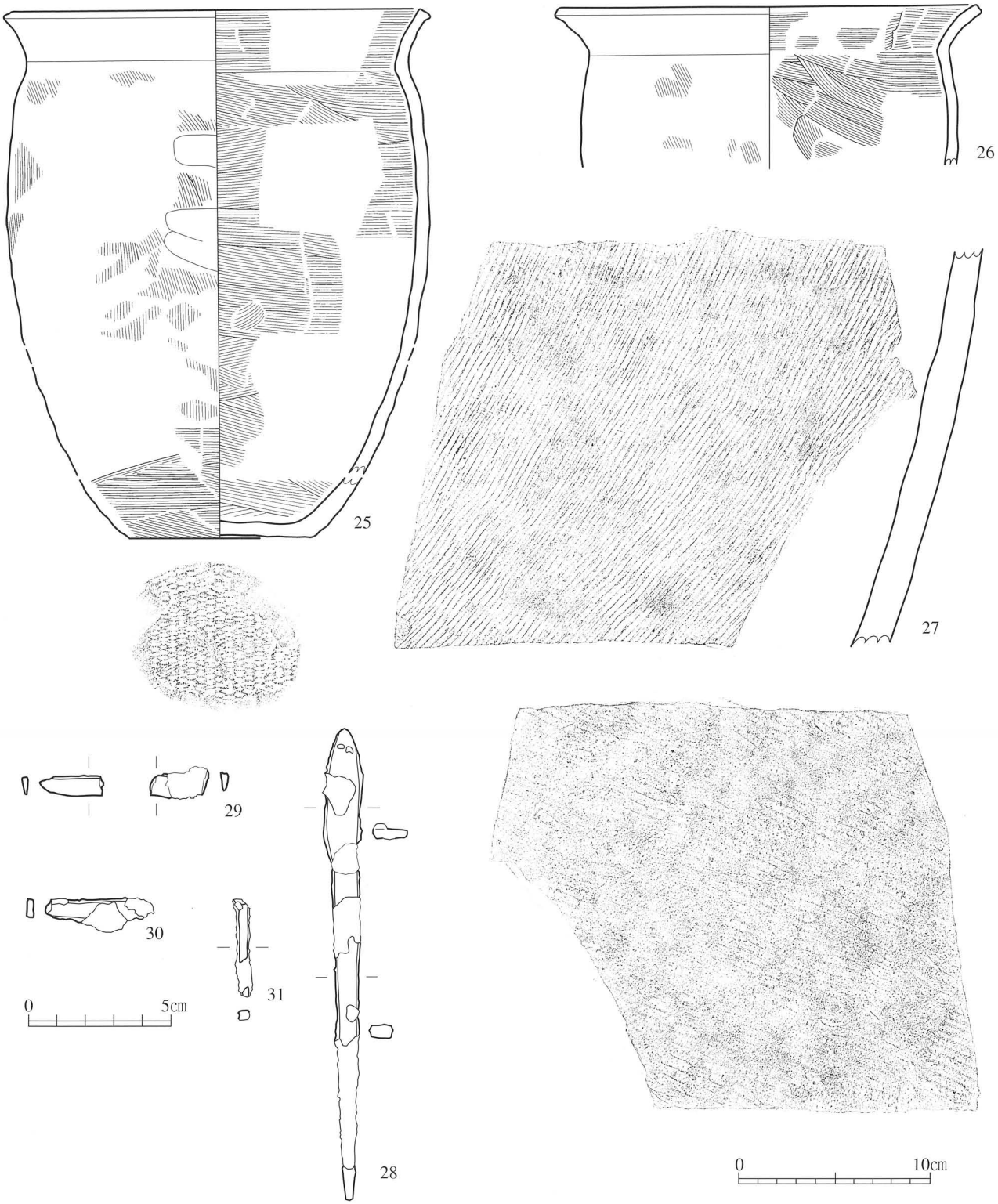
番号	種　類	遺構・層位	特　徴	残　存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	写真図版	登録番号
1	土師器杯	P13　堆積土	外：ロクロナデ　内：ヘラミガキ　黒色処理	口～体1/6	15.4			15－1	D7
2	土師器杯	カマド右	外：ロクロナデ　内：ヘラミガキ　黒色処理	口～体1/5	14.4			15－2	D9
3	赤焼土器杯	床直	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ	口～底1/3	14.2	6.0	4.8	15－3	D8
4	土師器高台杯	堆積土	外：ロクロナデ　底：回転糸切り→オサエ　内：ヘラミガキ　黒色処理	高台以外完形	14.5			15－4	D5
5	土師器杯	堆積土	外：ロクロナデ　内：ヘラミガキ　黒色処理	口～体1/5	13.4			15－5	D10
6	土師器杯	4層	外：ロクロナデ　内：ヘラミガキ　黒色処理	口～体1/5	13.8			15－6	D11
7	土師器杯	P13　堆積土	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ヘラミガキ　黒色処理	口～底1/4	14.0	6.0	4.8	15－7	D6
8	土師器杯	5層	外：ロクロナデ　内：ヘラミガキ　黒色処理	口～体1/4	14.4			15－8	D16
9	土師器杯	2層	外：ロクロナデ　内：ヘラミガキ　黒色処理	口～体1/4	14.2			15－9	D15
10	土師器杯	SK1　1層	外：ロクロナデ　内：ヘラミガキ　黒色処理	口～体1/3	14.2			15－10	D13
11	土師器杯	4層	外：ロクロナデ　内：ヘラミガキ(磨滅)　黒色処理	口～底1/3	14.0	5.6	4.6	15－11	D14
12	土師器杯	P13　堆積土	外：ロクロナデ　内：ヘラミガキ(磨滅)　黒色処理	口～体1/6	16.2			15－12	D12
13	土師器甕	堆積土	両面：ロクロナデ	口～体1/4	14.4			15－13	D24
14	土師器甕	堆積土	外：ロクロナデ→一部ヘラケズリ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ	口～底1/3	13.6	8.0	15.3	15－14	D17
15	土師器甕	カマド内	外：ロクロナデ→下端ヘラケズリ　底：ヘラナデ　内：回転ヘラナデ	口～底1/4	13.8	7.3	12.9	15－15	D19
16	土師器甕	5層	外：ロクロナデ→下半ヘラケズリ　底：切り離し不明→手持ちヘラケズリ 内：ロクロナデ→下半ヘラケズリ	体～底		7.8		15－16	D30

第22図　SI1出土遺物(1)



番号	種　類	遺構・層位	特　　徴	残　存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	写真図版	登録番号
17	土師器甕	堆積土	両面ロクロナデ	口～体1/3	14.6			16－1	D22
18	土師器甕	5層	両面ロクロナデ	口～体1/3	14.8			16－2	D23
19	土師器甕	堆積土	両面ロクロナデ　底：回転糸切り	口～底1/2	17.4	9.0	15.0	16－3	D18
20	土師器甕	堆積土	両面ロクロナデ	口～体1/5	23.0			16－4	D21
21	土師器甕	P7・カマド内	外：ロクロナデ→下半ヘラケズリ　内：ロクロナデ	口～体1/4	22.6			16－5	D28
22	土師器甕	カマド内	外：ロクロナデ→下半ヘラケズリ　内：ロクロナデ→下半ヘラナデ	口～体1/4	26.0			16－6	D26
23	土師器甕	床直	外：ロクロナデ→ヘラケズリ→下半ヘラナデ　内：ヘラミガキ	口～体1/3	22.8			16－8	D20
24	須恵器甕	5層	外：ロクロナデ→体部ヘラケズリ　内：ロクロナデ	口縁部1/4	15.6			17－2	E8

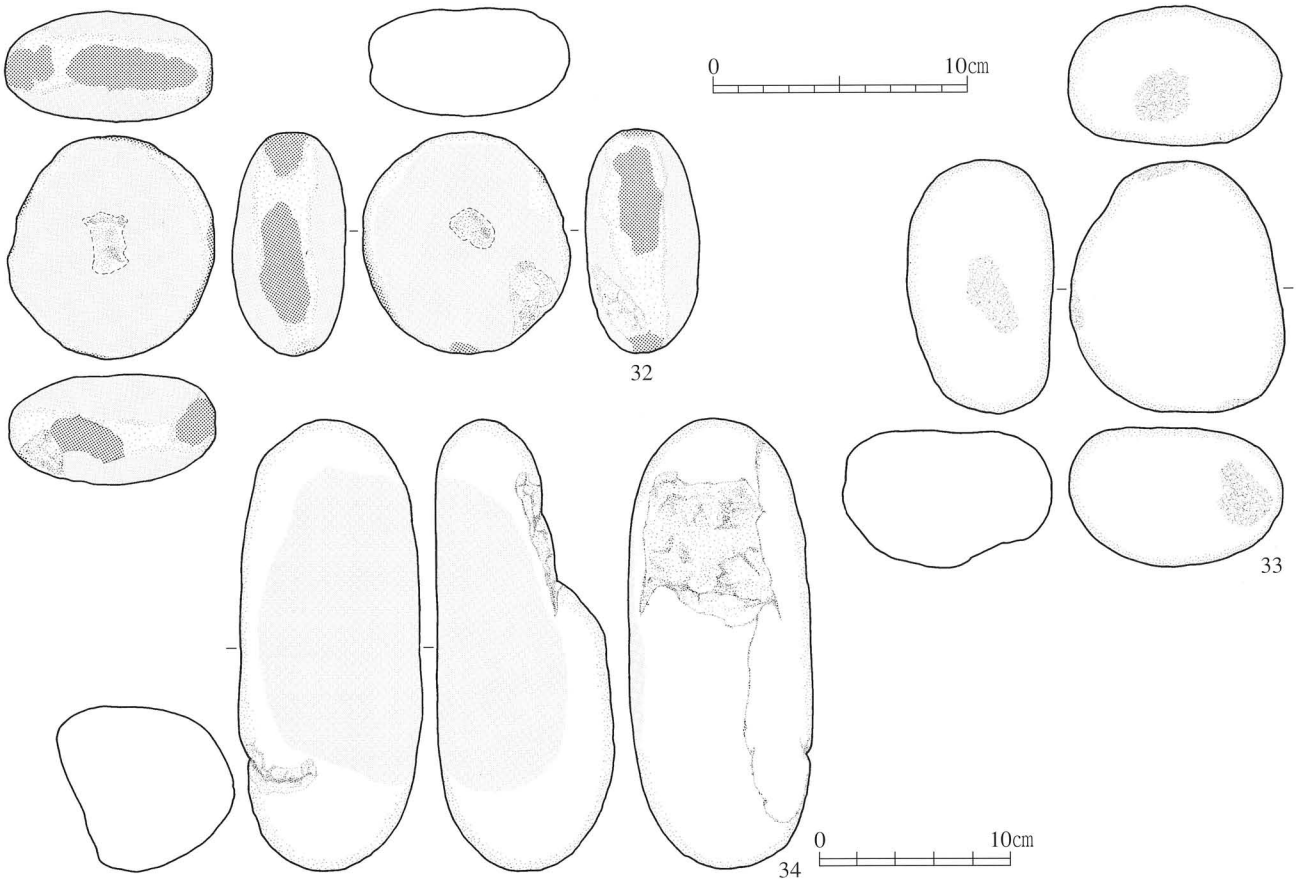
第23図　SI1遺物(2)



番号	種　類	遺構・層位	特　徴	残　存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	写真図版	登録番号
25	土師器甕	4層	外：ヘラナデ→ナデ　内：ヘラナデ　底：ムシロ状圧痕	口～底　1/3	21.0	9.6	27.7	17－1ab	C－29
26	土師器甕	堆積土	外：ヘラナデ→ナデ　内：ヘラナデ	口～体	21.8			16－7	C－31
27	須恵器甕	床直	外：平行タタキ目　内：あて目					17－3ab	E－9

番号	種　類	遺構・層位	特　徴	残　存	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
28	鉄製品　鉄鏃	床面	細根式　刃長4.3、刃幅1.2、刃厚0.3	ほぼ完形	16.5	0.8	0.4	22.3	18－8	N－1
29	鉄製品　刀子	床面		鋒部残	4.2	0.7	0.35	1.8	18－9	N－3
30	鉄製品　刀子	堆積土		茎部残	3.8	0.7	0.3	3.0	18－10	N－4
31	鉄製品　釘	床面		先端欠	3.5	0.4	0.4	1.5	18－12	N－2

第24図　SI1出土遺物(3)



番号	種　類	遺構・層位	特　徴	石　材	重量(g)	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	写真図版	登録番号
32	凹磨敲石	5層	浅い凹み　側面敲打による平坦面	安山岩	440	8.9	8.2	4.5	19−7	K31
33	敲石	4層	敲打痕両端と1側辺	安山岩	760	10.0	8.5	5.6	19−8	K30
34	磨石	2層	磨面2面	安山岩	2910	23.9	9.7	9.3	19−9	K28

第25図　SI1出土遺物（4）

個、右袖内には礫4個が埋め込まれている。そのうち左右の1点は同一個体を半割したものである。また、右袖前方には長さ90cm、幅40cmほどの焼けて亀裂の入った大きなギョウカイ岩が出土しており、カマドの天井石と考えられる。また、焼け面の下部に80×75cmの掘り込みがある。さらにカマド内やや右寄りに長さ20cmのやけた礫が縦位で検出され支脚と考えられる。

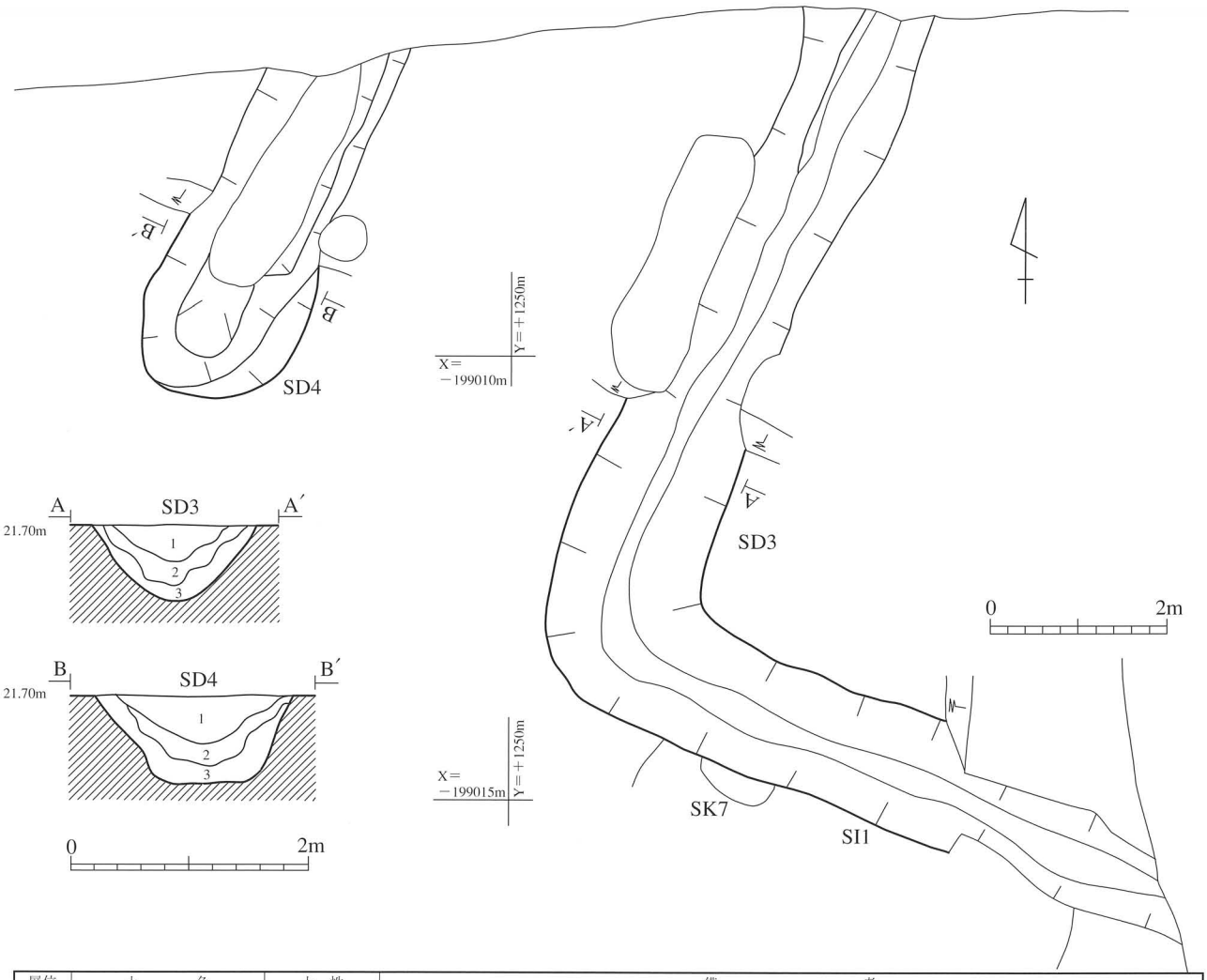
［その他］カマド北側の第1土坑、西辺壁際の第2土坑、西南隅のＰ7、カマド南のＰ8はその規模などから貯蔵穴の可能性がある。

［出土遺物］**堆積土出土遺物**　ロクロ土師器坏（6・8・9・11）・高台坏（4）・甕（13・14・19・20・25・26）、須恵器甕（24）、鉄製品（30）、礫石器（32～34）が出土している。11の底部は回転糸切り後無調整である。4は高台部分が剥落している。13・14・19は小形の甕である。19は口縁部が最大径になるもので、底部は回転糸切り後無調整である。25は外面にヘラナデ後、ナデが施されている。また底部にはムシロ状圧痕があり、棒状の工具を繰り返しこすりつけ十字状に線刻している。30は刀子の茎部分である。32は凹痕・磨痕・平坦面になるタタキ痕、33はタタキ痕、34は磨痕のある礫石器である。**カマド内および周辺出土遺物**　カマド内およびその周辺の床直や堆積土最下層の5層から遺物がまとまって出土している（第21図）。ロクロ土師器坏（2）・甕（15・16・18・22・23）、赤焼土器坏（3）である。15・16・18は小形の甕で、15・16は体部下端にヘラケズリが施され、15は内面に回転ヘラナデが施されている。18は口縁部が最大径になる。22・23は大形の甕で、23は胴部が丸味をもち、外面にはヘラケズ

リ後ヘラナデ、内面にはヘラミガキが施されている。**床直出土遺物**　ロクロ土師器甕（17）、須恵器甕（27）、鉄製品（28・29・31）が出土している。17は小形の甕である。27は大形甕の大破片で、外面は平行タタキ、内面は平行タタキ状のあて目で凹凸が顕著である。28は細根式の鉄鏃でほぼ完形である。棘箆被はない。鉈など別の鉄製品の可能性もある。29は刀子の切っ先部分である。31は釘で先端が欠けている。**ピット土坑出土遺物**　ＳＫ1　ロクロ土師器坏（10）が出土している。Ｐ7　ロクロ土師器甕（21）が出土している。Ｐ13　ロクロ土師器坏（1・7・12）が出土している。7の底部は回転糸切り後無調整である。Ｐ15　ロクロ土師器坏（5）が出土している。

ＳＤ3

Ⅲ区北東に位置する。北東から南東へ屈曲する溝で、北側が耕作の撹乱、東端が確認トレンチによりやや削平されている。溝の東半部がＳＩ1の北辺とＳＫ7の大部分を切っている。検出長は約15ｍで、北壁から8ｍの所で東へ直角に曲がり、方向は北側がＮ－25°－Ｅ、東側がＥ－23°－Ｓである。規模は上端幅60～90㎝、下端幅20～40㎝、深さ65㎝で、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層で、断面形は開いたＵ字形である。堆積土中より、陶器、中世陶器、土師器、須恵器の細片が少量出土している。



層位	土　色	土　性	備　考
SD3・1	褐色　10YR4/4	砂	
SD3・2	褐色　10YR4/4	砂	1層に比し若干暗い、基本層Ⅲ～Ⅶを小ブロック状に微量
SD3・3	にぶい黄褐色10YR5/4	砂	基本層Ⅲ～Ⅶ層をこぶし大のブロック状に多量
SD4・1	褐色　10YR4/4	砂	明黄褐色砂質土ブロック少量
SD4・2	にぶい黄褐色10YR4/3	砂	炭化物粒少量
SD4・3	にぶい黄褐色10YR5/4	砂	基本層Ⅲ～Ⅶ層をこぶし大のブロック状に多量

第26図　SD3・4平面・断面図

ＳＤ4

Ⅲ区北西部に位置する。ＳＤ3の北半と並行し、その間隔は約3.5ｍである。北半は耕作により上半が削平を受けている。検出長は4.6ｍで、方向はＮ－26°－Ｅである。規模は上端幅140～168㎝、下端幅60～80㎝、深さ75㎝で、底面は平坦である。堆積土は3層で、断面形は舟底形である。堆積土中より土師器細片が数点出土している。

ＳＫ1

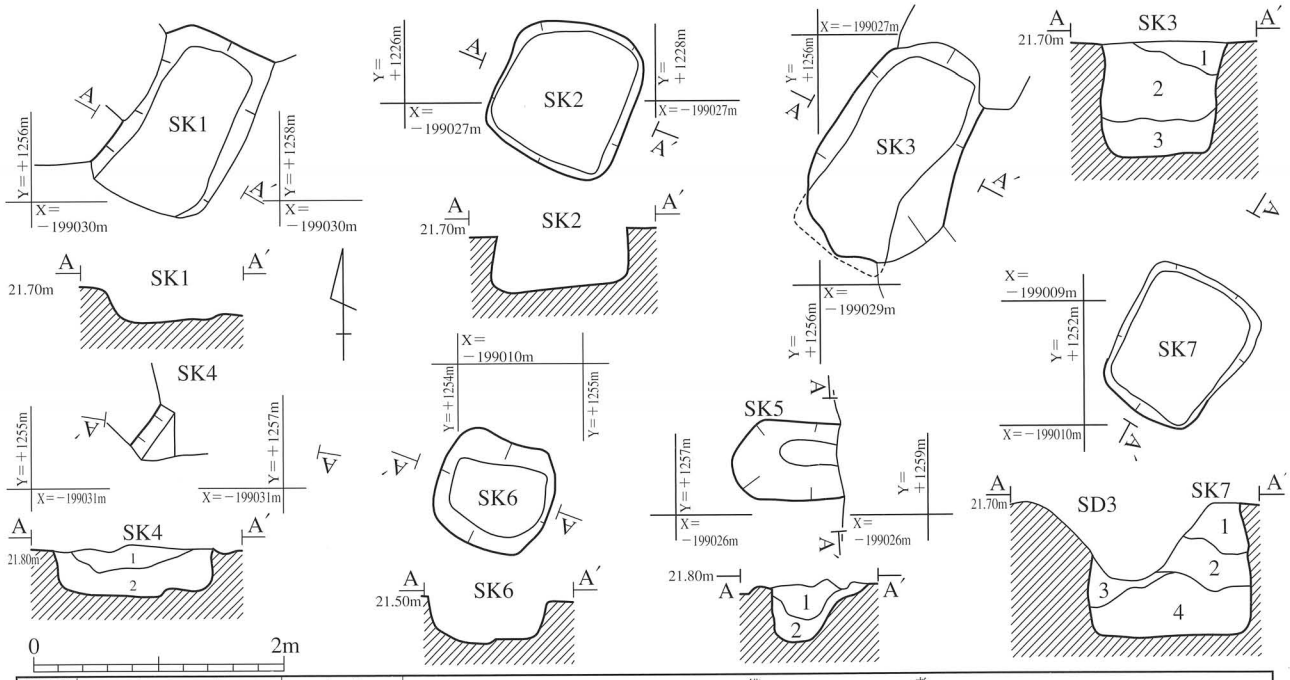
Ⅲ区の南東端に位置し、Ⅳ層上面で検出された。撹乱により、東・南辺、西辺の一部が壊されている。規模は長軸150㎝以上、短軸95㎝以上で深さは30㎝である。平面形は底面の状態から隅丸長方形と考えられる。方向はＮ－30°－Ｅである。堆積土については、土層注記はないが、調査時の所見から人為堆積で、断面形は舟底形である。堆積土中から土師器片が１点出土している。

ＳＫ2

Ⅲ区の南東端に位置し、Ⅳ層上面で検出された。ＳＫ3より新しい。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸120㎝、短軸105㎝で、深さ45㎝、方向はＮ－23°－Ｅである。堆積土は注記がないが、調査所見から人為堆積である。断面形はややオーバーハング気味の長方形である。出土遺物はない。

ＳＫ3

Ⅲ区の南東端のⅣ層上面で検出された。ＳＫ2より古い。上面の平面形は不整楕円形だが、底面は隅丸長方形を呈している。上面の規模は、長軸190㎝、短軸115㎝、底面は長軸173㎝、短軸76㎝で、深さ90㎝である。方向はＮ－30°－Ｅである。堆積土は3層に分けられるが、いずれも多量のブロック状を呈し、かなりしまりのある人為堆積土である。断面形はほぼ方形で、壁は垂直に立ち上がり、南辺ではオーバーハングしている。堆積土中より陶器



遺構・層位	土　色	土　性	備　考
SK3・1	黄褐色10YR5/6	砂	径3㎝内のより明るい黄褐色砂質、シルトブロック多量
SK3・2	鈍い黄褐色10YR5/4	砂	径10㎝内の黄褐色砂質シルトブロック多量、暗褐色砂質シルトブロック少量
SK3・3	黄褐色10YR5/6	砂	径10㎝内のブロック状を呈する、暗褐色砂質シルトブロック少量
SK4・1	鈍い黄褐色10YR5/3	砂	径2㎝内の黄褐色砂質土ブロック少量
SK4・2	鈍い黄褐色10YR5/3	砂	径5㎝内の黄褐色砂質土ブロック多量
SK5・1	鈍い黄褐色10YR4/3	砂	
SK5・2	鈍い黄褐色10YR4/3	砂	黄褐色砂(地山)ブロック多量
SK7・1	褐色　10YR4/4	砂	
SK7・2	暗褐色10YR3/4	砂	径2㎝内の鈍い黄褐色(地山)ブロック少量
SK7・3	鈍い黄褐色10YR5/4	砂	径5㎝内の鈍い黄褐色(地山)ブロック少量
SK7・4	黄褐色10YR5/6	砂	径10㎝内のブロックにより構成される、褐色砂質土ブロックを一部に少量含む

第27図　SK1～7平面図・断面図

片、土師器片が出土している。

ＳＫ4

Ⅲ区の南東端の壁際に西辺の一部を検出したのみである。東側は、耕作により壊されている。検出面はⅣ層であるが、調査区南壁の断面で立ち上がりが、耕作土下部の途中まで確認され、掘り込み面はより上位と考えられる。規模は断面より、120cm以上、深さ40cmで、西辺より方向はＮ－37°－Ｅである。堆積土は2層に分けられ、黄褐色のブロックを含み、人為堆積土であるが、ＳＫ3のような多量のブロック状を呈した、しまりのあるものとは異なる。出土遺物はない。

ＳＫ5

Ⅲ区の南東部の東壁際のⅣ層上面で検出した。東側は調査区外で全体は不明である。平面形は楕円形で、規模は長軸85cm以上、短軸20cmで深さは45cmである。方向はほぼ東西方向である。堆積土は2層で、1層はＳＤ3・4の堆積土に類似している。出土遺物はない。

ＳＫ6

調査区北東部のＶ層で検出したが、周辺は耕作深度が深いため、本来の検出面は、他と同様にⅣ層と考えられる。平面形は隅丸方形で、規模は長軸92m、短軸87m、深さ38cmで、方向はＮ－67°－Ｗである。堆積土の注記はないが、調査所見から人為堆積である。断面形は舟底形である。出土遺物はない。

ＳＫ7

調査区のほぼ中央、Ⅳ層で検出された。ＳＩ1より新しく、ＳＤ3より古い。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸124m、短軸100m、深さ105cmである。方向はＮ－30°－Ｅである。堆積土は4層に分けられ、ブロックを含む層、ブロックで構成される層からなり、人為堆積で、下半部は完全な地山土の堆積土である。断面形はほぼ方形で、壁は直立ないし、オーバーハング気味である。出土遺物はない。

第4節　Ⅳ・Ⅴ区

15・16Ｔで建物跡の存在が予想されたため、15Ｔの北半を拡張し、南北12m、東西9mの調査区を設定しⅣ区とした。また16Ｔの南半を拡張し、南北16m、東西16mの調査区を設定しⅤ区とした。検出した遺構は、掘立柱建物跡（ＳＢ）3棟、土坑（ＳＫ）2基、小溝状遺構群、ピットが検出された。

1　基本層序

Ⅳ・Ⅴ区および14～19Ｔは、基本的に同一の層序である。基本層序は大別して5層に分けられる。Ｉ層は現耕作土や盛土、旧耕作土である。盛土は地権者によれば、Ｓ51年宮城県教育委員会発掘時に生じた残土を利用したもので、旧耕作土はそれ以前のものである。

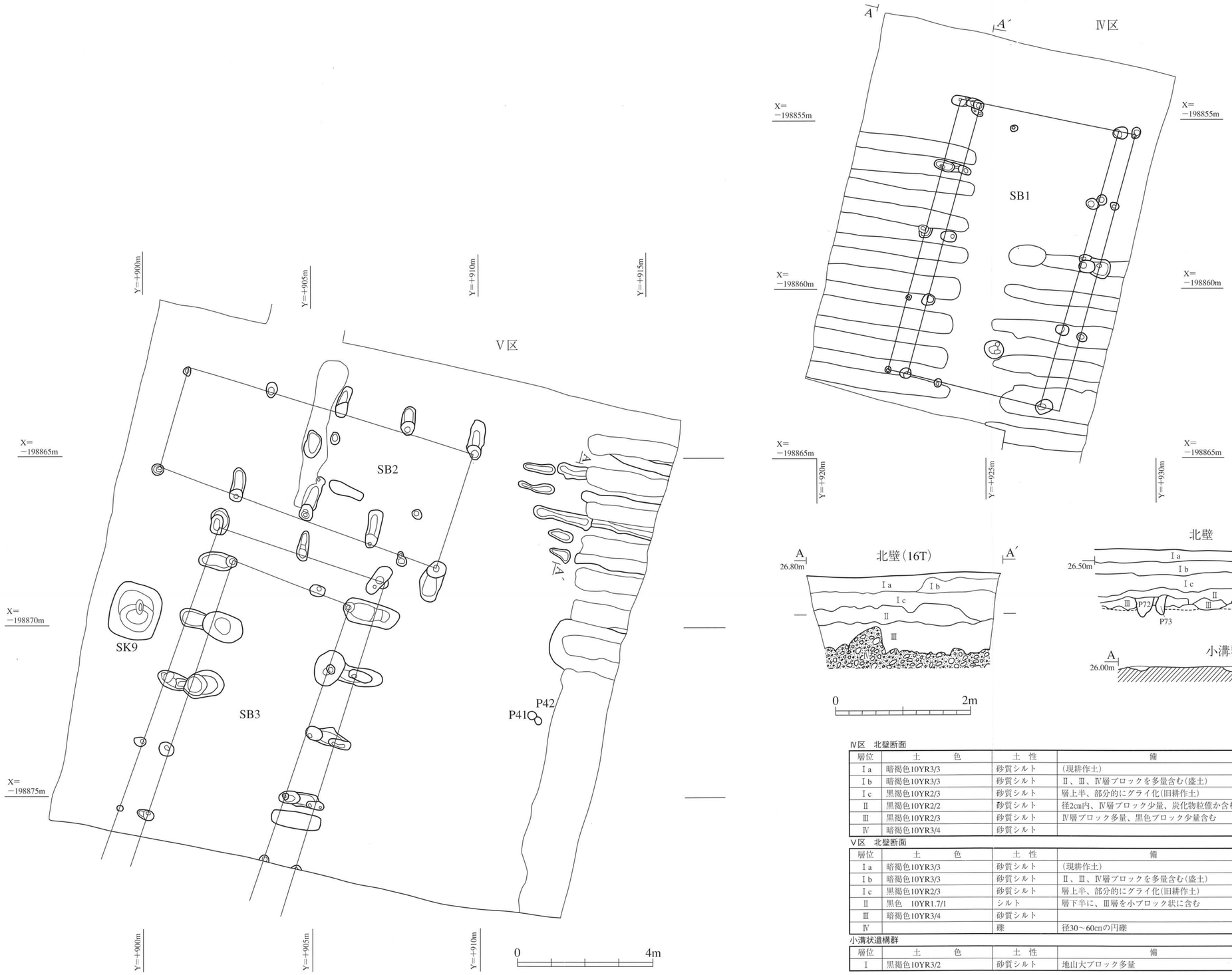
Ｉ層：ａ～ｃ層に細分される。Ｉａ層は現耕作土、Ｉｂ層はＳ51年度に発掘調査が行われた際の排土を盛土したもの（地権者による）、Ｉｃ層はそれ以前の旧耕作土である。

Ⅱ層：黒褐色砂質シルトである。14Ｔから17Ｔまで広く分布し、上面の標高は26～26.2mである。層厚は10～40cmで、17Ｔの北部に厚く堆積し、Ｖ区、17Ｔの西側が黒味を増している。遺物は出土していない。

Ⅲ層：黒褐色砂質シルト層である。Ⅳ層への漸移層である。層厚は10～20cmである。

Ⅳ層：暗褐色砂質シルト層である。遺構の検出面で、標高は25.8～25.5mで南へ緩く傾斜している。礫層の直上層で層厚は40～50cmである。

Ｖ層：礫層。Ｖ区の北壁では標高25.4mである。



Ⅳ区　北壁断面

層位	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	（現耕作土）
Ⅰb	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ層ブロックを多量含む（盛土）
Ⅰc	黒褐色10YR2/3	砂質シルト	層上半、部分的にグライ化（旧耕作土）
Ⅱ	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	径2cm内、Ⅳ層ブロック少量、炭化物粒僅か含む
Ⅲ	黒褐色10YR2/3	砂質シルト	Ⅳ層ブロック多量、黒色ブロック少量含む
Ⅳ	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	

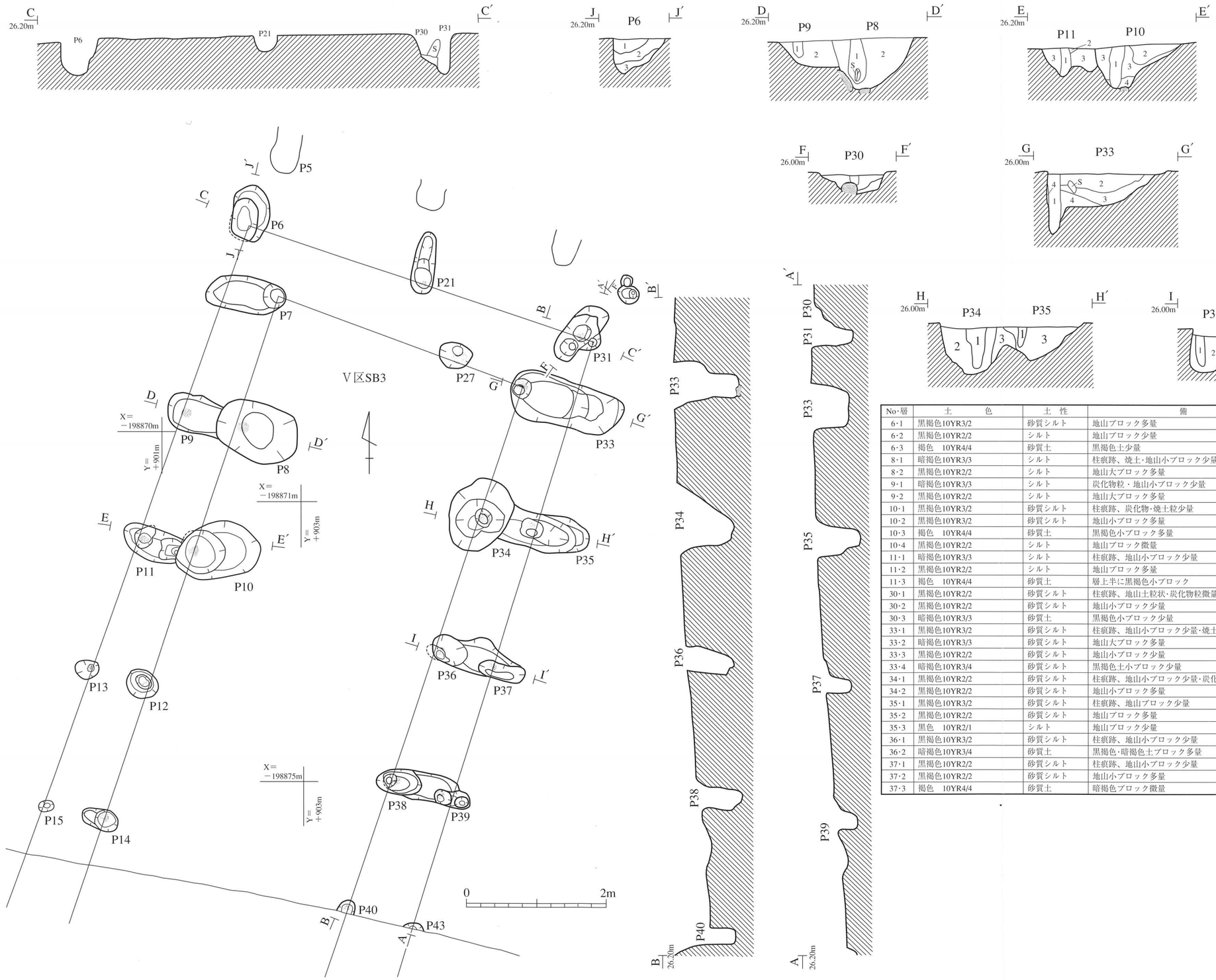
Ⅴ区　北壁断面

層位	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	（現耕作土）
Ⅰb	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ層ブロックを多量含む（盛土）
Ⅰc	黒褐色10YR2/3	砂質シルト	層上半、部分的にグライ化（旧耕作土）
Ⅱ	黒色　10YR1.7/1	シルト	層下半に、Ⅲ層を小ブロック状に含む
Ⅲ	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	
Ⅳ		礫	径30～60cmの円礫

小溝状遺構群

層位	土　色	土　性	備　考
Ⅰ	黒褐色10YR3/2	砂質シルト	地山大ブロック多量

第28図　Ⅳ・Ⅴ区遺構配置図・基本層序



No・層	土　色	土　性	備　考
6・1	黒褐色10YR3/2	砂質シルト	地山ブロック多量
6・2	黒褐色10YR2/2	シルト	地山ブロック少量
6・3	褐色　10YR4/4	砂質土	黒褐色土少量
8・1	暗褐色10YR3/3	シルト	柱痕跡、焼土・地山小ブロック少量
8・2	黒褐色10YR2/2	シルト	地山大ブロック多量
9・1	暗褐色10YR3/3	シルト	炭化物粒・地山小ブロック少量
9・2	黒褐色10YR2/2	シルト	地山大ブロック多量
10・1	黒褐色10YR3/2	砂質シルト	柱痕跡、炭化物・焼土粒少量
10・2	黒褐色10YR3/2	砂質シルト	地山小ブロック多量
10・3	褐色　10YR4/4	砂質土	黒褐色小ブロック多量
10・4	黒褐色10YR2/2	シルト	地山ブロック微量
11・1	暗褐色10YR3/3	シルト	柱痕跡、地山小ブロック少量
11・2	黒褐色10YR2/2	シルト	地山ブロック多量
11・3	褐色　10YR4/4	砂質土	層上半に黒褐色小ブロック
30・1	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	柱痕跡、地山土粒状・炭化物粒微量
30・2	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック少量
30・3	暗褐色10YR3/3	砂質土	黒褐色小ブロック少量
33・1	黒褐色10YR3/2	砂質シルト	柱痕跡、地山小ブロック少量・焼土粒微量
33・2	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	地山大ブロック多量
33・3	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック少量
33・4	暗褐色10YR3/4	砂質シルト	黒褐色土小ブロック少量
34・1	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	柱痕跡、地山小ブロック少量・炭化物粒微量
34・2	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック多量
35・1	黒褐色10YR3/2	砂質シルト	柱痕跡、地山ブロック少量
35・2	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山ブロック多量
35・3	黒色　10YR2/1	シルト	地山ブロック少量
36・1	黒褐色10YR3/2	砂質シルト	柱痕跡、地山小ブロック少量
36・2	暗褐色10YR3/4	砂質土	黒褐色・暗褐色土ブロック多量
37・1	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	柱痕跡、地山小ブロック少量
37・2	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック多量
37・3	褐色　10YR4/4	砂質土	暗褐色ブロック微量

第29図　SB3平面・断面図

S51年調査の層序との対応であるが、前回確認された弥生時代の包含層は確認されず、対応可能であったのは、今回のⅡ層が前回の4層、Ⅲ層が5層、Ⅳ層が6層に相当するという関係である。

前回の調査で包含層の供給集落が周囲の微高地に求められた。今回の調査地点は標高mで、包含層よりも高い地点であるが弥生時代の遺構は検出されていない。集落等については今後の課題となろう。

2　遺構

ＳＢ1

母屋は桁行4間、梁行1間で、東西に廂が付く南北棟である。方向はＮ－15°－Ｅでやや東に振れている。建物総長は桁行8.44m、梁行5.25mである。柱間寸法は母屋が桁行195～235cm、梁行405～425cm、廂が178～225cmで、母屋と廂の間は約60cmである。柱穴は母屋と廂とが同じ掘り方となるものとならないものとがあるが、後者は検出レベルが低いことなどから、本来は前者の掘り方と考えられる。掘り方の規模は、長軸95～110cm、短軸30～50cmの長楕円形、隅丸方形で、さらに母屋の柱穴として45×30cmほど、深さ40～60cm（平均46cm）の楕円形の柱穴、廂部分は35×25cmほど、深さ5～35cm（平均18cm）の柱穴となる。柱痕跡は、母屋が10～16cm（平均13cm）、廂が7～12cm（平均10cm）となり、廂の掘り方、柱痕跡ともに小規模である。

ＳＢ2

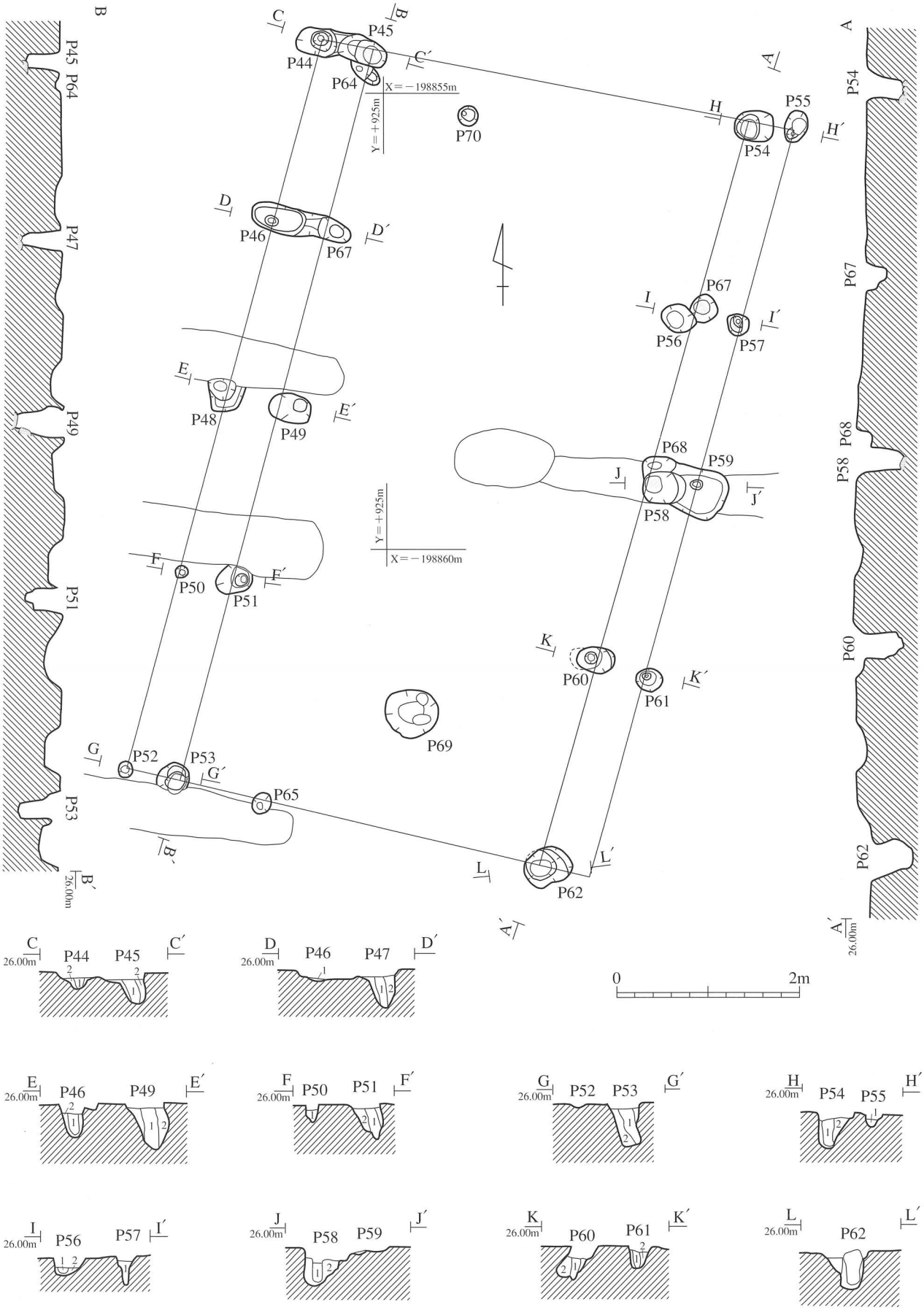
桁行4間、梁行1間の東西棟である。方向はＥ－20°－Ｓでやや南に振れている。中央に南北3間の間仕切り、東西2間の間仕切りがある。建物総長は桁行8.83m、梁行3.5mで、柱間寸法は205～255cmである。柱穴は長軸が125～83cm、短軸が64～42cmの長楕円形と、40～25cmほどの円・楕円形とがある。前者は10～20cmの掘り方のどちらか一端をさらに柱穴部分として深さ50～75cmほどに掘り下げている。北側にはこの掘り方が外側に張り出す形で並ぶが、ＳＢ1のように廂になるかどうかは不明である。柱痕跡は7～18cmである。

ＳＢ3

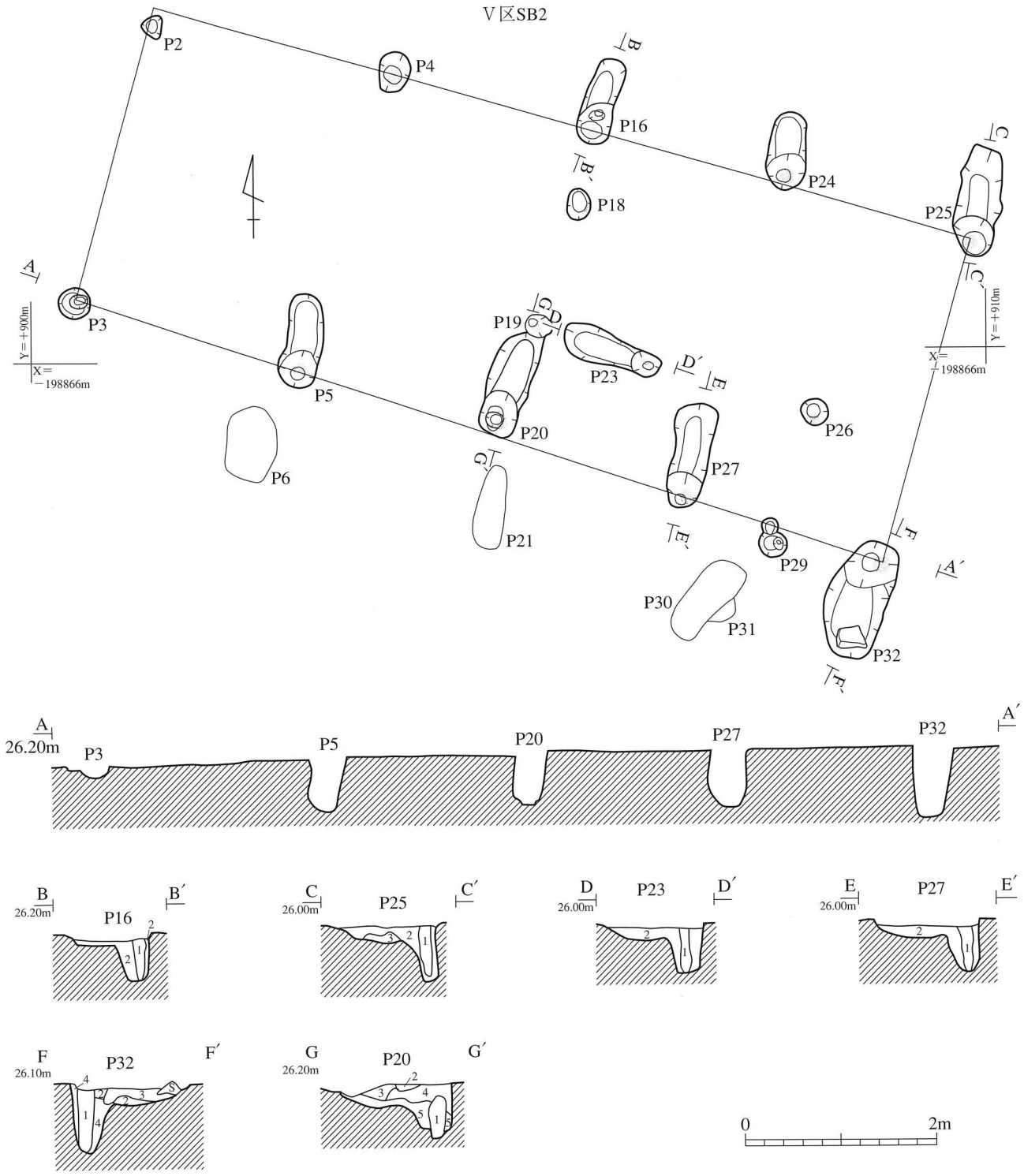
母屋が桁行4間以上、梁行2間で、東、北、西に廂が付く南北棟である。方向はＮ－19°－Ｅで東に振れている。建物総長は桁行8.77m、梁行5.15mで、柱間寸法は、母屋の桁行189～205cm、梁行が270・100cm、廂の桁行が190～207cm、梁行が255～265 cm、母屋と廂の間が70～100 cmである。柱痕跡は母屋が10～20 cm（平均16.2cm）、廂が10～14cm（平均12.6cm）である。柱穴はＰ8・10・34のように長軸120cm、短軸80cmとやや規模の大きい楕円形となるも

Ⅳ区ピット一覧

No·層	土　色	土　性	備　考	No·層	土　色	土　性	備　考
44・1	黒褐色10YR2/2	シルト	柱痕跡、地山粒微量	58・1	黒褐色10YR2/2	シルト	柱痕跡、地山小ブロック多量
2	黒褐色10YR2/2	シルト	地山小ブロック多量	2	黒褐色10YR2/2	シルト	地山小ブロック少量
45・1	黒　色10YR2/1	シルト	柱痕跡、地山粒微量	59・1	黒褐色10YR2/3	砂質シルト	地山ブロック多量
2	黒褐色10YR2/2	シルト	地山ブロック微量	60・1	黒褐色10YR3/1	シルト	柱痕跡、地山ブロック少量
46・1	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山ブロック少量	2	黒褐色10YR2/2	シルト	地山ブロック少量
47・1	黒褐色10YR2/2	シルト	柱痕跡	61・1	黒褐色10YR2/2	シルト	柱痕跡、地山小ブロック少量
2	黒　色10YR2/1	砂質シルト	地山小ブロック少量	2	黒　色10YR2/1	シルト	地山粒少量
48・1	黒褐色10YR2/2	シルト	柱痕跡、地山小ブロック微量	62・1	黒褐色10YR2/3	シルト	柱痕跡、地山小ブロック少量
2	黒褐色10YR2/2	シルト	地山小ブロック微量	2	黒褐色10YR2/2	シルト	地山小ブロック多量
49・1	黒褐色10YR2/3	シルト	柱痕跡、地山小粒微量	64・1	黒褐色10YR2/2	シルト	地山ブロック多量
2	黒　色10YR2/1	砂質シルト	地山小ブロック少量	65・1	褐　色10YR4/4	シルト	黒褐色土ブロック上半部に少量
50・1	黒褐色10YR2/3	砂質シルト	地山小ブロック少量	66・1	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック少量
51・1	黒褐色10YR2/2	シルト	柱痕跡、地山小ブロック少量	67・1	黒　色10YR2/1	シルト	柱痕跡
52・1			注記なし	2	黒褐色10YR2/3	シルト	地山ブロック多量
53・1	黒褐色10YR2/3	シルト	柱痕跡	68・1	黒褐色10YR2/3	砂質シルト	地山ブロック多量
2	黒褐色10YR2/2	シルト	地山粒少量	69・1	黒　色10YR2/1	砂質シルト	鈍い黄褐色土少量
54・1	黒褐色10YR2/2	粘性シルト	柱痕跡、地山小ブロック微量	2	鈍い黄褐色10YR4/3	シルト	壁との間に酸化鉄層挟む
2	黒　色10YR2/1	シルト	地山ブロック多量	70・1	黒褐色10YR2/3	シルト	地山粒少量
55・1	黒褐色10YR2/2	シルト	地山大ブロック含む	71・1	黒褐色10YR2/2	シルト	地山小ブロック多量
56・1	黒褐色10YR2/2	シルト	柱痕跡、地山粒少量	72・1	黒褐色10YR2/2	シルト	地山小ブロック少量
2	黒褐色10YR2/2	シルト	地山大ブロック少量	2	褐　色10YR4/4	砂質シルト	黒褐色土ブロック少量
57・1	黒褐色10YR2/2	シルト	地山小ブロック微量	73・1	黒褐色10YR2/2	シルト	地山小ブロック多量



第30図　SB1平面・断面図



No・層	土　色	土　性	備　　考	No・層	土　色	土　性	備　　考
16・1	暗褐色10YR3/3	シルト	柱痕跡、地山小ブロック微量	25・1	黒褐色10YR2/2	シルト	柱痕跡、地山小ブロック、炭化物粒少量
16・2	黒褐色10YR2/2	シルト	地山小ブロック微量	25・2	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック多量
20・1	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	柱痕跡、地山小ブロック微量	25・3	暗褐色10YR3/4	砂質土	黒褐色土ブロック少量
20・2	鈍い黄褐色10YR4/3	砂質土	地山小ブロック少量	27・1	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	柱痕跡
20・3	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック少量	27・2	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山ブロック多量
20・4	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	地山小ブロック多量	32・1	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	柱痕跡、地山小ブロック少量
20・5	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック少量	32・2	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック多量
23・1	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	柱痕跡、地山小ブロック少量	32・3	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック少量
23・2	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック多量	32・4	黒褐色10YR2/2	砂質シルト	地山小ブロック多量

第31図　SB2平面・断面図

の、P7、P33、P36・37、P38、P39のように長軸140cm、短軸50cm前後のもの、P12～15のように、別個のものがある。別個のものはＳＢ1と同様に検出レベルが低くなったため、本来は長楕円形の掘り方と考えられる。また、P8、P10、P34などは長楕円形の掘り方を切っていることから、建物構築時に掘り直したか、建て替えの可能性が考えられる。P12より、土師質土器と磁器片が出土している。土師質土器は焼成後に底部に穿孔したもので磁器は肥前産の菊花文の染付皿でともに近世のものである。

ＳＫ8

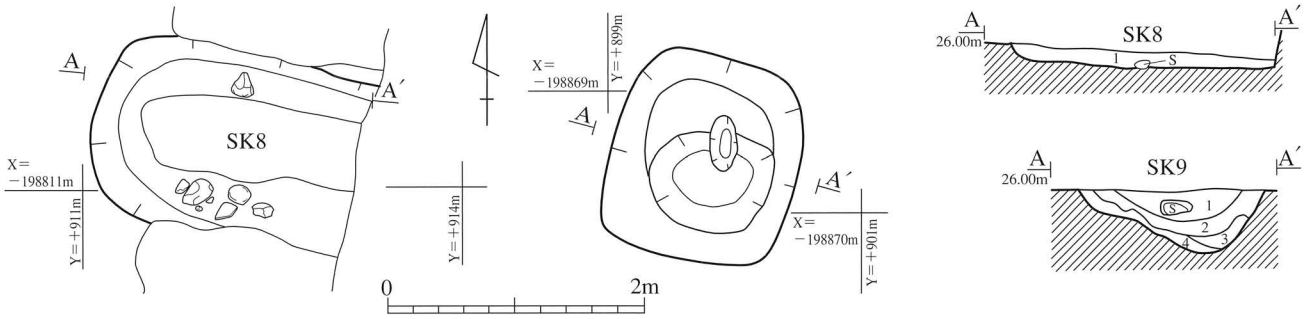
Ｖ区の東壁際中央に位置する。東側は調査区外となり、全体形は不明だが、楕円形と推定される。現耕作の天地返しにより上部が削平されている。長軸210cm以上、短軸150cm、底面長軸170cm以上、短軸65cm、深さ20cmで、方向はＥ－16°－Ｓである。堆積土は１層で出土遺物はないが、底面で15～20cm大の礫が５点出土している。

ＳＫ9

ＳＢ3の西側に位置する。平面形は隅丸方形で、底面は南が一段低くなり、段差部分に45×20 cmのピットがある。規模は長軸164cm、短軸147cm、深さ50cmで、方向はＮ－17°－Ｅである。堆積土は4層に分けられるが、2層は人為堆積の可能性がある。出土遺物はない。

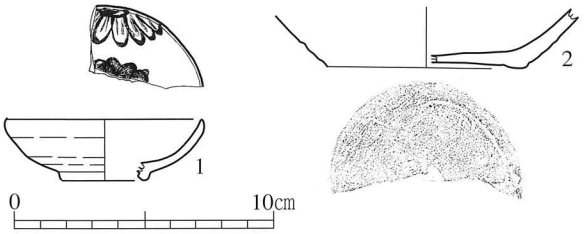
小溝状遺構群

Ｖ区の北東部に位置する。4.5×3.5 mの範囲に6条検出した。幅20～40 cm、深さ３～10cm、長さ2～3.5mである。現在の天地返しにより、撹乱されているが、堆積土は地山のブロックを多量に含む層である。出土遺物はない。



構造・層位	土　　色	土　性	備　　考
SK8・1	黒褐色10YR2/2	シルト	地山小ブロック少量含む
SK9・1	黒褐色10YR3/2	砂質シルト	炭化物粒僅か、地山土粒少量含む
SK9・2	黒褐色10YR2/2	シルト	炭化物、焼土粒僅か、径1cm内地山ブロック多量含む
SK9・3	鈍い黄褐色10YR4/3	砂質土	一部層状となる
SK9・4	褐色　10YR4/4	シルト	黒褐色土粒状に少量含む

第32図　SK8・9平面・断面図



番号	種　類	遺構・層位	特　　徴
1	磁器　染付皿	SB－3　P12	肥前　菊花文　近世
2	土師質土器皿	SB－3　P12	焼成後底部穿孔　近世

残　存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	写真図版	登録番号
口～底1/4	7.6	3.4	2.4	17－5ab	J－1
底1/2		7.6		17－4ab	D－1

第33図　Ｖ区出土遺物

第５節　Ⅵ区

20Ｔで焼け礫集中部を検出したため、その箇所を中心に西側に3×4mの、東側に5×4mの拡張区を設定しⅥ区とした。他に水田跡も検出している。

1　基本層序

確認された層は、大別して6層、細別で10層である。

Ⅰ層：ａ・ｂ層に細分される。Ⅰａ層は現水田耕作土、Ⅰｂ層は耕地整理以前の水田耕作土である。

Ⅱ層：ａ・ｂ層に細分される。Ⅱａ層は黒褐色粘土質シルトで、調査区中央に分布するが、下部に酸化鉄の集積がみられることや、下位で擬似畦畔が検出されたことなどから、水田耕作土と考えられた。Ⅱｂ層は暗褐色シルトで、円礫を多く含む層で主に南半に分布し、Ⅱａ層水田の擬似畦畔を形成している。

Ⅲ層：ａ・ｂ層に細分される。Ⅲａは黒色粘土、Ⅲｂ層は黒褐色シルトで、共に調査区中央にのみ分布し、Ⅵ層が形成する浅い凹地に自然堆積した層である。

Ⅳ層：ａ・ｂ層に細分される。Ⅳａ層は北半にのみ分布する黒褐色シルトとⅣｂ層起源の暗褐色砂質シルトのブロックの混合した層で、人為堆積と考えられる。Ⅳｂ層は暗褐色砂質シルトで、ほぼ全体に分布し、円礫を多く含む層であるが、特に北半部で焼けた礫層を集中的に含む箇所がある。

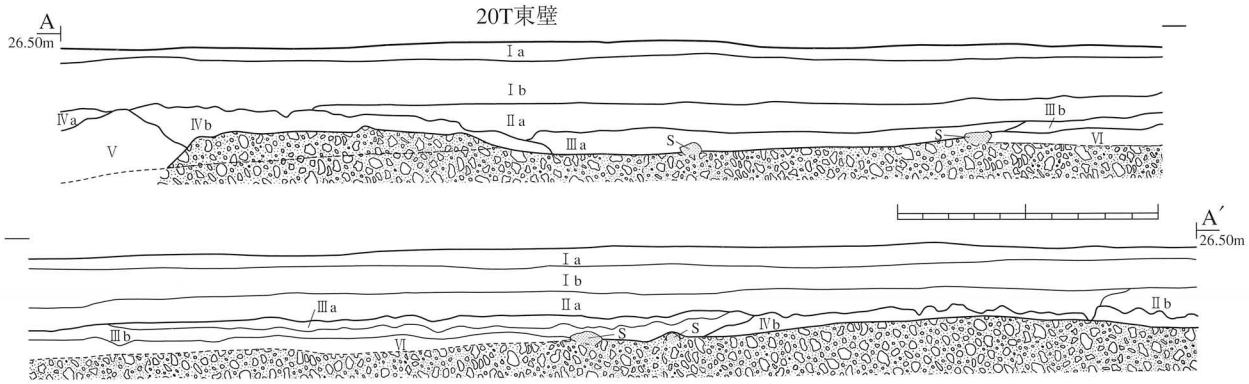
Ⅴ層：黒褐色粘性シルト。北部のみにみられ、Ⅵ層の礫層が落ち込む箇所の堆積土になっている。

Ⅵ層：礫層。その標高は25～26mで、上面は凹凸がある。北端付近では前述したように、礫層が北に向かって急激に落ち込んでいる。トレンチ北端部から、北に約10mで高さ4～5mの段丘崖があり、その上に中町段丘面が広がっている。礫層の落ち込みは段丘崖沿いの埋没した河川の流路跡の可能性が考えられる。

2　遺構

Ⅱａ層水田跡

南半で擬似畦畔1条、中央で段差1条を検出した。擬似畦畔は、礫を多く含むⅡｂ層、Ⅳｂ層の盛り上がりとして



層位	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰa	暗褐色10YR3/3	シルト	現水田作土
Ⅰb	黒褐色10YR3/2	粘性シルト	旧水田耕作土
Ⅱa	黒褐色10YR2/3	粘性シルト	下半に酸化鉄集積、水田作土
Ⅱb	暗褐色10YR3/3	シルト	径10cm内の円礫多量
Ⅲa	黒褐色10YR1.7/1	粘土	径5mm内の砂礫粒少量
Ⅲb	黒褐色10YR3/2	シルト'	酸化物粒少量
Ⅳa	黒褐色10YR3/2 暗褐色10YR3/3	シルト 砂質シルト	ブロック混合層、人為的な堆積
Ⅳb	暗褐色10YR3/3	砂質シルト	マンガン斑多量、円礫及び焼け礫多量
Ⅴ	黒褐色10YR2/3	粘性シルト	マンガン斑多量、径5mm内の砂礫粒少量
Ⅵ		砂礫	径30cm内の円礫多量

第34図　Ⅵ区基本層序

第35図Ⅵ区遺構平面図

検出され、長さ約8m、幅50～60m、高低差6～10㎝で、方向はN－23°－Eである。段差はⅣb層と礫層のⅣ層で、長さ7m、高低差5～17㎝、方向N－28°－Eである。擬似畦畔や段差をⅡa層が覆っていること、Ⅱa層には酸化鉄集積がみられること、Ⅲa・b層が自然堆積層であることなどから、Ⅱa層が水田耕作土で、上記の遺構がそれに伴う擬似畦畔と段差と判断された。Ⅱa層からは土師器の細片が出土している。水田の時期は古代以降と考えられる。

焼け礫集中部

礫層上面は標高25～26mで、やや凹凸がみられるが、全体としては南東へ傾斜している。Ⅱa層水田の段差部分の北側に沿って、北東方向に礫層が盛り上がる箇所があり、そこに焼けた礫が集中する所がある。その範囲は1×3mである。焼けた面は一定しているわけではなく、下面が焼けた礫、焼けて割れた礫、割れた後焼けた礫など様々であることから、動いている可能性が考えられる。出土遺物はないが、東側の拡張区の礫上面でロクロ使用の内黒の甕の破片が出土していることから、古代以降の時期が考えられる。

第4章　自然科学分析

株式会社　古環境研究所

第1節　船渡前遺跡における屈折率測定

1　はじめに

仙台市とその周辺に分布する完新世に形成された土層中には、十和田火山や肘折火山さらに榛名火山などから噴出したテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、テフラ層が認められた船渡前遺跡においても、採取された試料を対象として屈折率測定を行い示標テフラとの同定を試みた。

2　屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

発掘調査担当者により採取されたⅢ区SI-1の4層（試料番号6）およびⅡA区SR-1の3層（試料番号7）の2点について、屈折率測定を行って示標テフラとの同定を試みた。測定は、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表1に示す。Ⅲ区SI-1の4層（試料番号6）には、無色透明の軽石型ガラスが多く含まれている。火山ガラス（n）の屈折率は、1.502-1.506である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石さらに角閃石がごく少量含まれている。またⅡA区SR-1の3層（試料番号7）には、無色透明の軽石型ガラスが多く含まれている。火山ガラス（n）の屈折率は、1.502-1.506である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石がごく少量含まれている。

3　考察ーテフラ粒子の起源について

屈折率測定の結果、Ⅲ区SI－1の4層（試料番号6）とⅡA区SR－1の3層（試料番号7）に含まれるテフラ粒子間

には、ほぼ同じ特徴が認められた。したがって、これらに含まれるテフラ粒子は、共通したテフラに由来すると考えられる。分析測定者が現地において土層の観察などの機会を得ることができなかったために、詳細に言及することは困難であるが、これらのテフラ粒子は、既知のテフラに由来するとすれば、その特徴から、915年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田ａ火山灰（町田ほか，1981）に由来する可能性がもっとも高いと考えられる。

4．小結

仙台市船渡前遺跡において採取されたテフラ試料を対象に屈折率測定を行った。その結果、十和田ａ火山灰（To-a，915年）に由来する可能性の高いテフラ粒子が検出された。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法，2，研究対象別分析法」，p.138-149.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562-569.

表１　船渡前遺跡における屈折率測定結果

地点	土層	試料	火山ガラス				重鉱物
			量	形態	色調	屈折率（n）	
Ⅲ区SI-1	4層	6	+++	pm	cl	1.502-1.506	(opx,cpx,ho)
ⅡＡ区SR-1	3層	7	+++	pm	cl	1.502-1.506	(opx,cpx)

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない．pm：軽石型．cl：無色透明．opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石．重鉱物の（）は量の少ないことを示す．屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972, 1993）による．

第２節　船渡前遺跡における放射性炭素年代測定

１試料と方法

No.	試料	試料の種類	前処理・調製	測定法
1	ⅡB区SE-1 埋土	木材	酸／アルカリ／酸洗浄 ベンゼン処理	β-線計数法 （液体シンチレーション法）
2	ⅡA区SR-1 20層	木材	酸／アルカリ／酸洗浄 ベンゼン処理	β-線計数法 （液体シンチレーション法）
3	ⅡA区SR-1 最下層	植物遺体	酸／アルカリ／酸洗浄 石墨調製	ＡＭＳ法 （加速器質量分析法）
4	ⅡA区SD-1 6a層	堆積物	酸洗浄 石墨調製	ＡＭＳ法 （加速器質量分析法）
5	ⅡA区SR-1 1層	堆積物	酸洗浄 石墨調製	ＡＭＳ法 （加速器質量分析法）

1 測定結果

試料名	14C年代 (年BP)	δ13C (‰)	補正14C年代 (年BP)	暦　年　代	測定No. Beta-
No.1	1550±60	−26.6	1520±60	交点 AD 560 2σ AD 420 TO 650 1σ AD 465 TO 475,AD 515 TO 620	126782
No.2	1510±60	−25.4	1510±60	交点 AD 575 2σ AD 425 TO 655 1σ AD 530 TO 630	126783
No.3	1620±60	−24.8	1620±60	交点 AD 430 2σ AD 330 TO 590 1σ AD 395 TO 535	126784
No.4	1440±60	−23.5	1460±40	交点 AD 620 2σ AD 550 TO 660 1σ AD 590 TO 645	126785
No.5	2180±60	−21.6	2240±40	交点 BC 360,280,250 2σ BC 390 TO 185 1σ BC 375 TO 330,BC 330 TO 205	126786

（2σ：95% probability，1σ：68% probability）

1）14C年代測定値

試料の14C/12C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。14Cの半減期は5,568年を用いた。

2）δ13C測定値

試料の測定14C/12C比を補正するための炭素安定同位体比（13C/12C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正14C年代値

δ13C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動を補正することにより、暦年代（西暦）を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の14Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。

5）測定No.

測定は、Beta Analytic Inc.(Florida，U.S.A)において行われた。Beta-は同社の測定No.を意味する。

第５章　まとめ

１　遺物について

比較的まとまって出土した資料は、Ⅲ区のＳＩ１出土土器群のみといえるので、ここではその資料について述べることにする。

(1) ＳＩ１出土土器群

土師器ではロクロ使用の坏、ロクロ使用･不使用の甕、赤焼土器、須恵器が出土している。これらのうち図示できたものは、土師器坏10点、高台付坏１点、甕13点、赤焼土器坏１点、須恵器甕２点（第22～24図）である。なお、口縁部破片資料を含めた個体数は、土師器坏61点、同甕37点、赤焼土器坏３点、須恵器甕３点である。

土師器

坏　外面はロクロナデ、内面はヘラミガキ後黒色処理が施されている。底部の切り離しは回転糸切りで、切り離し後の再調整は図示できなかった底部片（６点）も含めて認められない。器形は体部が直線的に外傾し口縁部に至るもの（第22図１・２）、体部がやや丸みをもって外傾しそのまま口縁部に至るもの（５～７）、体部がやや丸みをもって外傾し口縁部が外反するもの（８～12）などがある。口径は13.4～16.2cmであるが、13.8～14.5cmに集中する。法量すべてがわかるものは２点のみで底径／口径は0.43、0.4である。

甕　ロクロ不使用（25・26）と使用（13～23）のものがある。

ロクロ不使用は口径が20cm以上の大形のものである。体部はやや膨らむ長胴径で、頸部は「く」字状に外反する。外面にはヘラナデ後ナデ、内面にはヘラナデが施されている。25の底部にはムシロ状圧痕がある。

ロクロ使用のものは口径により大小に分けられる。口径が15cm前後の小形品は７点（13～19）で、口径20cm以上の大形品は４点（20～23）である。両者とも体部は長胴形であるが、丸みの強いものもある。頸部は「く」字状に屈曲するが、さらに口縁端部が直立あるいは上方につまみ出されているものがある。内外面はロクロナデであるが、外面体部下半にヘラケズリ、内面にヘラナデ、回転ヘラナデ、ヘラミガキが施されるものがある。底部は回転糸切りのものと切り離し技法不明で手持ちヘラケズリ、ヘラナデのものとがある。

高台付坏　高台部は接合面で剥離している（４）。坏部はほぼ直線的に大きく開き、口縁部が外反気味になる。外面はロクロナデ、内面はヘラミガキ後黒色処理されている。底部の切り離しは回転糸切りで、高台貼り付け後ナデが施されている。なお、図示不可能な破片に両面ヘラミガキの口縁部片１点があり、高台付坏と考えられる。

赤焼土器

坏　内外面ともにロクロナデで底部は回転糸切り無調整である（３）。体部はほぼ直線的に外傾しそのまま口縁部に至る。底径／口径は0.42である。

須恵器

甕　23は口縁部で体部にヘラケズリが施されている。27は大形の甕の破片で外面に平行タタキ、内面にあて目痕がある。

以上、ＳＩ１土器群の特徴をまとめると、①土師器は甕に２点ロクロ不使用のものがあるだけで他はすべてロクロ使用である。②底部破片は観察可能な破片を含めても８点で資料数が少ないという制約があるが、切り離し後の再調整はない、③土師器坏は口径14cm前後の中形品に集中し、とくに小形品大形品はない、④土器の構成は土師器主体で赤焼土器、須恵器は非常に少ない、となる。

これらの特徴を持つ土器群は、東北南部の土師器編年では平安時代の表杉ノ入式に比定される。表杉ノ入式については、時期が新しくなるにつれ、口径に対する底径の割合が小さいものへ、底部切り離し後の再調整が減少し無

調整へと変化し、土器の構成として赤焼土器が増加する、などの傾向性で変遷することがこれまでの多くの調査成果により示されている（加藤：1982、丹羽：1983、田中：1984、佐々木：1984、菊池：1985、村田：1995）。

その変遷の中で再調整のない段階の土器群としては、仙台市安久東遺跡第２号住居跡出土土器（土岐山：1980）が挙げられる。しかし安久東２住では土師器坏の口径が13～13.8cmに集中しやや小形であること、赤焼土器が約４割近くあり、その中に口径11～13cmの小形品が一定量存在するなどの点で、ＳＩ１出土土器と相違がみられる。これら坏の法量の縮小化はより後出的な要素と考えられ（村田：1994）、ＳＩ１出土土器は安久東２住より古い段階と捉えられる。

安久東２住より古く、底部無調整が主体となる資料を名取川周辺に求めると、仙台市中田畑中遺跡第２次調査第２号住居（佐藤甲：1985）、同市元袋遺跡ＳＩ19住居跡（渡部：1987）、同市下ノ内遺跡第ＶＢ群土器（篠原：1990）、伊古田遺跡Ⅲｂ群土器（渡部：1995）、同市四郎丸館跡ＳＩ１住居跡（竹田：1995）などが挙げられる。

これらの土器群と比較した場合、底径／口径は資料数が少ないため対比が困難であるが、坏の法量を口径でみた場合中田畑中２住、元袋19住が約14～15cmに集中し、下ノ内ＶＢ群、伊古田Ⅲｂ群は12～13cm台のものが一定量あり縮小化傾向がみられ、本遺跡ＳＩ１は後者より前出的のようである。再調整の割合は中田畑中２住が約２割、元袋19住が約４割、下ノ内ＶＢ群では約１割、伊古田Ⅲｂ群では１点のみとなり、本遺跡ＳＩ１は後２者に近いといえる。また赤焼土器の割合は、中田畑中２住が１割、元袋19住、下ノ内ＶＢ群、伊古田Ⅲｂ群では約３割となり、中田畑中２住に近い。

前述の土器群は報文によればいずれも９世紀後半から10世紀前半の中に位置付けられている。また近年検討された古代宮城郡の10世紀前後の土器変遷（村田：1995）によれば、中田畑中２住、元袋19住は灰白色火山灰（後述）降下前後の土器群（第２群土器）に位置付けられている。

ＳＩ１には灰白色火山灰が堆積土の４層中に比較的大きなブロックで含まれている。１次的な堆積状況ではないが降下後の２次堆積にしろＳＩ１は灰白色火山灰降下前の遺構と考えられる。しかも堆積状況から降下後からあまり隔絶しない時期が想定される。灰白色火山灰の降下年代は現在907年～934年の間と考えられており（多賀城跡研：1998）、ＳＩ１の年代は10世紀前半でもより古い段階が考えられよう。

２　遺構について

（１）小崖・礫層・河川跡

小崖　１～４Ｔで確認された小崖（小規模な段丘崖状のもの）は、検出された標高や共通した堆積層などから連続したものと考えられ、その長さは約850m以上に及ぶ（第５図）。現在はこの小崖と河川敷との間に高速道路が存在するが、以前はこの小崖から河川敷へ連続していたと推測される。

小崖を覆うＶａ層の時期は、平坦部が離水し地表面が安定していたと考えられる。その時期については、Ⅲａ～Ｖｂ層にかけて出土する縄文時代前期後葉から中期の土器が層位的に混在していることから、遺物が二次堆積している可能性が考えられ年代決定資料とはならず、Ⅲａ層上面が平安時代の住居跡の検出面であることから、おおまかに平安時代以前と捉えておきたい。

礫層　１～５・13Ｔを設定した面と６～12Ｔを設定した面では、検出された最上位の礫層の標高が前者では20.8～22.3m、後者では23.5～25mと違いがみられ、特に５・13Ｔと６・７Ｔとの間では近接するにもかかわらず、２～2.5mの高低差がある（第５図）。これは大きな段丘面のなかにさらに小規模な段丘があるためと考えられ、段差部分は５・13Ｔと６・７Ｔとの間にあり、そこには前項で述べたような小崖が存在すると推測される。

ＳＲ１　ＳＲ１は５Ｔと13Ｔの北端部で確認されており、まさに前述した５・13Ｔと６・７Ｔとの間にある小崖に沿って形成された河川跡と考えられる。堆積土に何層かの洪水堆積物がみられることから、平坦部が離水してから

も凹地となり洪水のたびに土砂が堆積していたことがうかがえる。最下層の樹木および堅果類の年代が５～６世紀であり堆積土中位に10世紀前半の灰白色火山灰があることから、長期間開口していたと考えられる。

（２）住居跡

Ⅲ区ＳＩ１から北西約120mのＩ区内にＳ51年住居（昭和51年調査の住居跡）がある。ともに平安時代の所産であるが、Ｓ51年住居は９世紀後半に位置付けられており、ＳＩ１よりも古い。規模はＳＩ１が大きいが、カマドが東辺に付くことや長大な凝灰岩を天井石に用いることなどは共通している。いずれも近くに同時期の住居跡が確認されないことから、孤立した住居であったか、住居がかなり散在する集落が想定される。

（３）溝跡

Ⅱ区ＳＤ１は全長60m以上の大規模な溝跡である。下位にＳＲ１があり、まだ埋まりきらないＳＲ１を利用して造られた可能性が考えられる。時期については年代決定資料がなく、灰白色火山灰層を切っていることからおおまかに10世紀後半以降としか捉えられない。しかし、ＳＤ１はさらに西へ100mも伸びれば名取川に至り、そこはまさに近世に構築された木流堀の取水口付近であり、東へ伸びても木流堀に合流するような位置にあることから、木流堀に関連する近世の溝跡の可能性も考えられよう。

（４）掘立柱建物跡

Ⅴ区ＳＢ３の柱穴から出土した資料より近世の建物跡と考えられる。廂のある建物とないものとがあるが、ともに柱穴の掘り方が長楕円形になることが特徴的である。類似した掘り方をもつ建物跡は仙台市松木遺跡ＳＢ－１・２掘立柱建物跡（工藤：1986）にみられるがともに廂はなく、時期は15～16世紀に位置付けられている。

参考文献

加藤道男：1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会（稿了は1982）

菊地逸夫：1985『中峯遺跡』宮城県文化財報告書第108集

工藤哲司：1977「八幡西遺跡」『年報１』仙台市文化財調査報告書第23集

工藤哲司：1986『柳生』仙台市文化財調査報告書第95集

佐々木和博：1984『鹿島遺跡』宮城県文化財報告書第101集

佐藤昭典：1994『仙台・水の文化誌－続「もう一つの広瀬川」（前編）』

佐藤甲二：1985『中田畑中遺跡－第２次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第78集

篠原信彦：1990『下ノ内遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ－』仙台市文化財調査報告書第136集

多賀城跡研究所：1998「第68次調査」『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1997

竹田幸司：1995『四郎丸館跡』仙台市文化財調査報告書第200集

田中則和：1984『山口遺跡Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第61集

土岐山武：1980「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財報告書第72集

丹羽茂：1983「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財報告書第96集

宮城県教育委員会：1977『清太原遺跡・船渡前遺跡』宮城県文化財報告書第49集

村田晃一：1994「第Ⅴ章１．Ａ〔平安時代〕」『藤田新田遺跡』宮城県文化財報告書第163集

村田晃一：1995「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号　福島県考古学会

渡部弘美：1987『元袋Ⅲ遺跡－奈良・平安時代集落跡調査報告－』仙台市文化財調査報告書第103集

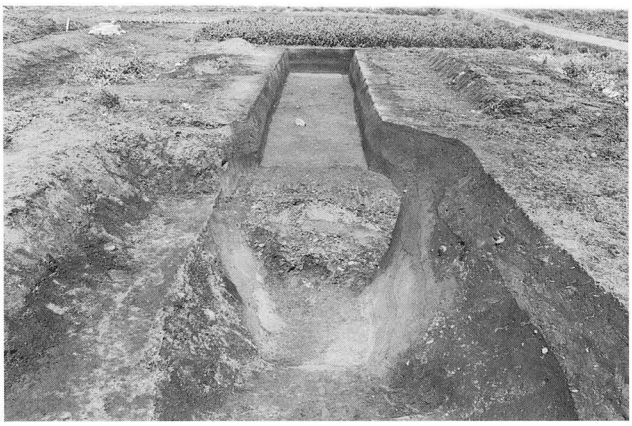
渡部紀：1995『伊古田遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ－』仙台市文化財調査報告書第193集

1．調査地東部遠景（北西より）

2．調査地東部近景（Ⅰ区以東、北西より）

3．調査地西部近景（Ⅴ区以西、東より）

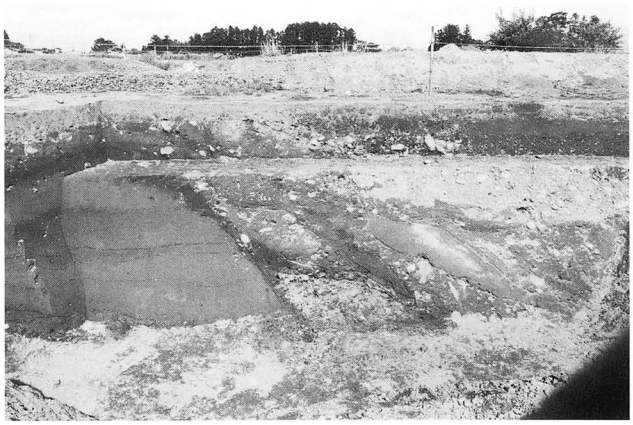
4．1T全景（南西より）



5．2T全景（南より）

6．2T東壁断面（西より）

7．3T全景（南より）



8．3T東壁断面（西より）

写真１

1．4T全景（南より）

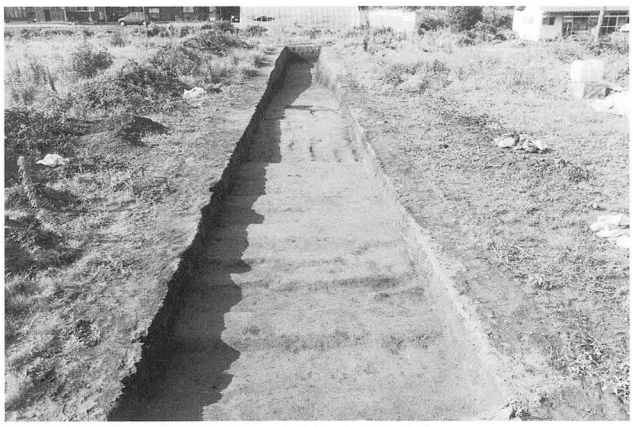
2．6T東壁断面（西より）

3．6T全景（南より）

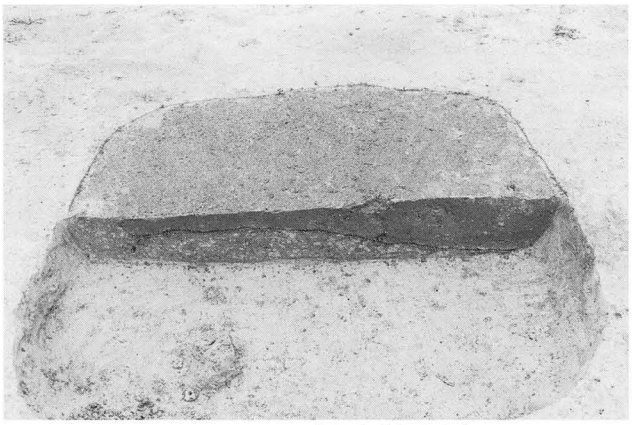
4．9T全景（西より）

5．12T　SD6（南より）

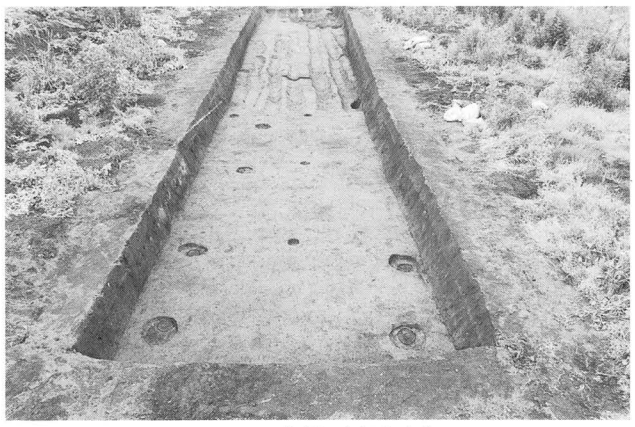
6．14T　SD7（東より）



7．17T全景（南より）



8．17T　SK12断面（南より）



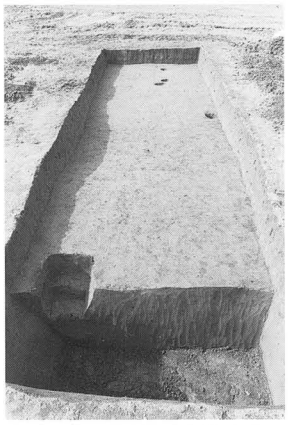
9．18T全景（南より）

写真２

1．19T　SD5（西より）

2．22T西壁断面（東より）

3．22T全景（東より）

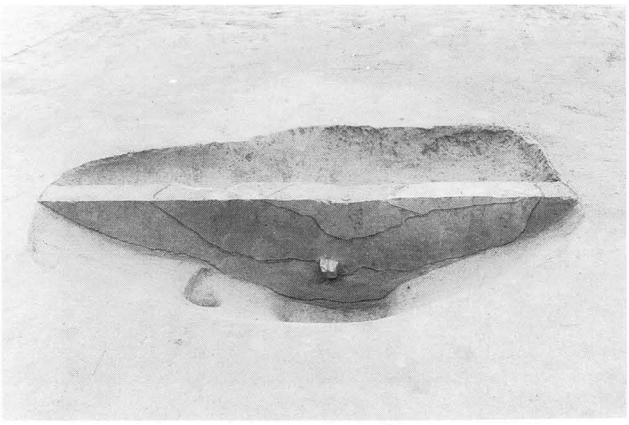


4．26T全景（南より）

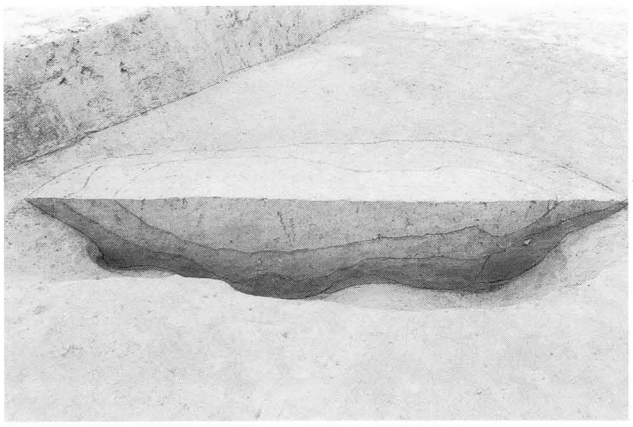
5．23T全景（東より）

6．24T自然流路（北東より）

7．Ⅰ区全景（西より）



8．Ⅰ区SK11断面（南より）



9．Ⅰ区SK10断面（西より）

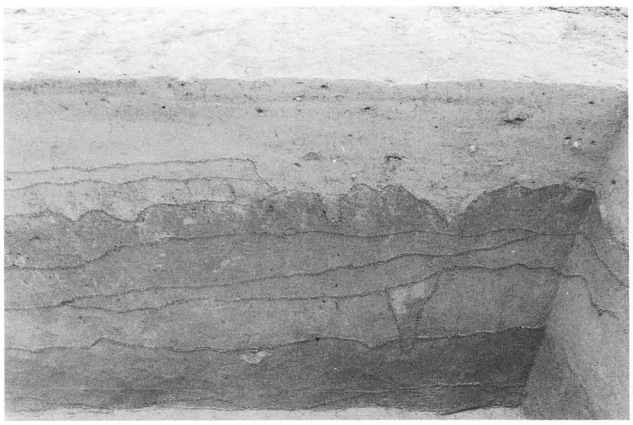
写真３

1. ⅡA区SD1完掘（東より）

2. ⅡB区SD1完掘（東より）

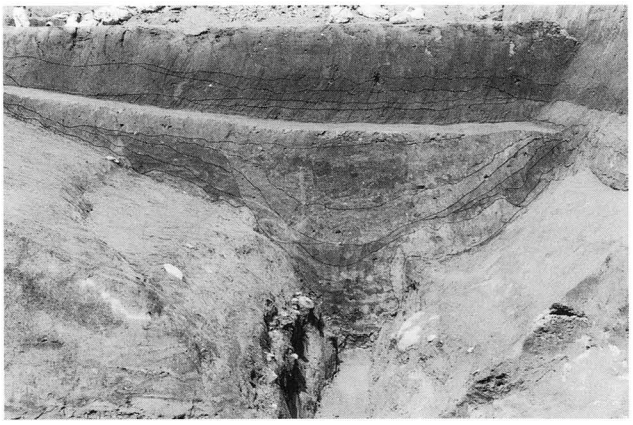
写真 4

1. Ⅱ区東壁断面①（西より）

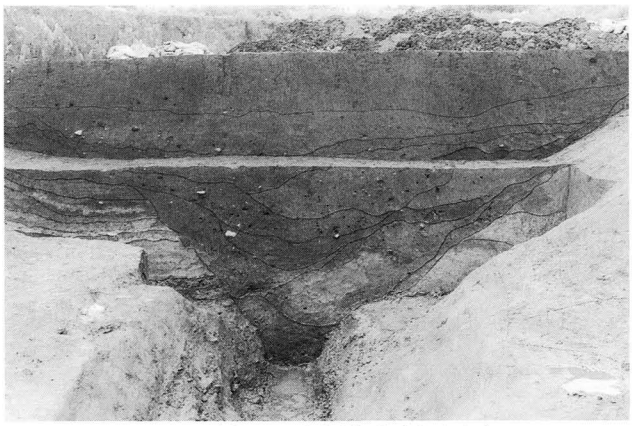


2. Ⅱ区東壁断面②（西より）

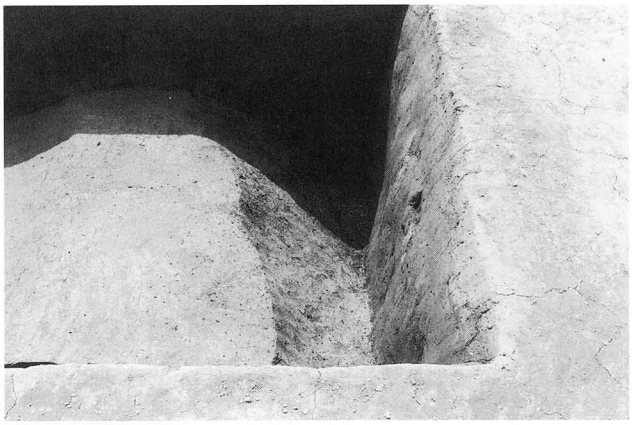
3. Ⅱ区遺構検出状況（東より）



4. ⅡA区SD1西壁断面（東より）



5. ⅡB区SD1西壁断面（東より）



6. 4T　SD1（東より）

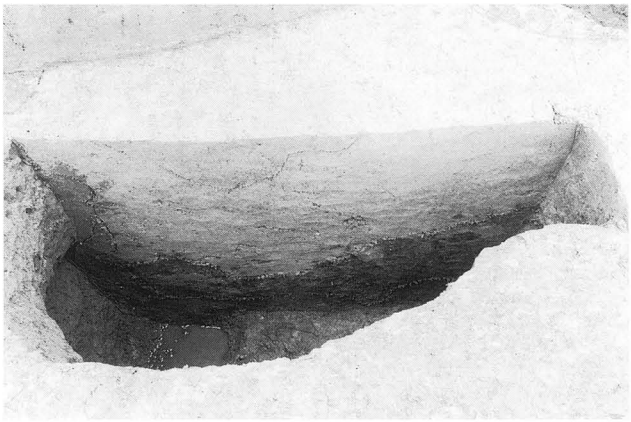
7. Ⅱ区SD2検出状況（西より）

8. Ⅱ区SD2断面（東より）

写真５

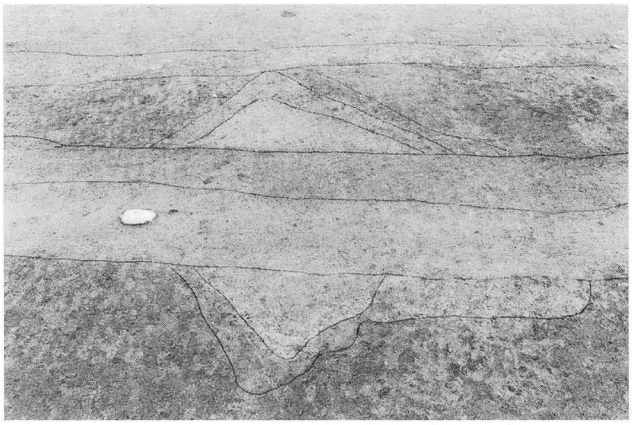
1. ⅡA区SR1断面（西より）

2. ⅡB区DSE1完堀（南より）

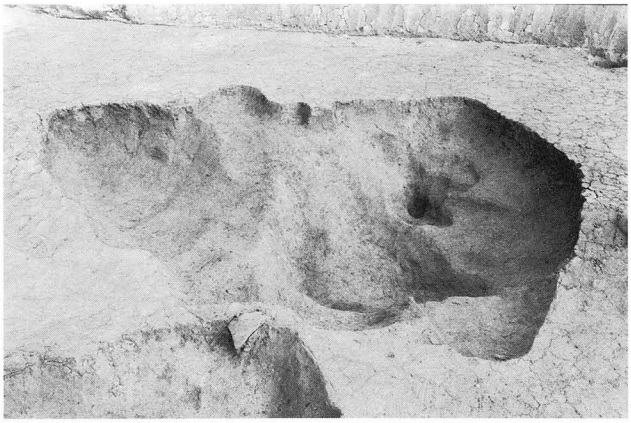


3. ⅡB区SX1断面（北東より）

4. ⅡB区SX1完堀（南より）

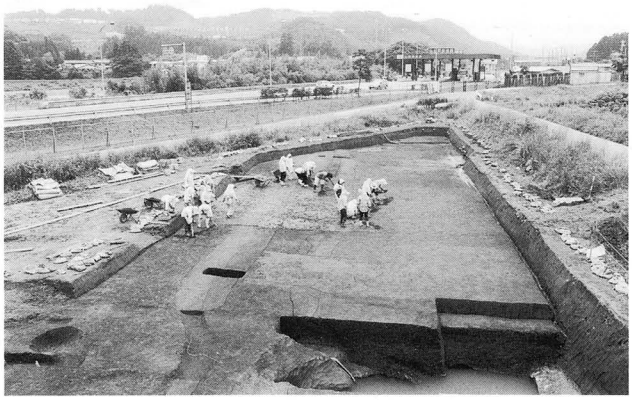


5. Ⅱ区SX2・3・4検出状況（南より）



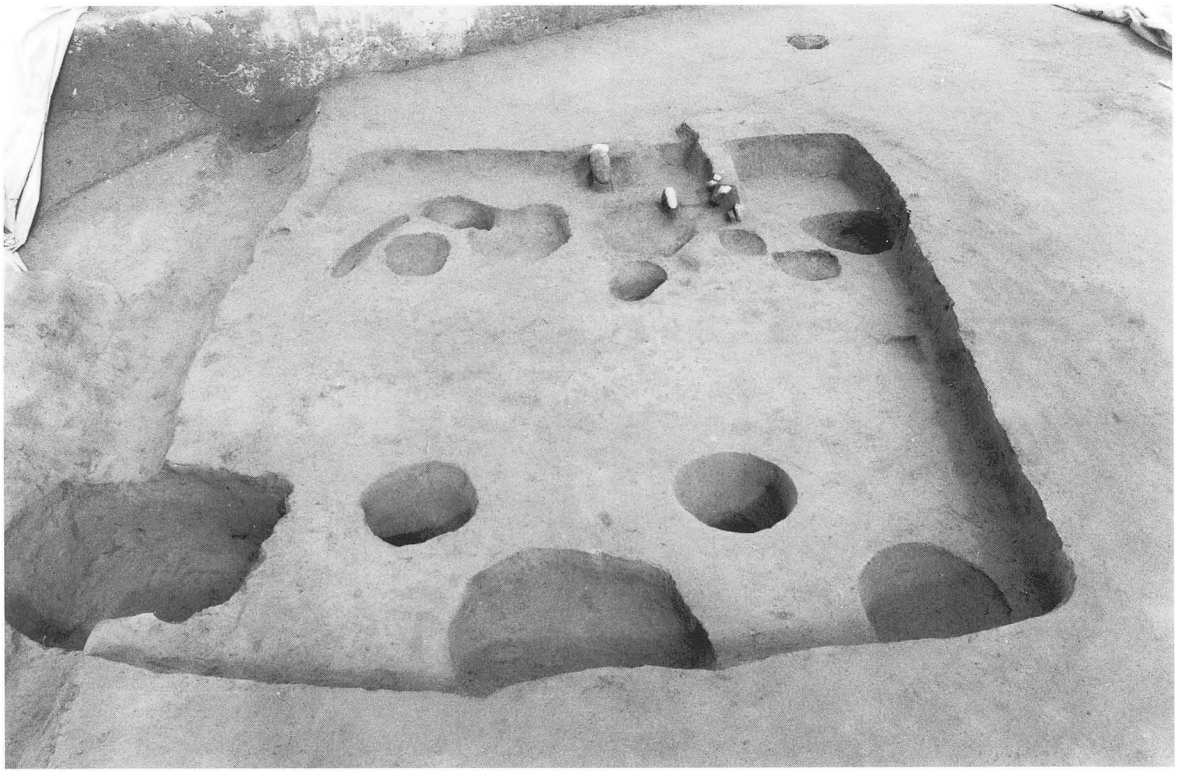
6. Ⅱ区SX2・3完堀（北より）

7. Ⅱ区SX4完堀（東より）

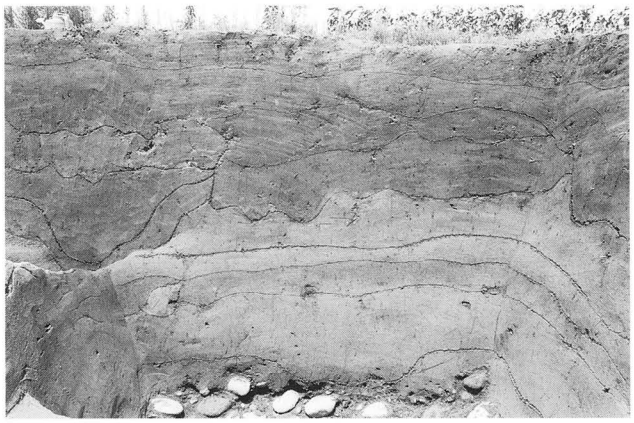


8. Ⅱ区調査風景（東より）

写真6



1. Ⅲ区SI1完堀（西より）



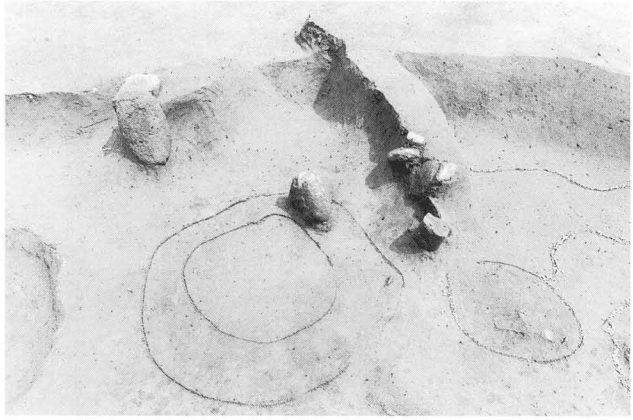
2. Ⅲ区北壁断面（南より）

3. Ⅲ区調査風景（北より）

4. Ⅲ区SI1検出状況（南より）

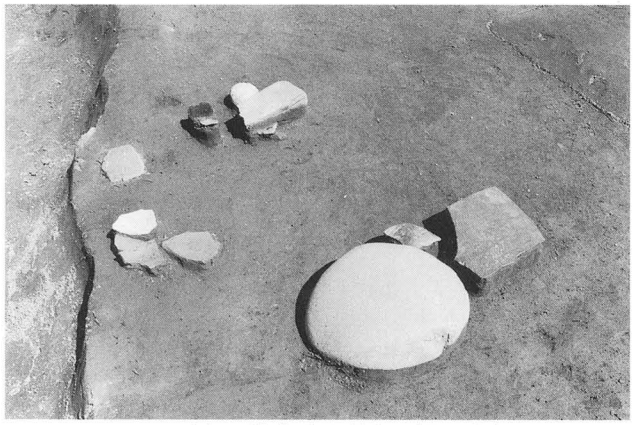
5. Ⅲ区SI1断面（西より）

写真７

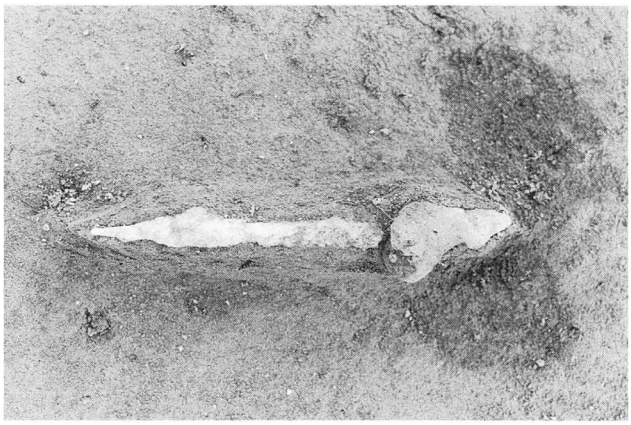


1. Ⅲ区SI1カマド（西より）

2. Ⅲ区SI1カマド周辺遺物出土状況（北西より）



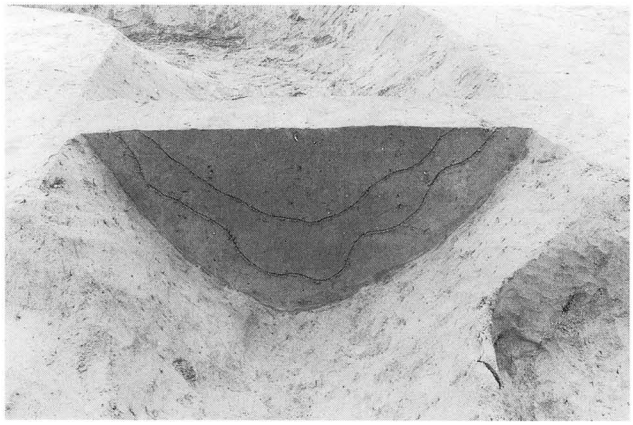
3. Ⅲ区SI1遺物出土状況（北より）



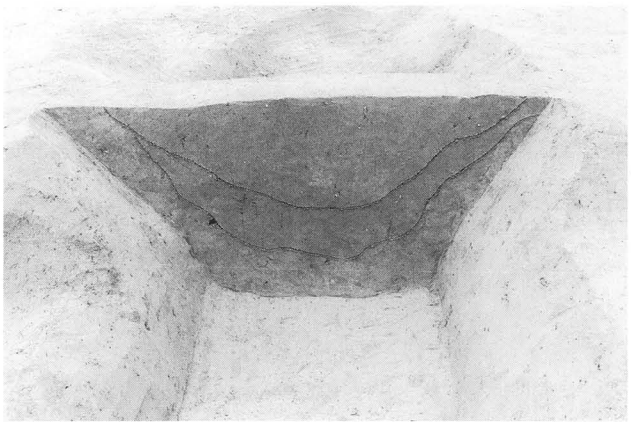
4. Ⅲ区SI1鉄製品出土状況

5. Ⅲ区SI1調査風景

6. Ⅲ区SD3・4完堀（南より）



7. Ⅲ区SD3断面（北より）

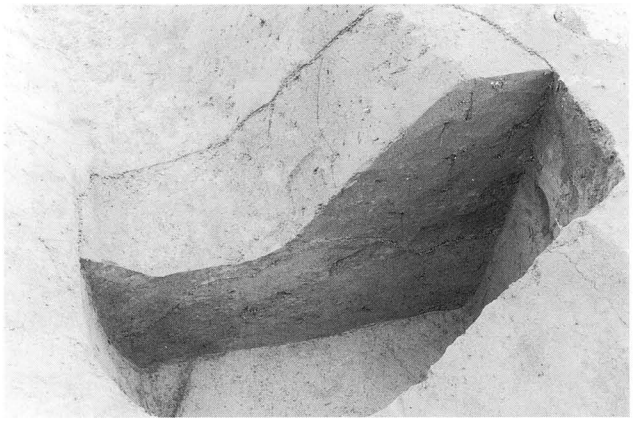


8. Ⅲ区SD4断面（北より）

写真 8

1. Ⅲ区SK3断面（南より）

2. Ⅲ区SK2・3完堀（北より）

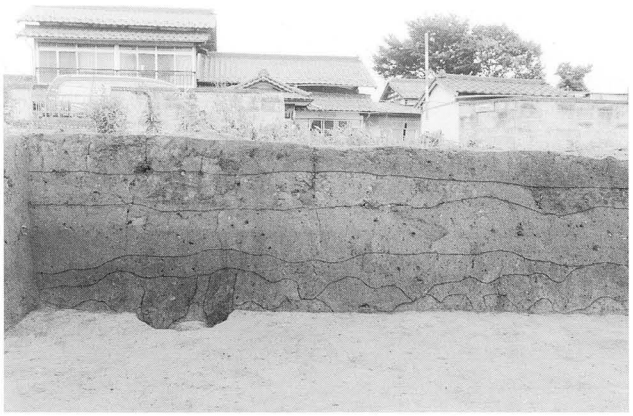


3. Ⅲ区SK7断面（西より）

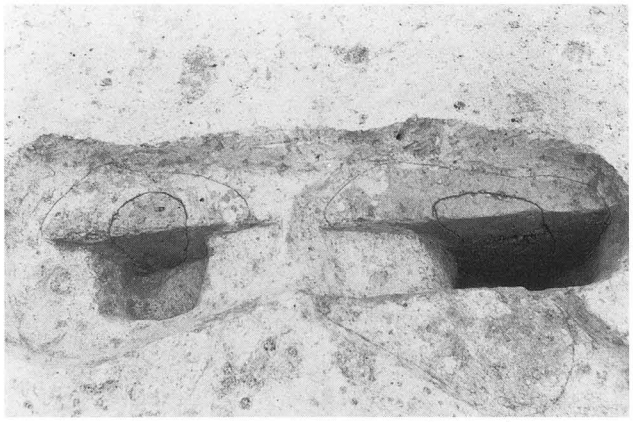
4. Ⅲ区SK7完堀（北より）

5. Ⅳ区SB1全景（南より）

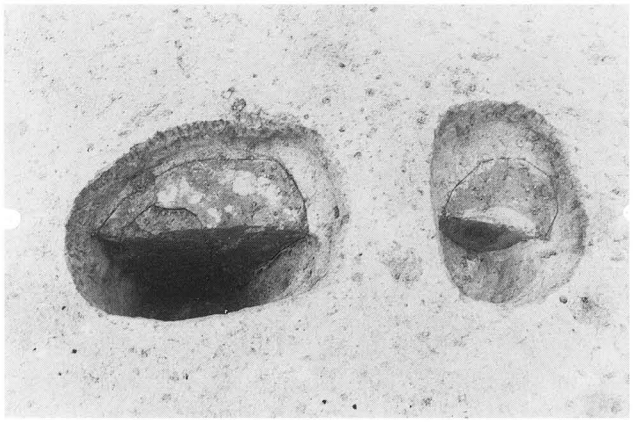
写真９



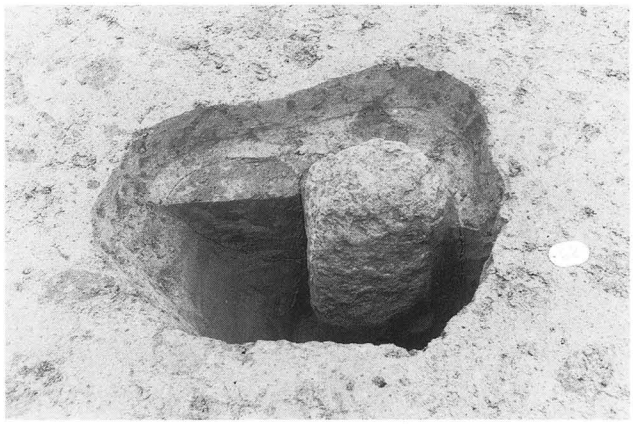
1. Ⅳ区北壁断面（南より）



2. Ⅳ区SB1　P44・45断面（南より）



3. Ⅳ区SB1　P54・55断面（南より）

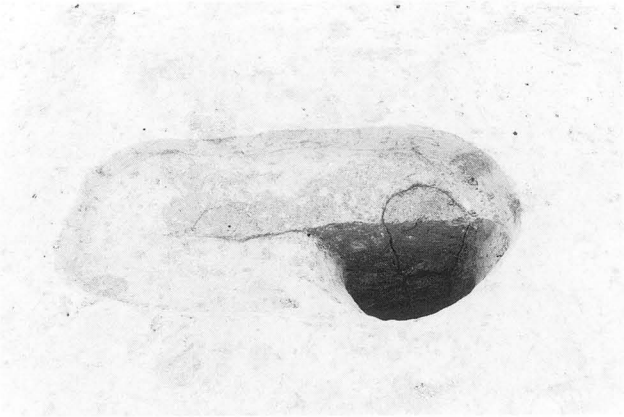


4. Ⅳ区SB1　P62断面（北より）

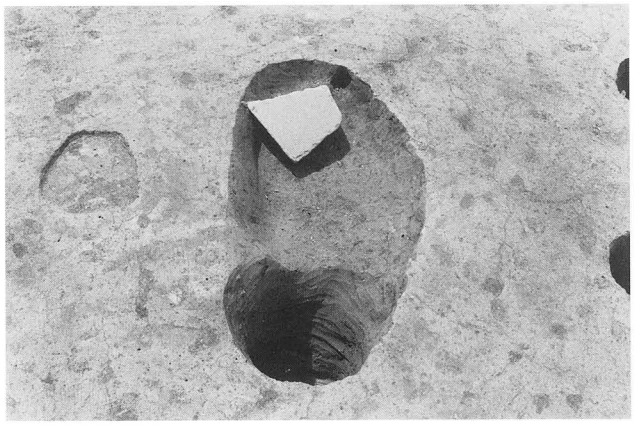
5. Ⅴ区全景（東より）

写真10

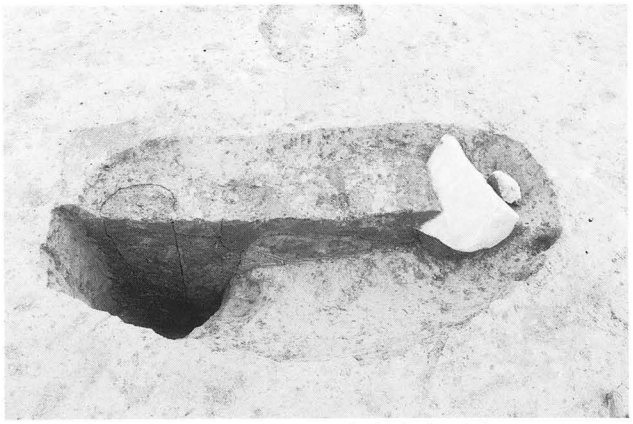
1. Ⅴ区SB2（東より）



2. Ⅴ区SB2　P24断面（西より）



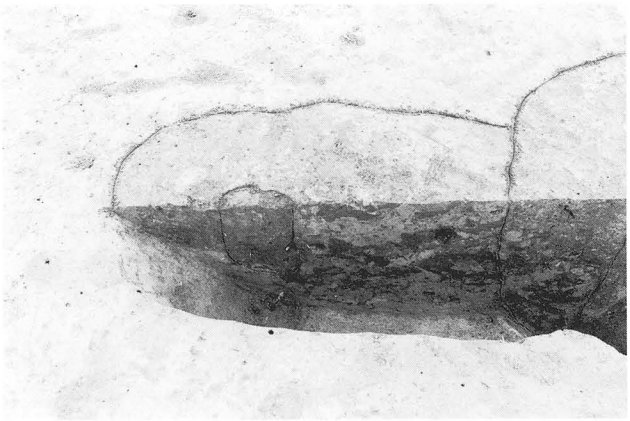
3. Ⅴ区SB2　P32完堀（北より）



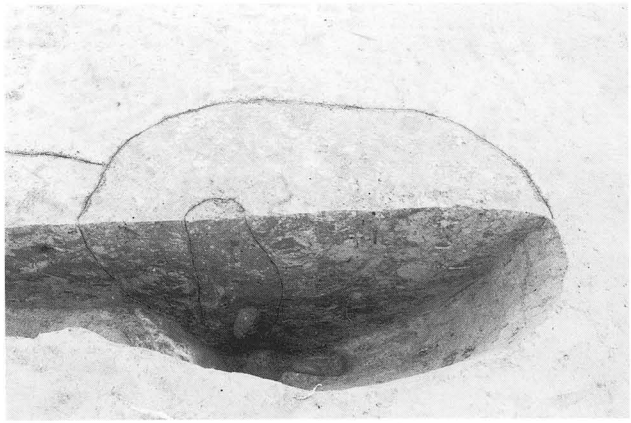
4. Ⅴ区SB2　P32断面（西より）

5. Ⅴ区SB3（東より）

6. Ⅴ区SB3　P8・9完堀（北西より）

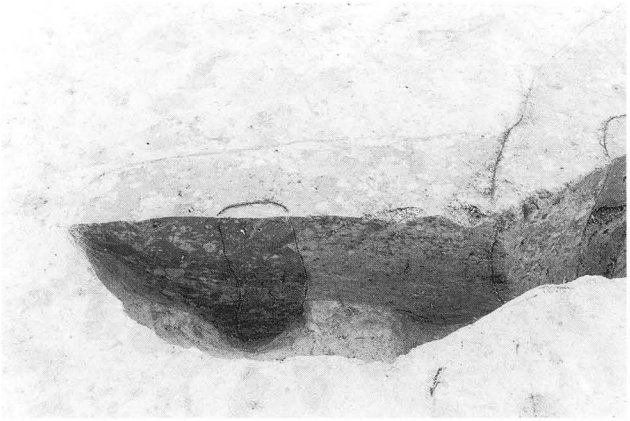


7. Ⅴ区SB3　P9断面（南より）

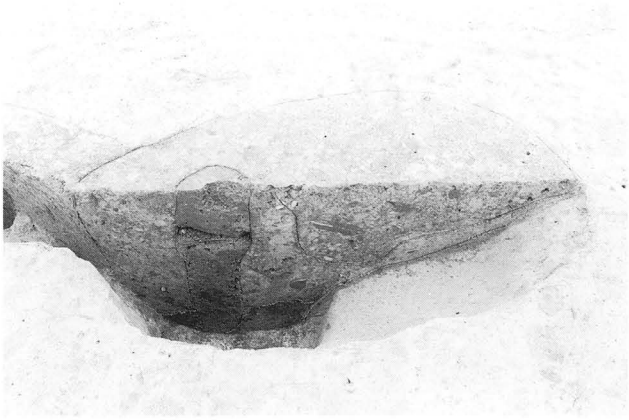


8. Ⅴ区SB3　P8断面（南より）

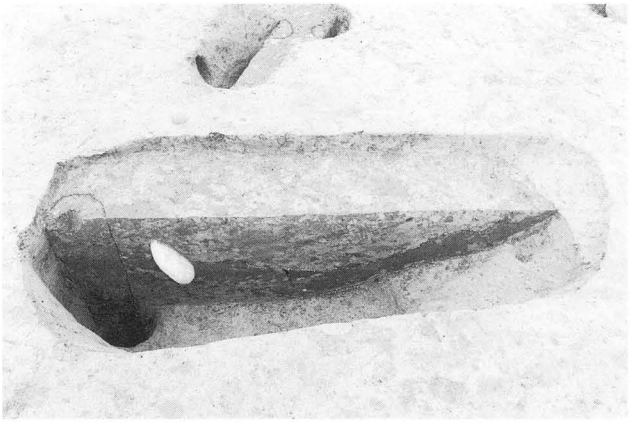
写真11



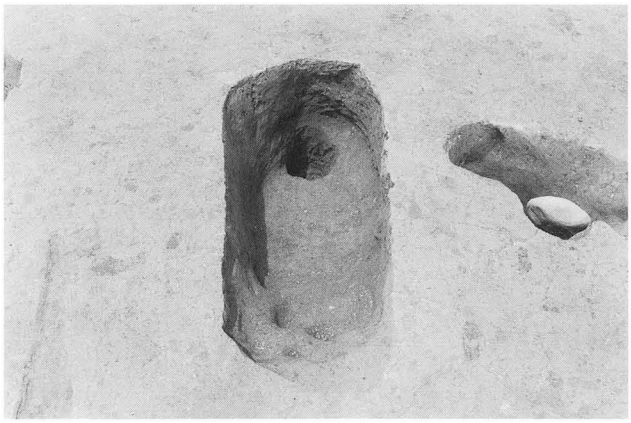
1. Ⅴ区SB3　P11断面（南より）



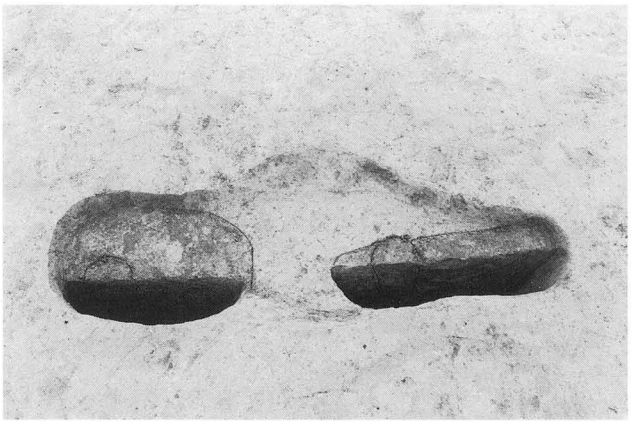
2. Ⅴ区SB3　P10断面（南より）



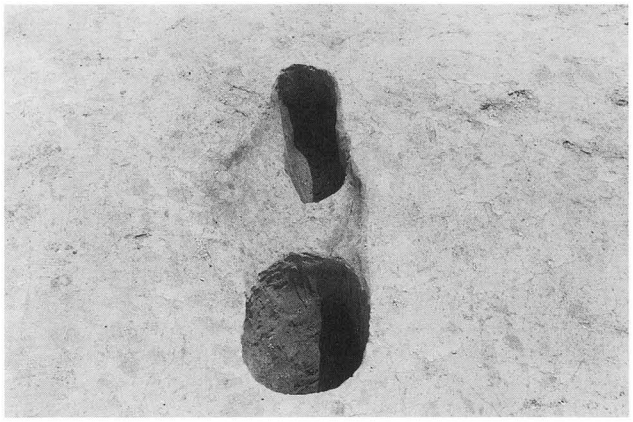
3. Ⅴ区SB3　P33断面（西より）



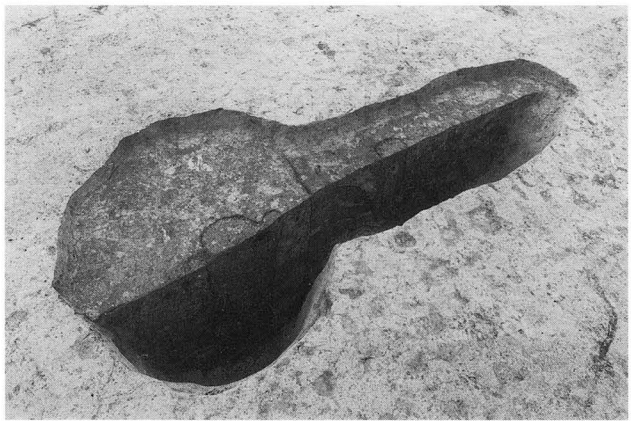
4. Ⅴ区SB3　P33完堀（東より）



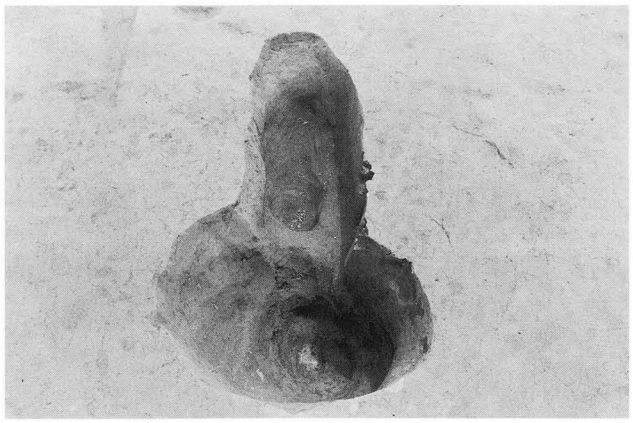
5. Ⅴ区SB3　P36・37断面（南より）



6. Ⅴ区SB3　P36・37完堀（西より）

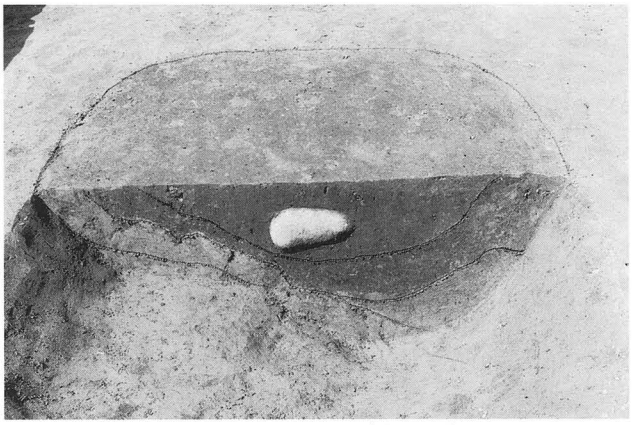


7. Ⅴ区SB3　P34・35断面



8. Ⅴ区SB3　P34・35完成

写真12



1. Ⅴ区SK9断面（南より）

2. Ⅴ区SK8断面（南より）

3. Ⅴ区小溝状遺構群完堀（西より）

4. Ⅴ区調査風景（北より）

5. Ⅵ区東壁断面（西より）

6. Ⅵ区水田跡（南より）

7. Ⅵ区焼け礫集中部（南東より）

8. Ⅵ区礫露出状況（西より）

写真13

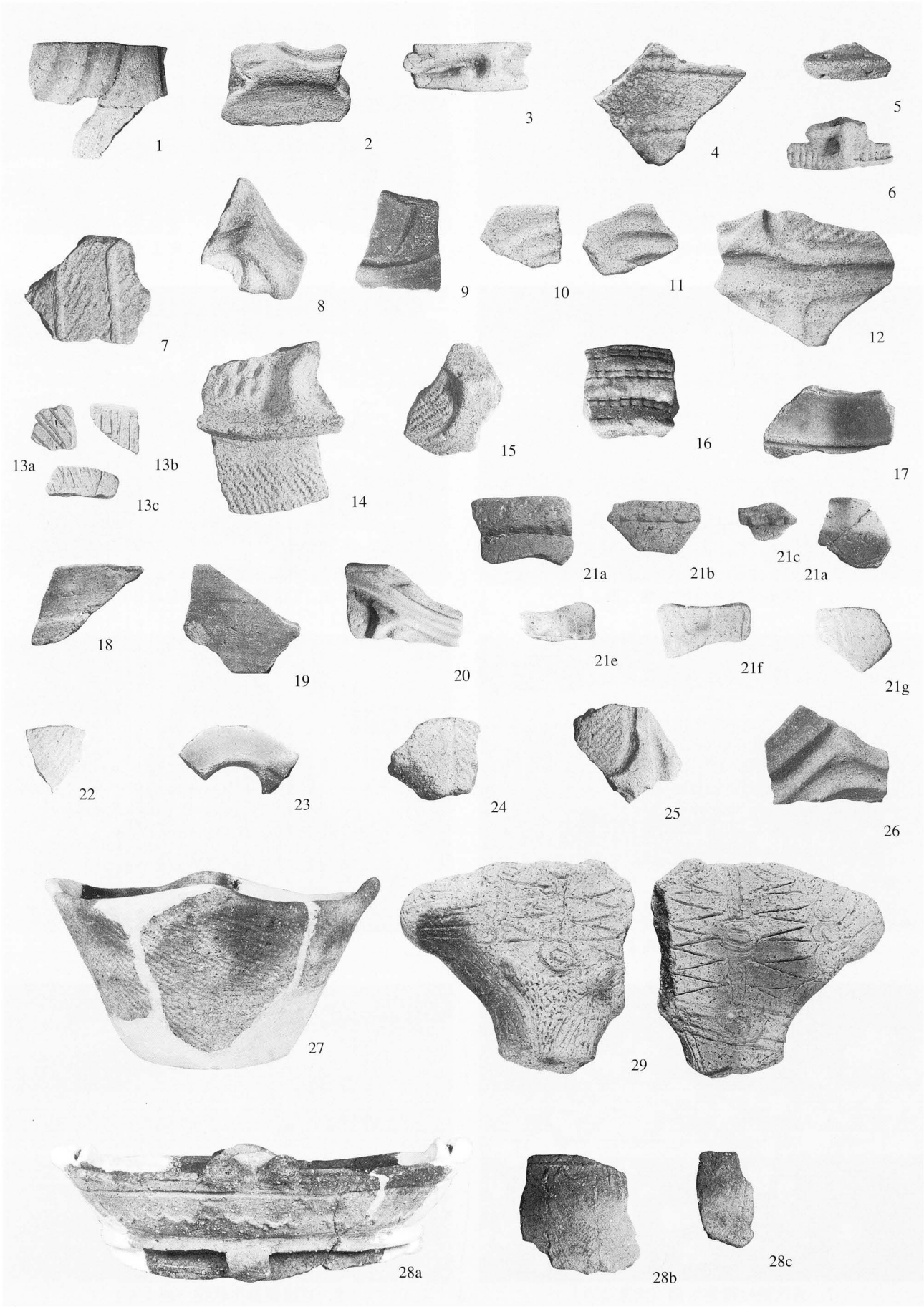

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13a
13b
13c
14
15
16
17
18
19
20
21a
21b
21c
21a
21e
21f
21g
22
23
24
25
26
27
29
28a
28b
28c

写真14出土遺物(1)

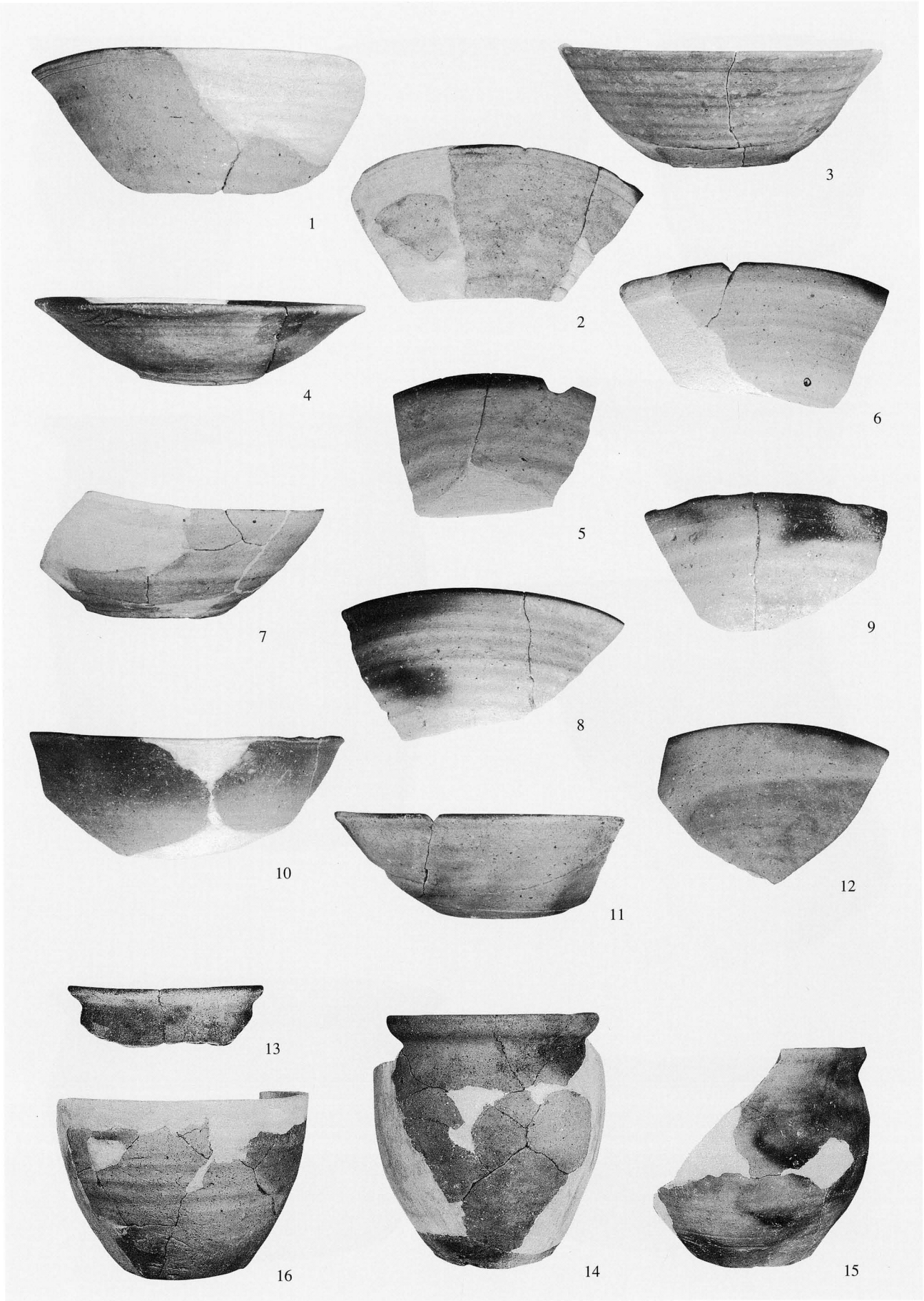
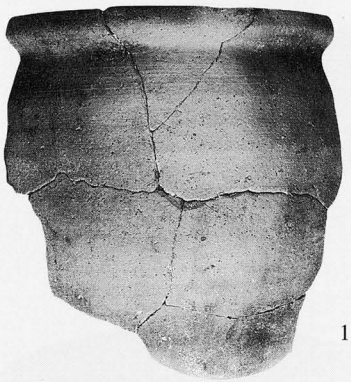
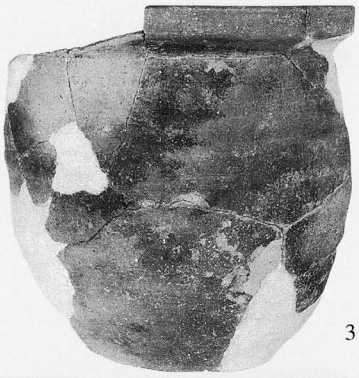
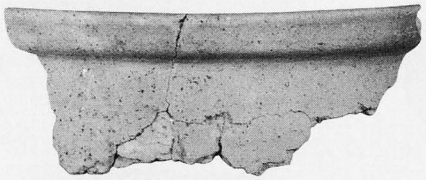


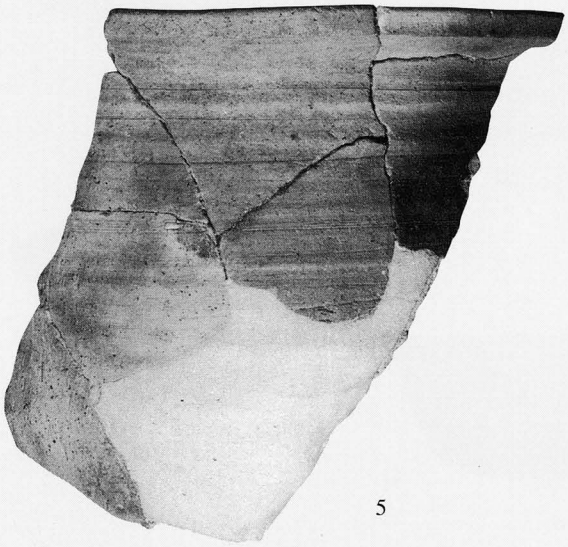
写真15　出土遺物(2)


1

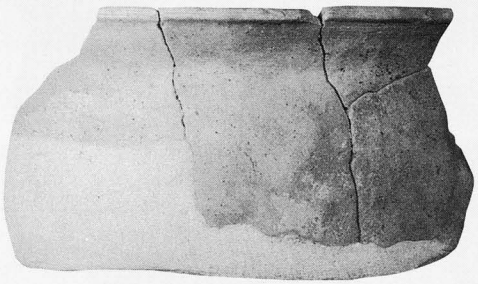
2


3


4


5

6


7

8

写真16　出土遺物(3)

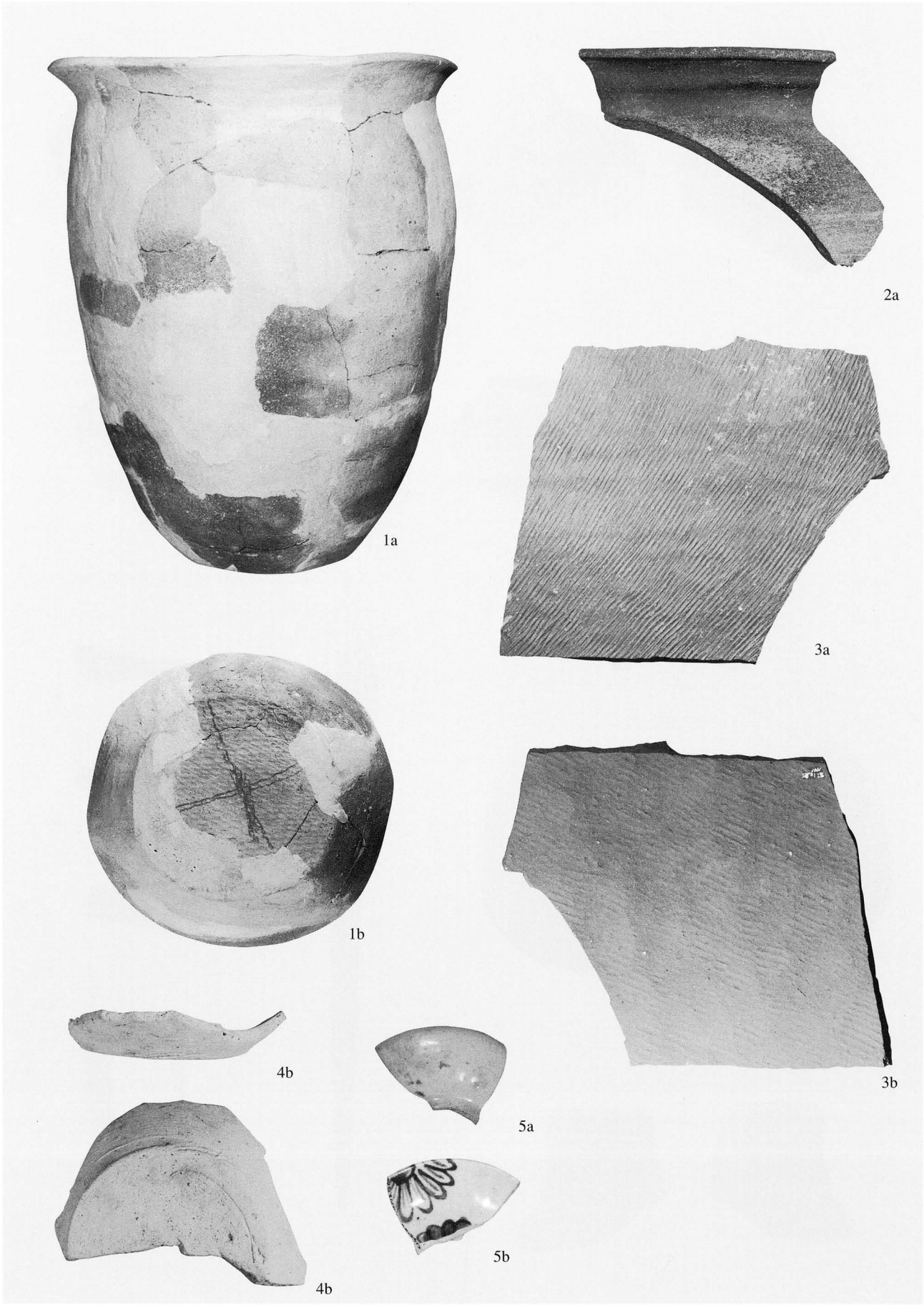


写真17　出土遺物(4)

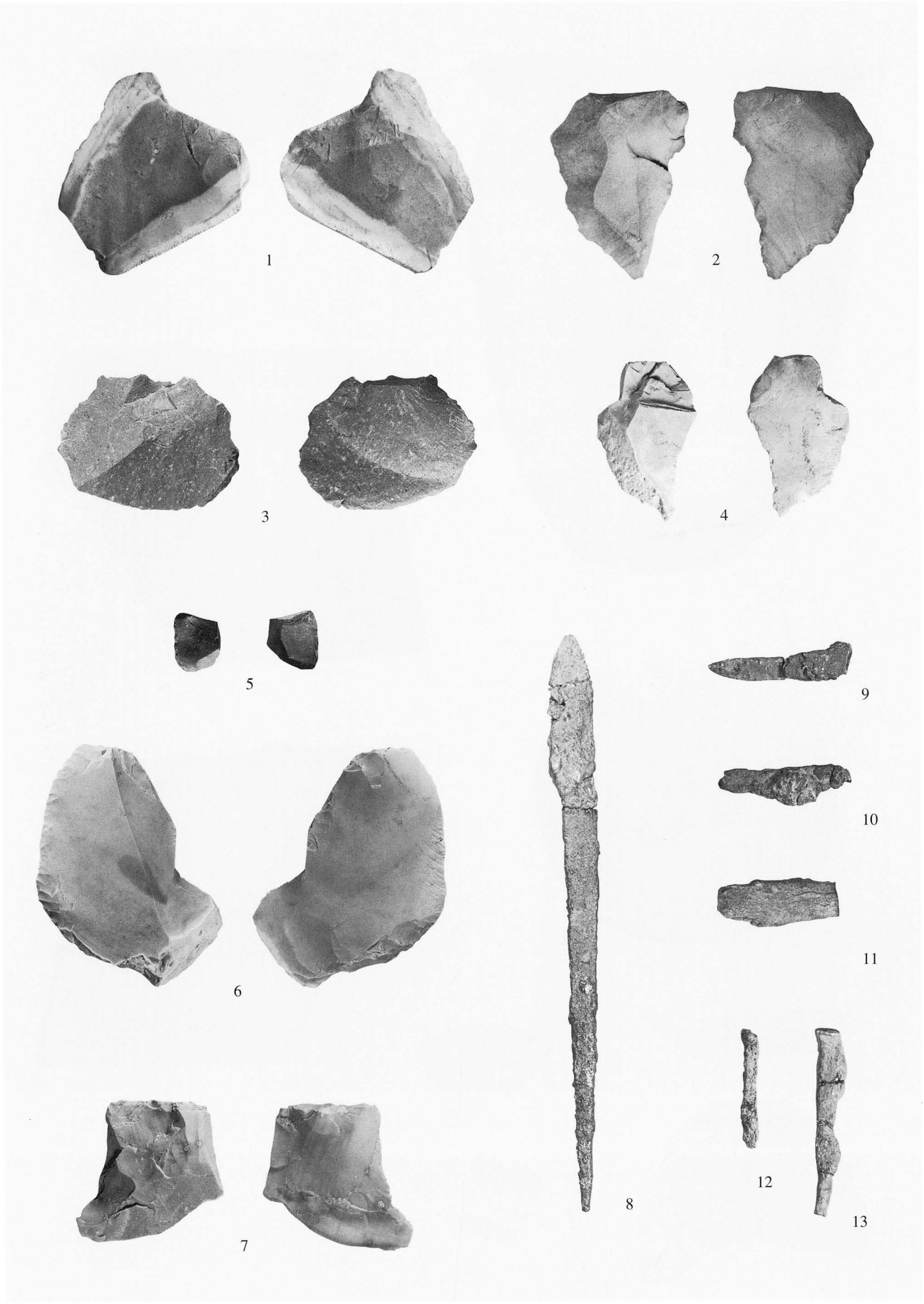
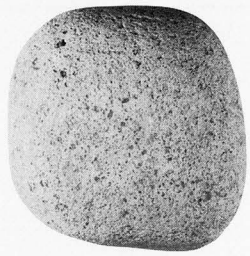
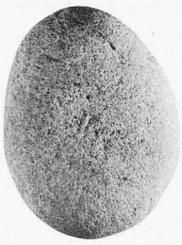
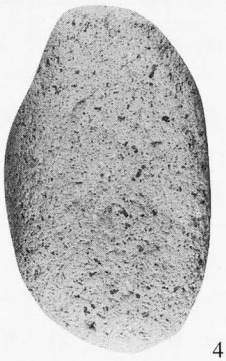


写真18　出土遺物(5)

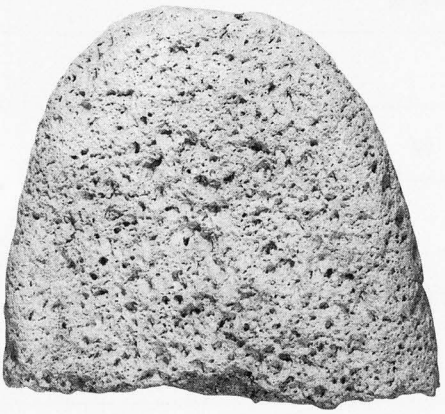

1

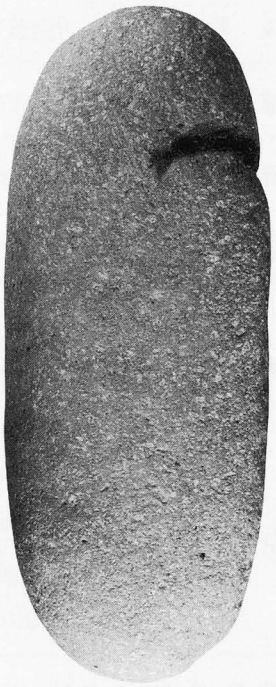

2

3

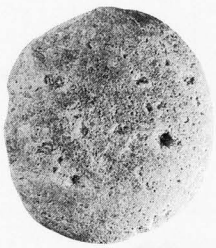

4

5


6


9

7



8

写真19　出土遺物(6)

報告書抄録

ふりがな	ふなとまえいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	船渡前遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第237集
編著者名	吉岡恭平　佐藤　淳
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　仙台市青葉区国分町三丁目7－1　TEL 022－214－8893・8894
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
船渡前遺跡（ふなとまえいせき）	宮城県仙台市（みやぎけんせんだいし） 太白区山田（たいはくくやまだ） 字船渡前（あざふなとまえ） 富田字八幡西（とみたあざやはたにし）	04100	01171	38°12′28″	140°50′45″	1998.04.13 ～ 1998.07.29	3200㎡	インターチェンジ建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
船渡前遺跡	散布地 集落跡	縄文・平安 近世以降	竪穴住居跡 堀立柱建物跡 溝跡・土坑	縄文土器・土師器 須恵器・陶磁器 石製品・鉄製品	古代の集落 近世以降の建物跡

仙台市文化財調査報告書第237集

船 渡 前 遺 跡

発掘調査報告書

1999年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目７－１
文化財課 022(214)8893

印刷　株式会社 仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹3丁目1-14
TEL 231-2245